館蔵資料調査研究報告書２

見島ジーコンボ古墳群

第 151 号墳出土資料調査報告

2012

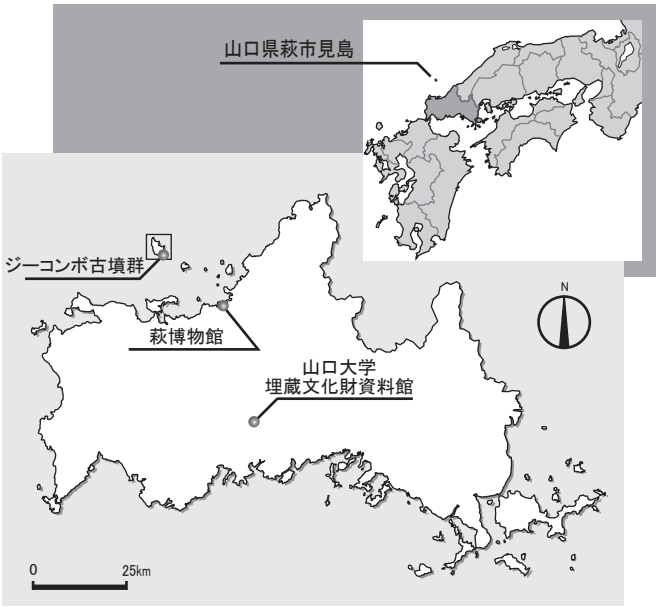
山口大学埋蔵文化財資料館

見島ジーコンボ古墳群　第１５１号墳出土資料調査報告

二〇一二年　山口大学埋蔵文化財資料館

見島ジーコンボ古墳群

第151号墳出土資料調査報告



2012

山口大学埋蔵文化財資料館

序

山口大学が所在する県内五つの地区（山口市：吉田地区・白石地区、宇部市：小串地区・常盤地区、光市：光地区）は、いずれも遺跡の上に立地しています。山口大学埋蔵文化財資料館は、本学の施設拡充等工事により遺跡が破壊される可能性が生じた場合、文化財保護のための発掘調査を実施しています。加えて、その調査・研究成果を報告書の刊行、実物資料展示など様々な方法により広く地域社会に公開することを重要な責務と考えています。

さて、当館には上記構内遺跡から出土した資料の他にも、山口県の著名遺跡から出土した資料が数多く収蔵されています。これは当館設立以前に本学教員により調査され、本学各所に収蔵されていたものを継承した資料群です。これらの資料を、当館では展示等により活用を図って参りましたが、昨年度より収蔵資料の継続的な調査研究を一層尽力するため、「館蔵資料調査研究報告書」の刊行を開始いたしました。

昨年度に引き続き、今年度も国指定史跡『見島ジーコンボ古墳群』から出土し、当館および萩博物館に収蔵されている資料の調査報告を刊行することとなりました。見島ジーコンボ古墳群出土資料は、当館が収蔵する県内遺跡資料の中でも特に重要と位置づけているものです。本年度も約200基の存在が推定される墳墓中の1基に限定した報告となりますが、本書が考古学・歴史学・地域史研究等の基礎資料として活用いただければ望外の喜びと存じます。

最後になりますが、当館の調査・研究活動にあたって、ご支援、ご協力を頂いた関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げます。今後とも引き続き変わらぬご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年3月

山口大学埋蔵文化財資料館長

纐纈　厚

例言

1．本書は、昭和35年（1960）から昭和37年（1962）の3ヶ年にわたり、山口県教育委員会および萩市教育委員会の合同により実施された、萩市見島に所在する「ジーコンボ古墳群」発掘調査成果の再整理調査報告である。

2．上記の調査で出土した資料は、萩博物館（山口県萩市堀内355番地所在）と山口大学埋蔵文化財資料館（山口県山口市吉田1677-1所在）に分有保管されている。今回調査の対象とした第151号墳出土品に関しては、土器類と金属器類は萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に、人骨は山口大学埋蔵文化財資料館に収蔵されている。

3．出土資料の確認および整理作業は、横山成己（山口大学埋蔵文化財資料館助教）、松浦暢昌（山口大学事務局情報環境部総務係教務補佐員）、乃美友香（山口大学事務局情報環境部事務補佐員）が担当した。

4．出土資料の実測については、土器類の実測を横山・松浦が、鉄製品の実測を横山・松浦・大熊玲奈（山口大学人文学部人文社会学科4年生）・河野和弘（山口大学人文学部人文社会学科4年生）が、銅製品の実測を横山・(株)吉田生物研究所が行った。写真撮影および製図・整図は横山・松浦が行った。

5．人骨資料については、松下孝幸氏（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム名誉館長）に鑑定を依頼し、玉稿を賜った。

6．山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の金属器類については、山口大学所蔵学術資産継承検討委員会による予算配分を受け、（株）吉田生物研究所に委託し保存処理を行った。

7．山口大学埋蔵文化財資料館所蔵金属器類のＸ線撮影は（株）吉田生物研究所に委託した。撮影フィルムの画像データ化に関しては、山口大学医学部附属病院放射線部の岩永秀幸副技師長に協力いただいた。

8．銅製品の科学分析は（株）吉田生物研究所に委託した。

9．本書は横山と松浦が分担執筆した。分担は目次に記している。編集は松浦の補佐を得て横山が行った。

10. 本書を作成するにあたり、下記の方々に協力・助言を得ました。記して感謝の意を表します。

小林 善也　清水 満幸　杉原 和惠　原田 光朗　藤野 好博　松下 孝幸
村田 裕一　渡辺 一雄　萩博物館各氏　（株）吉田生物研究所

凡例

１．本報告書における見島ジーコンボ古墳群の遺構番号は、『見島総合学術調査報告』(山口県教育委員会 1964)で付されたものに準拠している。

２．出土資料については、見島ジーコンボ古墳群第151号墳の略号を「ＭＪ151」とし、萩博物館所蔵品の土器類に「Ｈ」、銅製品に「Ｈbr」、山口大学埋蔵文化財資料館所蔵品の土器類に「Ｙ」、鉄器類に「Ｙｉ」、銅製品に「Ｙbr」、人骨に「ＴＢ」の略号を付して識別している。

３．遺物図の縮尺については、以下のように統一している。

土器…1/2　金属器…1/2　玉類…1/2

４．遺物の実測図は、下記のように分類した。

断面黒塗り……須恵器、磁器、金属器

断面白抜き……土師器

５．土器の色調記号は、主として農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

本文目次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境
第1節　地理的環境……（横山）…… 1
第2節　歴史的環境……（横山）…… 1

第Ⅱ章　第151号墳の調査
第1節　昭和36年の現地調査……（横山）…… 4
第2節　第151号墳の出土遺物
第1項　土器類
1．須恵器……（横山）……10
2．磁器……（横山）……10
3．土師器……（松浦）……11
第2項　金属器
1．銅製品……（横山）……22
2．鉄製品……（横山）……27

第Ⅲ章　第151号墳の考察
第1節　遺物に見る築造・埋葬年代……（横山）……42
第2節　第151号墳の特徴……（横山）……44

付篇
1　山口県萩市ジーコンボ古墳群出土の人骨……（松下孝幸・松下真実）……47
2　見島ジーコンボ古墳群第151号墳および第154号墳出土土師器について
…（松浦暢昌）……53
3　見島ジーコンボ古墳群第151号墳出土金属器の成分分析調査…（吉田生物研究所）……59
4　見島ジーコンボ古墳群第154号墳補遺……（横山成己）……80

挿図目次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

図1 萩市見島遺跡分布図……3

第Ⅱ章　第151号墳の調査

図2 見島ジーコンボ古墳群分布図 ……5・6

図3 第151号墳石室実測図 ……9

図4 第151号墳出土土器実測図①……12

図5 第151号墳出土土器実測図②……13

図6 第151号墳出土土器実測図③……14

図7 第151号墳出土銅製品実測図……23

図8 第151号墳出土鉄製品実測図（中央部）①……29

図9 第151号墳出土鉄製品実測図（中央部）②……30

図10 第151号墳出土鉄製品実測図（西端部） ……30

図11 第151号墳出土鉄製品実測図（地点不明） …31

第Ⅲ章 第151号墳の考察

図12 第151号墳出土器類変遷試案 ……43

写真目次

第Ⅱ章　第151号墳の調査

写真1 第151号墳石室全景 ……8

写真2 現地保存されている第151号墳石室 ……8

写真3 第151号墳石室内「銅湯こぼれ」出土状況 ……8

写真4 第151号墳出土土器①……15

写真5 第151号墳出土土器②……16

写真6 第151号墳出土土器③……17

写真7 第151号墳出土土器④……18

写真8 第151号墳出土土器⑤……19

写真9 第151号墳出土土器⑥……20

写真10 第151号墳出土銅製品① ……24

写真11 第151号墳出土銅製品X線画像……25

写真12 第151号墳出土銅製品② ……26

写真13 第151号墳出土鉄製品(中央部)① ……32

写真14 第151号墳出土鉄製品(中央部)①X線画像 ……33

写真15 第151号墳出土鉄製品(中央部)② ……34

写真16 第151号墳出土鉄製品(中央部)②X線画像 ……35

写真17 第151号墳出土鉄製品(西端部) ……36

写真18 第151号墳出土鉄製品(西端部)X線画像 ……37

写真19 第151号墳出土鉄製品(地点不明) ……38

写真20 第151号墳出土鉄製品(地点不明)X線画像 ……39

表目次

第Ⅱ章　第151号墳の調査

表1 第151号墳出土遺物(土器)観察表……21

表2 第151号墳出土遺物(銅製品)観察表……27

表3 第151号墳出土遺物(鉄製品)観察表（中央部） ……40

表4 第151号墳出土遺物(鉄製品)観察表（西端部） ……41

表5 第151号墳出土遺物(鉄製品)観察表(地点不明) ……41

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

萩市見島は、萩市浜崎港から北北西に約46.3㎞離れた日本海中に浮かぶ孤島である。島の平面形態は南を底辺とする不等辺三角形を呈し、南北約4.6㎞、東西約2.5㎞、島周約24.3㎞を測り、総面積はおよそ7.8㎢となる。

見島は火山島であり、地質は玄武岩類、角礫凝灰岩および海岸低地部の沖積層で構成される。島は中央部から西部にかけて高く、現在航空自衛隊見島分屯基地が置かれるイクラゲ山（標高181m）が最高峰となっている。また、瀬高と呼称される中央山地により南北が分断されており、島の南部および北東部に見られる湾入部周域には僅かながら沖積低地が形成されている。それぞれに本村・宇津の集落が発達し、現在でも島への数少ない出入り口として存在する。

これら海岸域にある天然の低地には、島裾を洗う波浪から生じた岩屑が砂礫浜堤や礫浜堤を形成している。見島ジーコンボ古墳群は、島の南岸線東端の晩台山南麓から、本村港の東にある孤立丘高見山の東麓までの間に形成された、東西長約300m、幅約50m～100m、標高約7mの礫浜堤（横浦海岸）に立地している。[註1]

第2節　歴史的環境

1．遺跡の分布状況（図1）

見島に埋存する遺跡の様相については、ジーコンボ古墳群以外は全く明らかとなっていないと言っても過言では無かろう。現在公表されている埋蔵文化財包蔵地の分布についても、山口県教育委員会と萩市教育委員会が昭和35年（1960）から同37年（1962）まで実施した合同調査に負うところが大きい。

見島における踏査は、昭和35年合同調査の9月4日から3日間にかけて実施したとされる。『見島総合学術調査報告』では、その成果として島内の13地点が紹介されているが、[註2]現在の周知の埋蔵文化財包蔵地と照合すると、「見島小学校々庭付近の遺物包含層」「薬師堂背後の遺物包含層」「見島体育館付近の遺物散布地」が**見島本村遺跡**（図1の1）、「本村東区の遺物散布地と包含層」「本村部落の東部の水田」「杉山西南斜面の遺物散布地」が**堅田遺跡**（図1の2）、「片尻の遺物散布地」が**片尻遺跡**（図1の6）、「草谷の遺物散布地」が**草谷遺跡**（図1の7）、「船戸の遺物散布地」が**船戸遺跡**（図1の9）、「船見田の遺物散布地」が**船見田遺跡**（図1の10）、「大竹の遺物散布地」が**大竹遺跡**（図1の11）、「瀬田の石器発見地」が**瀬田遺跡**（図1の3）に該当するようである。現在の本村港と本村漁港の間にある小丘で、古く大正5年（1916）に土師器壺2点と硬玉製勾玉1点が出土したとされ、[註3]昭和35年の合同調査においても土師器壺片4点が確認された「宮崎山の遺物散布地」は、その後明確な資料の採取に恵まれなかったのか現在では包蔵地から除外されている。また、合同調査における踏査がジーコンボ古墳群発掘調査の前提としての「見島における居住の時代的上限」「古墳の築造に先行する文化の有無」「当時の地形や島の生産力」「村落の規模とその継続期間」の確認等に目的を置いていたためか、当時既にその位置が推定されていた中世の城館跡である**要害山城跡**（図1の4）、**高見山城跡**（図1の5）に関して言及されていない。また、平成元年（1989）発行の『萩市史』第2巻では、要害山城跡の北北西約1㎞の丘陵上に

土塁・石垣が見られることから、城跡の存在が指摘されている[註4]（図1の8）。

以上、見島において確認されている遺跡の分布状況を概観した。居住に適した低地が狭小である見島においては、工事中の埋蔵文化財の発見もやはり限定的な地域に限られるようであり、昭和30年以降の新知見もほぼ存しない状況と言える。

2. 見島ジーコンボ古墳群造営以前の見島

前述したように、萩市見島においてはジーコンボ古墳群以外の遺跡に未だ調査の鍬が入れられていない。そのため、各遺跡で採取された断片的な資料からジーコンボ古墳群造営以前の様相を推し量る他手段がないようである。

萩市見島発見の先史時代遺物に関しては、平成元年（1989）発行の『萩市史』に詳しい。同書によると、昭和35年（1960）より開始された合同調査の段階では、弥生時代以前に所属する遺物は同年に本村寺山南麓の宅地（図1の3）で小学生児童により発見された環状石斧の1点に限られた状態であった[註5]が、昭和45年（1970）に本村の中国電力島内発電所の増築工事にて縄文時代中期に比定される土器片が、昭和59年（1984）には見島小学校南方の水田基盤整備工事にて、遺物包含層と見られる黒褐色粘土層中から縄文時代後晩期の土器片とともに石棒片、打製石斧、石錘、そして環状石斧片などが出土したとされる。両地点とも現在の堅田遺跡（図1の2）内に位置しており、見島における人類活動が島南端の沖積低地部において開始されたことを示唆する重要な資料となっている。弥生時代の遺物については、同じく見島小学校南方水田基盤工事で確認された黒褐色粘土層中から弥生時代前・後期の土器片が出土しているが、その総量はさして多くないそうである。古墳時代の遺物も、やはり堅田遺跡を中心に多数の土師器、須恵器が採集されている状況である。昭和35年調査に伴い実施された踏査で、現在見島本村遺跡と命名されている地点で確認された多数の遺物も、主として当時代に所属するものと推される。

上記の資料はいずれも正式な発掘調査を経ずしての採集品であり、遺構の確認がなされていない状況下では見島の先史時代について多くを語り得ない。現状としては、見島では古く縄文時代中期から弥生時代にかけ、本土に面する本村周辺域において少なくとも一時的な人類の上陸活動が行われ、古墳時代に至ると小規模ではあろうが同地域に集落が形成され定住生活が行われたものと推察するに止めたい。

【註】

1）地理的環境は文献8による。

2）文献7の400～402頁

3）ジーコンボ古墳群に関する最初期の報告は大正12年（1923）に三輪善之助氏によってなされている（文献15）が、その文中に「古墳」の項目で宮崎山出土遺物が紹介されている。

4）合同調査前年である昭和34年（1959）に発行された『萩市誌』には、明確な位置は示されていないが城山址として高見山城跡の存在が、古城址として要害山城跡の存在が記されている。また平成元年（1989）発行の『萩市史』第2巻（文献10）では、本村北西部のみのぼし山（蓑干山：標高130m）山上に土塁・石垣が構築されていることが指摘され、「みのぼし山城」の仮名が付されているが、埋蔵文化財包蔵地名としては「要害山城跡」が用いられている。

5）大正15年（1926）に実施された山高郷土史研究会による見島の調査報告（文献13）には見島小学校敷地（現：見島総合センター敷地）にて採取されたとされる弥生土器が報告されており、本村宮崎山での弥生土器採取にも言及されている。同じく両地点について、昭和10年（1935）の山本博氏の報告（文献17）には土器実測図が付されているが、直ちに「弥生土器」とは判じがたいものであり、現在資料の所在も不明確であることから『萩市史』では確実な資料として認めていない。

国指定 史跡 見島ジーコンボ古墳群

1 見島本村遺跡　集落跡（縄文～中世）
2 堅田遺跡　散布地（縄文～古代）
3 瀬田遺跡　散布地（弥生）
4 要害山城跡　城館跡（中世）
5 高見山城跡　城館跡（中世）
6 片尻遺跡　散布地
7 草谷遺跡　散布地
8 要害山城跡　城館跡（中世）
9 船戸遺跡　散布地
10 船見田遺跡　散布地
11 大竹遺跡　散布地

萩市（1971）『萩市地形図 7』（国土座標第Ⅲ系）を転載・加筆

図1　萩市見島遺跡分布図

第Ⅱ章　第151号墳の調査

第1節　昭和36年の現地調査

昭和35年（1960）から3ヶ年にわたり実施された見島ジーコンボ古墳群学術発掘調査において、第1年度は分布調査に当てられ、第151号墳は第2年度である昭和36年（1961）に調査の手が加えられている。萩博物館所蔵資料に同封された注記カードには全て「19610901」の書き込みが見られることから、調査は9月1日の1日限りで実施されたものと想像される。

第151号墳が位置する西部域の各主体部は、『見島総合学術調査報告』におてB式、つまり「石塊や割石を一重にならべて箱形にくんだもので、一見組合せ式の箱形石棺に近い形をしめしている」ものに分類されるが、東～中部域に比すとその分布は密とは言い難い（図2）。その一方で第145～153号、番外7・10号の11基[註1]、第154～157号、番外4～6号の7基がそれぞれ支群を形成しているかのようにも見える。仮に前者を西部域E支群、後者を西部域W支群と呼称すると、昨年度報告した第154号墳[註2]はW支群に、本書で報告する第151号墳はE支群に含まれる。

さて、遺構実測原図や調査日誌等当時の調査記録が発見されていないため、『見島総合学術調査報告』に記載された第151号墳の調査成果報告文を転載すると同時に、山口大学埋蔵文化財資料館において今年度新たに発見された「第28図　第151号墳石室実測図」トレース原図の再トレース図面（図3）を掲載する。

第151号墳　西部地区の東端にあり、一見、組合箱式石棺に似た石室である。内部主体は側石の上縁の深さまで礫浜を掘り下げて構築され、調査の直前、すでに天井石と奥石や入口部の遺構は残っていなかった。

石室の内部には径15センチ内外の円礫が充塡していたが、これを掘り出すときその下部からガラスや瓦器の破片が出土した。また、石室の外側にも須恵器の破片が散乱し、ことに、西北方4.3メートルの浜堤の地面で1箇の和同開珎を検出した。このような状態はかってこの石室が盗掘にあったことを示唆し、周辺の遺物はこの石室から出土した公算が多い。

石室の方位はS65°Wで西南西に面し、奥行約380センチ、幅75ー90センチ、高さ53センチを測り、幅に比べて高さが低い。石室の石材には大部分割石が用いられている点、見島古墳群の中でも特異な存在である。奥石は取り去られて遺存せず、側石は比較的偏平に割った割石と2箇の自然石を縦に立って構築してあるが、かなり損壊しているので、南東側6箇、北西側5箇が残っているにすぎない（第28図、図版24ー1）。

床面は礫浜を掘り下げて造ってあるが、攪乱されている部分が多く、入口に当る箇所に薄い割石数箇が床面を覆うように置いてあった。礫床は小礫を含んだ厚さ2，3センチの黒色土で、やや北東方に低く傾き、須恵器と土師器の破片や鉄刀の金具が西端部付近から出土した。また長さ18センチばかりの偏平な1箇の銅の熔板を薄い割石の下から検出している。人骨の断片と歯牙は西端部と東寄りの2箇所から出土し、歯の数や形状と出土の地点などが、2体の成人骨を埋葬してあったことを物語っている。薄い割石の下に金環1対、素環式柄頭1、鉄刀の断片2、鉄鏃の柄部断片、鉄製金具10箇と刀子1箇が比較的まとまって出土している。なお人骨は保存状態が悪く、17箇の歯牙と四肢骨の小断片で床面に散在しているにすぎなかった。この石室もまた土師器に比べて須恵器の量が多い。

これらの中でことに注意のひかれるものは、銅の「湯こぼれ」であった。鋳造のときに溶解した湯のこぼれたものとみなされるものであるが、或いは湯口から入れてあふれたものをもぎとった「あまり湯」かもしれない。大きさは最も大きいところで約18.5センチ、厚さ約1.5センチを有するものである。被葬者が、鋳銅技術に関係したものであろうか（第29図，図版29の11）。なお上記のように、こ

第Ⅱ章　第151号墳の調査

図2　見島ジーコンボ古墳群分布図

の古墳付近の表土近く西北方約4.3メートルの地上で和同開珎片が発見された（第27図－6）。

また、須恵器破片13、土師器砕片若干の中で須恵器の厚手のものは外面平行条、内面青海波の例が多く、少数、内面同心円のものもある。口縁部は丸みをもった、轆轤による調整のあとをのこす例（第27図 － 5）が1点あるのみである。薄手のものは被せ式の蓋の残片、へら起こしによる平底または付け高台をもった坏の断片である。

他に流土中から200片の須恵器片が出土している。（『見島総合学術調査報告』429-430 頁）

上に見るように、第151号墳の石室に関しては簡略的な報告しかなされていないものの、他の石室と異なり石材に主として割石を用いていることが大きな特徴とされている。調査時の写真（写真1）では両側壁に割板状の石材が用いられているように見えるが、平面図（図3）を信頼すれば、北西壁に比較的大型で横長の割石が用いられているのに対し、南西壁には角柱状の小型の割石が用いられている点にも注目できよう。また側石上面に注目すると、北西壁が石材の自然面を残し比較的粗雑に揃えられているように見られるのに対し、南東壁は石材に面取り加工を施し、水平に整えられているかに見られ、どこかちぐはぐな印象を受ける。天井石、奥壁石と入口部閉塞施設等は遺存していなかったとされるが、古墳群西部域において奥壁が確認された他の石室はいずれも南西方向に開口すると見られることから、本墳においても南西を入口とする報告者の記述は妥当なものであろう。入口付近には薄い割石数個が床面を覆うように置いてあったとされる。閉塞に用いられた石材である可能性が指摘できるものの、断面図を見る限りこれらの割石は床面から遊離している。

次に石室規模に関して確認する。石室長においては、遺存状態の良い北西壁の残長を図面から測定すると約3.2mしかなく、何が根拠となり報告書で3.8mと記載したのか不明である。75～90㎝とされる石室幅においても、付された石室直交断面図を見ると、南東壁が土圧によってか内傾してはいるが、床面幅は1mを超えている。本書では当石室を残長約3.2m×幅約1mと記録しておく。

次に出土遺物に関する記述を確認すると、割石の下から検出されたとされる銅滓は実測図においてもその位置が確認される。やや床面から浮いていることが気にかかるが、比較的原位置を保っている可能性を残す。その一方で同じく「薄い割石の下」から比較的まとまって出土したと記述される金環1対、素環式柄頭1、鉄刀の断片2、鉄鏃の柄部断片、鉄製金具10個、刀子1個については、実測図を見る限り少なくとも耳環（トレース原図では銅環）1対、鉄刀は割石上に記録されており、原位置を保つものとは考え難い。

また床面出土の土器類は須恵器破片13点、土師器砕片若干であり[註3]、厚手（大型※筆者注）の須恵器は甕腹（外面平行条、内面青海波）が多く、口縁部は1点（本書図5のH14）のみで、薄手（小型※筆者注）のものは被せ式の蓋の破片、へら起こしによる平底または付け高台をもった坏の断片とされる。しかし図示されているのは上記の須恵器甕口縁部片1点のみであり、現存する土器資料にも「床面出土」等の注記が見られないため、須恵器坏蓋、身の特定は不可能である。

以上、『見島総合学術調査報告』に記載された第151号墳の調査成果を確認した。次節より現存する出土資料の調査成果を記す。

【註】

1）文献7の「第39図　見島古墳群の分布図Ⅱ」を見ると、第147号墳の南に近接して石室状の書き込みが見られる。これが主体部であれば12基ということになる。

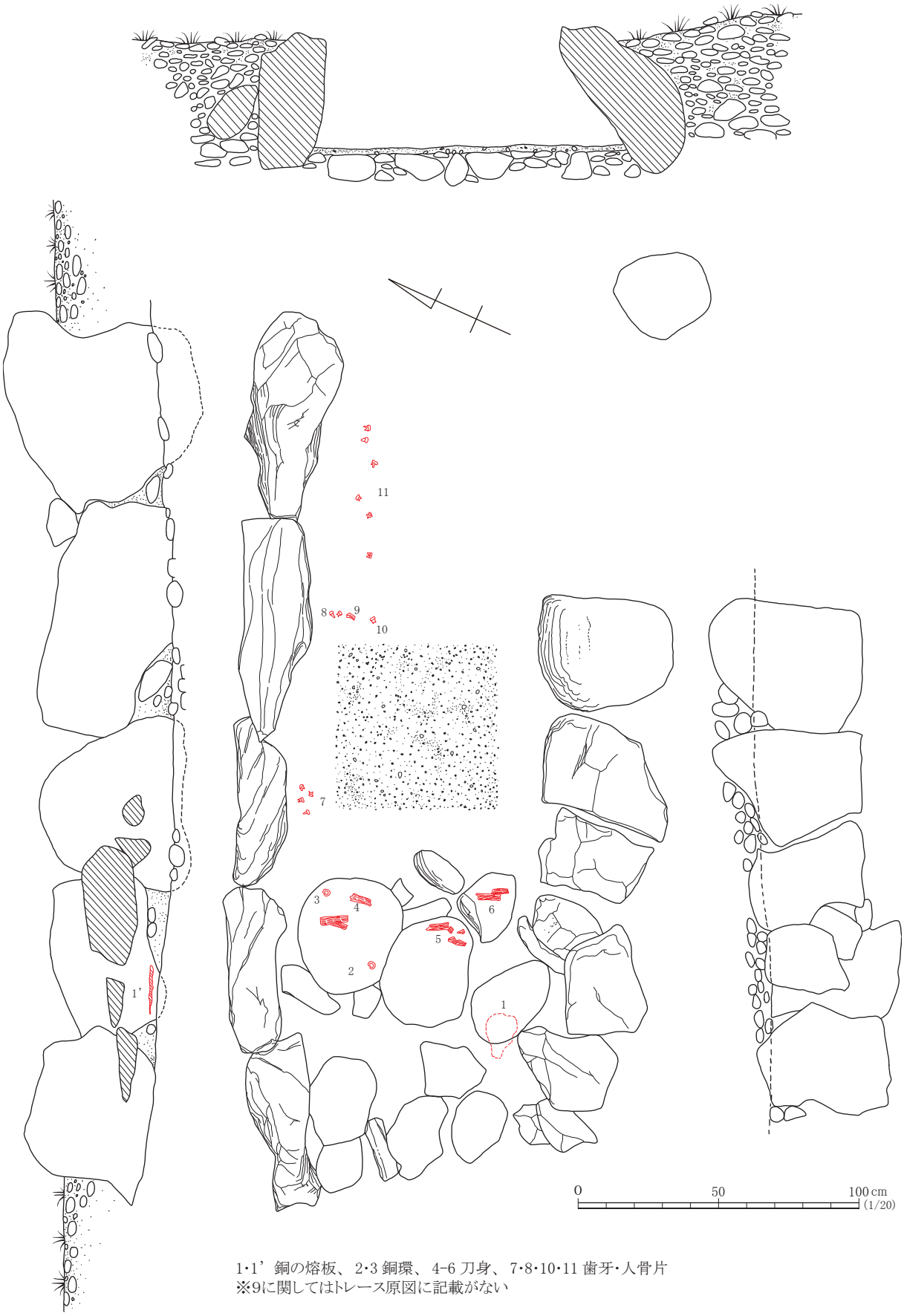
2）文献18

3）一部に「床面出土須恵器は（甕口縁部片※筆者注）1点」とする論考も見られる（文献3）が、これは報告書の誤読である。

写真1　第151号墳石室全景（北東から）
※文献7「図版24　第151号墳石室」を転載

写真2　現地保存されている第151号墳石室（北北東から）

写真3　第151号墳石室内「銅湯こぼれ」出土状況
※文献7「第29図　第151号墳の湯こぼれ出土状況」を転載



1･1’銅の熔板、2･3 銅環、4-6 刀身、7･8･10･11 歯牙･人骨片
※9に関してはトレース原図に記載がない

図3　第 151 号墳石室実測図

第2節　第151号墳の出土資料

第1項　土器類

第151号墳出土土器類は、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分置されているが、大多数は萩博物館に所蔵される。この度の資料調査で、両施設所蔵の土器類が接合した場合は、所蔵先を萩博物館とさせていただいた。また、萩博物館所蔵資料に付された注記カードには、出土した日付と「第151号墳」以外の情報は記載されていないため、出土層位、出土位置等は全くの不明である。確認できた資料には、須恵器、土師器、磁器がある。

1．須恵器（図4・5、写真4～7、表1）

須恵器には蓋坏、甕、長頸壺が存在する。以下に概要を記す。

H1～3は高台付坏身。H1は端部がくの字状に開く高い高台を有し、口縁はわずかに外反する。H2は底・体部境界よりやや内側に両端を鋭く摘み出した小ぶりの高台が付く。高台は内端で接地する。口径に比して器高が低い。H3は底～体部片と口縁部片が接合しないが、胎土、調整等から同一個体として図上復元した。低く大ぶりの高台が底・体部境界に付く。体部は下方から大きく開き、外面にロクロ水引き成形痕が明瞭に残る。H4・H5も同形態の破片と思われる。H6は口縁の小片であるが、器面調整や自然釉の状態から見て壷類の口縁である可能性を残す。内面に焼成時溶着した別個体を打ち欠いた痕跡が見られる。H7は坏身もしくは蓋の底部（天井部）片。器壁が厚いことが特徴として挙げられる。内外面とも著しく表面が風化しており、器面調整等の観察はできない。同一個体らしき破片も見あたらず、第151号墳出土土器資料の中でも異質な存在である。

H8～13は坏蓋。H8は中央部が凹むボタン状のつまみを有する。肩部に微弱な稜を形成し、緩やかに降下して口縁手前で弱く屈曲する。口縁端部は鳥嘴状に下垂させる。H7もほぼ同様の特徴を有するが、器高がやや高く口縁手前の屈曲も強い。口縁端部は丸く下垂させる。H8は前者に比して肩部の屈曲が強く、明瞭な稜を形成する。口縁端部は鳥嘴状に下垂させている。H13も同形態の蓋と思われる。H12は小片であるが器壁が厚く口径も大きいようで、坏以外に用いられた蓋の可能性がある。H11は一見して坏身であるが、天井部外面および上部外面にミガキ調整が施されており、ここでは蓋、もしくは天井部外面が赤色化していることから台等の用途を考えておく。

H14・Y1は甕頸～口縁部片。H14は第151号墳出土土器として『見島総合学術調査報告』に唯一図示された資料を再実測したものである。口縁端部を丸く収め、内外面ともに丁寧な横ナデが施されている。Y1は山口大学埋蔵文化財資料館所蔵品で唯一図化可能な資料である。頸部に沈線を巡らせ、口縁内端部を上方に肥厚させる。頸部外面には連続したタタキ痕が残る。

H15は長頸壺であるが、口縁～頸部、体部上位、体部下位の破片は接合せず、図上復元を行った。体部は肩の張る器形で、頸部から段を形成して口縁に至る。頸部には2条の沈線を巡らせるが、口縁を水平と見なして図化すると沈線が大きく傾くため、元来歪みの大きい個体であったのだろう。

この他、甕腹と見られる**体部片約80点**を確認した。各々接合せず個体数もかなり多いこと、また主体部が狭小であることから、完形甕の副葬・供献は考えがたい。葬送に関連し、破砕土器供献儀礼とも呼ぶべき行為が行われた可能性を指摘しておく。

2．磁器（図5、写真6、表1）

H16は皿体部片と思われる青磁片である。内面には連弁らしき文様が見られる。越州窯産であろう。

３．土師器（図6、写真7～9、表1）

土師器は坏、坏蓋がみられる。H17～23とH27、H30～33はロクロを使用しており、一見すると須恵器のような成形技法が用いられているが、いずれも軟焼成で胎土も粗い。一方H24～26、28、29は橙色や赤色の胎土で、顔料が塗布されたものも存在している。

H17～22はロクロ水引き成形痕の残る坏である。H17は僅かに丸みを帯びた底部から体部が緩やかに立ち上がる。口縁部は歪みによる外反もみられるがほとんどは外反しておらず、端部は丸く収める。底部内面は中心部に渦状のナデ、周辺に不定方向のナデがあり、外面底部は回転ヘラ切り後にナデを施す。立ち上がり付近は回転ヘラケズリで、一部に縦方向のハケメ、底部側では粘土を押さえつけた痕跡が残る。H18はH17とほぼ同様であるが体部から口縁部にかけて僅かに内湾する。立ち上がり付近では幅1cm程の輪状に粘土が極めて薄く押しつけられる。H19は僅かに丸い底部から口縁部が緩やかに立ち上がる。口縁端部は僅かに外反して丸く収め、口縁部内面は強い回転ナデによりついた稜が一条巡る。立ち上がり付近にH17同様の縦方向のハケメと思われる痕跡が残る。H20は体部から口縁部が僅かに屈曲して直線的に外傾する。内外面ともに強い回転ナデが施され体部内面には稜がつく。口縁端部は内面を引き出して幅の狭い面が作られ先端は丸く収める。H21はH20より屈曲が強い。口縁部は内外面とも丁寧な回転ナデが明瞭に残る。H20と同様に口縁端部内面に面が形成され、先端を丸く収める。屈曲部外面に縦方向のハケメと思われる痕跡が残る。H22は体部が緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は直線的に外傾して端部を丸く収める。口縁部は内外面ともに回転ナデが施され、内面底部はナデ、外面底部は磨滅により不明瞭であるがヘラ切りらしき痕跡と体部方向に粘土を押し撫でた痕跡が残る。

H23～30は土師器坏と思われる口縁部片および底部片である。H23はH21に似た回転ナデ痕の残る口縁部片でおそらく同様の坏である。内外面の明瞭な回転ナデと強めの回転ナデによる内面の稜があり、端部は弱く面を形成しながら僅かに外反する。H24～26は橙色味を帯びた直線的にのびる口縁部である。H24の口縁端部は丸く収めており、内面に面が作られているようだが磨滅により不明瞭である。外面にヨコナデとミガキの痕跡が残る。H25も全体的に磨滅しているが内面にミガキが僅かに残る。口縁端部の外面に幅1mm程の極めて浅い凹線が巡る。H26はH24・H25に比べて器壁は薄い。全体は磨滅により不明瞭であるが口縁端部外面に幅約2mmの極めて浅い凹線が巡る。H27は端部が丸く収められた口縁部片。内外ともに回転ナデが施される。H28は赤色顔料が塗布された坏の体部片で僅かに底部が残る。底部は平坦でミガキが施されており接地するものと思われる。体部は内外ともにヨコナデが施される。外面立ち上がり付近はヘラケズリと思われる部分にミガキが施される。H29は赤色の坏で、ほぼ平坦な底部から体部が緩やかに内湾して立ち上がる。全体に摩滅が激しく不明瞭だが、外面上部にヨコナデと体部から底部にかけて幅2mm程のミガキと思われる痕跡が僅かにみられる。H30は坏の底部から体部で内面が剥離している。外器面上部に回転ナデが施される。底部には回転糸切りとみられる痕跡が残るが、その上に薄く粘土が貼り付いているため不連続にしか確認できない。粘土は雑に撫で付けられている。

H31～33は坏蓋。H31・H32は平坦な天井部から緩やかに湾曲して口縁に達し、口縁部はやや内傾気味に屈曲して下垂する。口縁部は内外面に回転ナデが施され、端部は外面に面を作る。H31の端部内面は下垂する付け根に鋭い凹線が巡る。天井部内面は不定方向のナデ、外面は磨滅により不明瞭であるが体部中程に回転ヘラケズリがみられる。H32はH31より外面の回転ヘラケズリの範囲が広く口縁部近くまで施される。H33は浅い凹線が外面に巡る坏蓋。直線的な口縁部から端部は内傾気味に下垂して丸く収める。全体的に回転ナデが施され、強めの回転ナデで体部に凹線が二条巡る。また口縁端部外面の折り返し付近に幅1mm程の極めて浅い凹線が巡る。

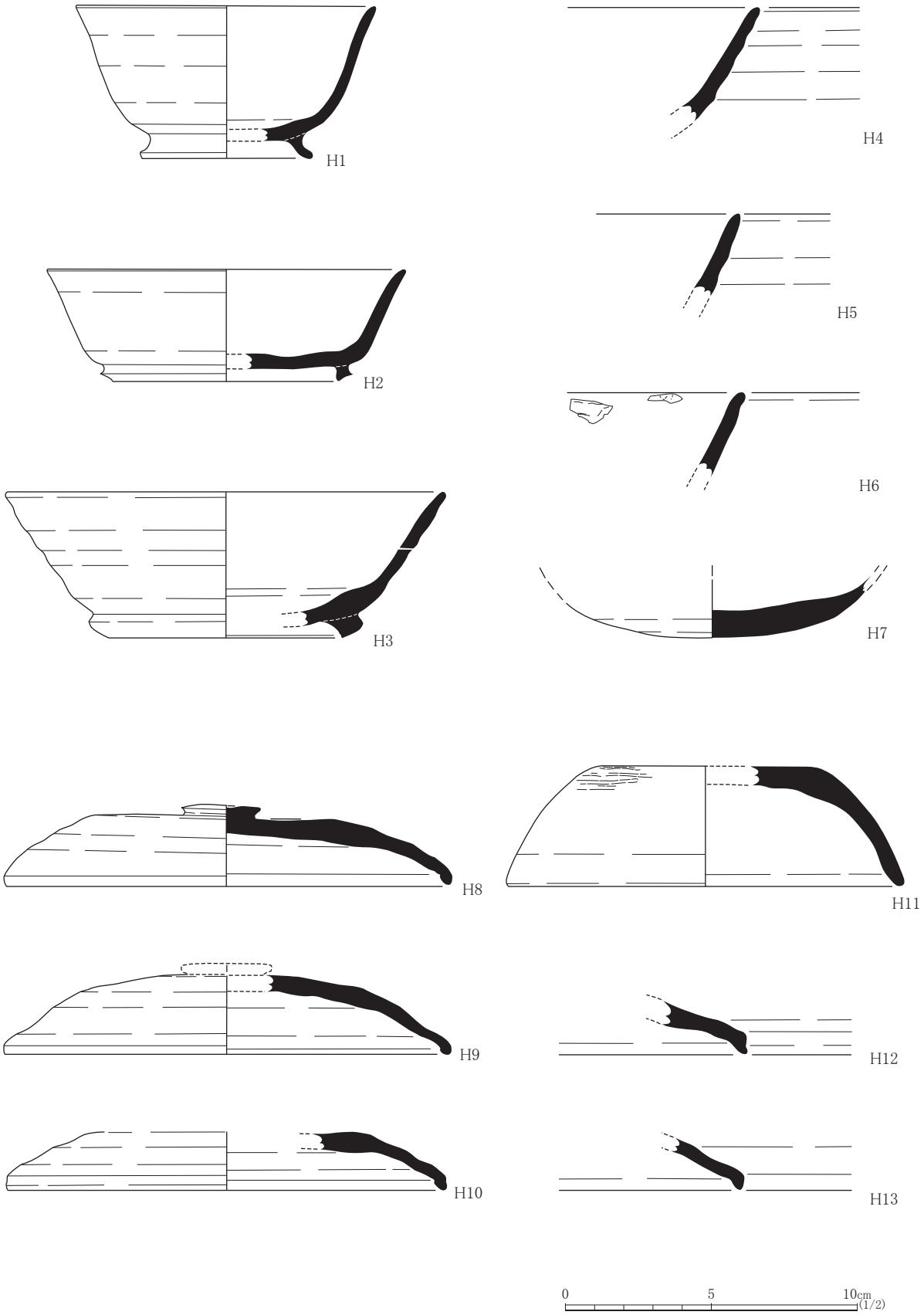


図4　第 151 号墳出土土器実測図①

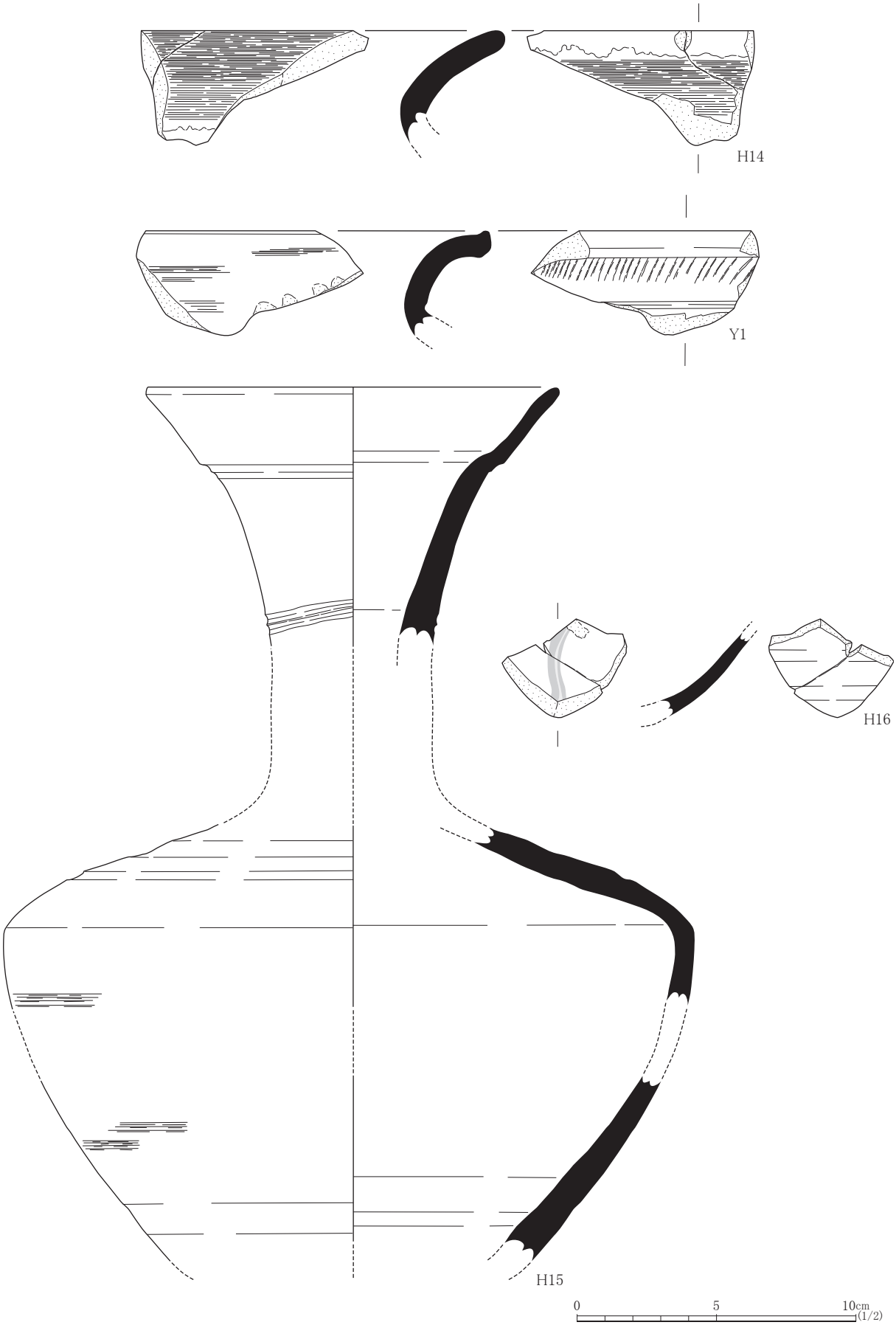


図5　第 151 号墳出土土器実測図②

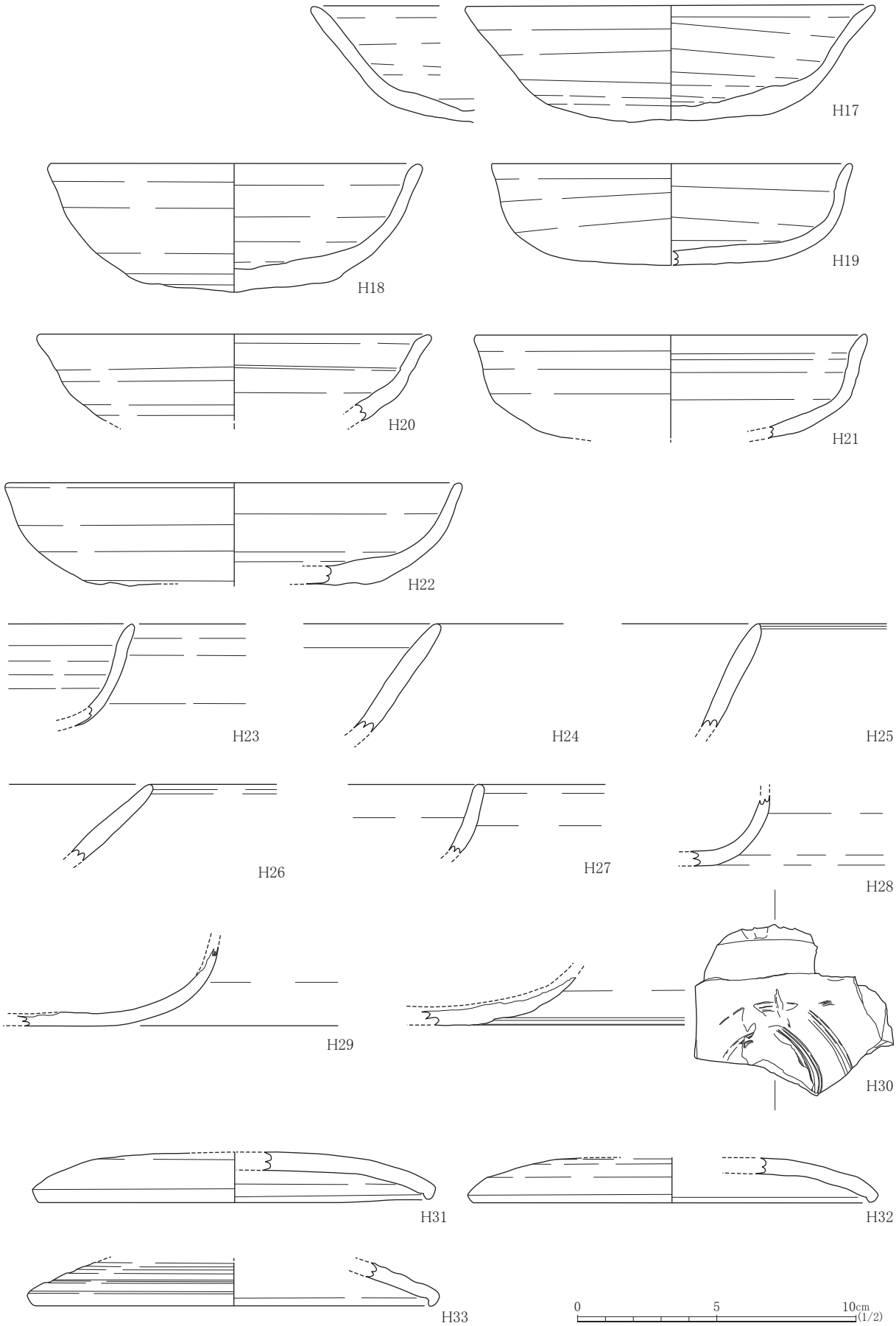


図6　第 151 号墳出土土器実測図③

H1a

H1b

H2a

H2b

H3a

H3b

写真4　第 151 号墳出土土器①

H7

H4a

H4b

H5

H6

H8

H9a

H9b

写真5　第 151 号墳出土土器②

H11

H10a

H10b

H12

H13

H16

H14a

Y1a

H14b

Y1b

写真6　第 151 号墳出土土器③

H15a

H15b

H15c

H17a

H17b

H18a

H18b

H19a

H19b

写真7　第 151 号墳出土土器④

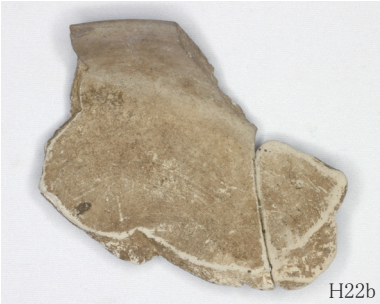
H20a

H21a

H22a

H20b

H21b


H22b

H23a

H24a

H25a

H23b

H24b

H25b

H26

H27

写真8　第 151 号墳出土土器⑤

H28a

H29a

H28b

H29b

H30a

H31a

H30b

H31b

H32a

H33a

H32b

H33b

写真9　第 151 号墳出土土器⑥

表1　第 151 号墳出土遺物（土器）観察表

法量（ ）は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
H1	151号墳	須恵器 高台付坏身	口縁部 ～底部	①10.3③5.2 高台径(5.9)	①灰色(7.5Y4/1) ②灰色(7.5Y5/1)	密	やや 不良	口縁部は直線的に外傾し、端部は丸く収める。貼り付け高台で高台端部は丸く収める。
H2	151号墳	須恵器 高台付坏身	口縁部 ー底部	①(12.3)③3.8 高台外径(8.6)内径(7.6)	①灰色(10Y4/1) ②灰色(10Y6/1)	密	良好	口縁部は直線的に外傾する。貼り付け高台は台形状となり、内側で接地する。
H3	151号墳	須恵器 高台付坏身	口縁部 ・底部	①(14.9)③(5.0) 高台外径(9.4)内径(8.0)	①②灰色(10Y4/1)	やや粗	やや 不良	口縁部は接合しいが同一個体。口縁部は直線的に外径する。貼り付け高台は台形状となり内径で接地する。
H4	151号墳	須恵器 坏身	口縁部	③△3.9	①②灰色(10Y6/1)	やや粗	良好	直線的にのびる口縁部片。内外面回転ナデ調整。
H5	151号墳	須恵器 坏身	口縁部	③△2.8	①灰黄色(2.5Y6/2) ②灰色(5Y6/1)	密	良好	口縁部片。端部は丸みを帯びる。回転ナデ調整。
H6	151号墳	須恵器 壺類口縁か	口縁部	③△3.0	①灰色(5Y5/1) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	密	良好	直線的な口縁で端部は丸く収める。全体的に自然釉が付着し、一部に熔着した別個体の打ち欠き痕が残る。
H7	151号墳	須恵器 坏身か	底部	③△2.0	①②灰黄褐色(10YR5/2)	密	やや 不良	厚めの底部。風化が激しく、外面はおそらく回転ヘラケズリが施されているが調整は不明。内面は薄く剥離。
H8	151号墳	須恵器 坏蓋	口縁部	①内径14.6外径15.2 ③2.8 つまみ径最大2.8	①②灰色(5Y5/1)	密	良好	偏平ボタン状つまみを有する。天井部は外面ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。口縁部は内外とも回転ナデが施される。
H9	151号墳	須恵器 坏蓋	口縁部ー 天井部	①内径(14.6)外径(15.4) ③△2.7	①②灰色(N4/)	密	良好	つまみ剥離痕が天井部に見られる。
H10	151号墳	須恵器 坏蓋	口縁部 ー体部	①内径(14.5)外径(15.1) ③△2.0	①灰色(10Y4/1) ②黄灰色(2.5Y4/1)	密	良好	内外面ともにナデと回転ナデ痕が残る。口縁部はヨコナデにより外面に面ができる。
H11	151号墳	須恵器 坏蓋	口縁部ー 天井部	①(13.6)③△4.1 天井部径(7.4)	①②オリーブ灰色 (5GY5/1) 底部外面灰褐色(5YR6/2)	密	良好	口縁部は回転ナデで端部は丸くなる。天井部外面は直線的なミガキが施される。
H12	151号墳	須恵器 坏蓋	口縁部	③△1.9	①②黄灰色(2.5Y4/1)	やや粗	良好	
H13	151号墳	須恵器 坏蓋	口縁部	③△1.8	①②灰色(10Y5/1)	密	良好	
H14	151号墳	須恵器 甕	口縁部	③△4.1	自然釉オリーブ黒色 (5Y3/2) 無釉部灰色(5Y5/1)	密	良好	頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部にかけて緩やかに外反する。端部は丸くなる。外器面に自然釉かかる。
H15	151号墳	須恵器 長頸壺	口縁ー頸部 体部	①(14.7)	①灰色(N6/)ー(5Y5/1) ②黄灰色(2.5Y6/1)	やや粗	良好	接合しない3片を図で合成。口縁部から頸部にかけて歪み大きい。
H16	151号墳	青磁 皿か	体部		釉薬 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 素地 灰色(5Y6/1)	密	良好	越州窯か
H17	151号墳	土師器 坏	口縁部 ー底部	①14.7③4.2	①②黄褐色(2.5Y5/3)	やや粗	やや軟	ヘラ切り底から緩やかに立ち上がり、ほぼ直線的に外傾する。端部は丸く収める。底部はヘラ切り後に押圧。底部と体部の境に回転ヘラケズリ、一部縦方向のハケメがつく。
H18	151号墳	土師器 坏	口縁部 ー底部	①外径13.6内径13.2 ③4.6	①オリーブ褐色ー黄褐色 (2.5Y4.5/3) ②オリーブ褐色(2.5Y4/3)	密	やや軟	おそらくヘラ切りの底部から僅かに内湾気味に口縁がのびる。口縁部は回転ナデが施される。底部と体部の境で幅1cm程の輪状に粘土が極薄く押しつけられる。
H19	151号墳	土師器 坏	口縁部 ー底部	①外径(13.1)内径(12.9) ③△3.6	①灰色(5Y4/1) ②にぶい黄褐ー褐色 (10YR4/3ー4)	密	やや軟	僅かに丸い底部からやや外傾する口縁部が直線的にのびる。端部は僅かに外反。口縁部内面は鋭い回転ナデにより稜を形成。外面の底部と体部の境に一部縦方向のハケメ。
H20	151号墳	土師器 坏	口縁部 ー体部	①外径(14.2)内径(13.9) ③△3.1	①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②にぶい黄橙色	密	やや軟	口縁部は直線的に外傾。端部は丸く、僅かに外反する。内外面とも強い回転ナデが施され、内面に稜がつく。
H21	151号墳	土師器 坏	口縁部 ー体部	①外傾(14.1)内径(13.9) ③△3.7	①②オリーブ褐色 (2.5Y4/4ー6)	密	やや軟	底部からやや強く屈曲し、直線的に僅かに外傾して立ち上がる。端部は丸く僅かに外反。口縁部内外回転ナデ。内面に稜が形成。外面屈曲部の底部側に縦方向のハケメか。
H22	151号墳	土師器 坏	口縁部 ー底部	①外傾(16.4)内径(16.2) ③3.7	①オリーブ褐色(2.5Y4/4) ②黄褐色(2.5Y5/3)	やや粗	やや軟	口縁部は外傾して直線的にのび、端部は丸く収める。内外面ともに回転ナデ。底部内面はナデ、外面はヘラ切り後粗いナデが施される。
H23	151号墳	土師器 坏か	口縁部	③△3.7	①黄褐色(2.5Y5/3) ②オリーブ褐色(2.5Y4/4)	密	やや軟	内外面ともに丁寧な回転ナデが施される。口縁部付近の内面に強めの回転ナデによる稜がつく。外面底部側にユビの当たった痕跡が付く。
H24	151号墳	土師器 坏か	口縁部	③△3.9	①にぶい橙ー橙色 (7.5YR6/4ー6) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)	やや粗	やや軟	直線的にのびる口縁で端部は丸く収める。口縁部付近外面にヨコナデ痕があり、体部はヨコ・ナナメのミガキが施される。内面は摩滅により不明瞭。
H25	151号墳	土師器 坏か	口縁部	③△3.7	①②にぶい黄橙色 (10YR6.5/4)	やや粗	やや軟	直線的にのびる口縁部。端部はやや摩滅しているが丸く、外側に一条凹線がある。全体的に摩滅して調整が不明瞭であるが、内面にミガキが確認できる。
H26	151号墳	土師器 坏か	口縁部	③△2.8	①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②灰白～浅黄橙色 (10YR8/2～3)	やや粗	やや軟	直線的にのびる口縁部。端部は丸く収める。全体的に摩滅しているが、口縁端部外面にうすく凹線が確認できる。外器面にミガキを受けたような平坦面あり。
H27	151号墳	土師器 坏か	口縁部	③△2.4	①にぶい黄褐色(10YR5/4) ②にぶい黄褐色	やや粗	やや軟	口縁端部を丸く収める。内外面ともに回転ナデが施される。
H28	151号墳	土師器 坏か	体部 ー底部	③△2.5	①赤褐色(5YR4/6) ②素地 褐色(10YR4/6) 顔料 明赤褐色 (2.5YR5/6)	密	やや軟	底部外面は剥離が激しい。立ち上がりは丸みを帯び内外面ともに丁寧なヨコナデを受ける。外面立ち上がりにヘラケズリとミガキか。内外面ともに赤色顔料が付着。
H29	151号墳	土師器 坏か	体部 ー底部	③△2.8	①②赤褐色(5YR4/6)	やや粗	軟	底部はほぼ平坦で接地し、体部は丸みを帯びて立ち上がる。体部外面上方にヨコナデ。外面に幅2mmほどのミガキ痕が僅かに残るが全体的に摩滅が激しく不明瞭。
H30	151号墳	土師器 坏か	底部	③△1.7	①黄褐ーにぶい黄色 (2.5Y5.5/3)	密	やや軟	内面は剥離により不明。外面底部に回転糸切りに見られる痕跡があるが、上から薄い粘土が撫で付けられ不明瞭。体部上方に僅かに回転ナデがみられる。
H31	151号墳	土師器 坏蓋	口縁部 ー天井部	①外径(14.5)内径(13.9) ③△1.8	①灰黄色(2.5Y6/2) ②黄褐ーオリーブ褐色 (2.5Y4.5/3)	やや粗	やや軟	口縁部外面はやや丸みを帯びた面をつくる。端部は下方に丸く収め、内側付け根に一条線がはいる。口縁部は内外ともに回転ナデ、天井部外面に回転ヘラケズリがみられる。
H32	151号墳	土師器 坏蓋	口縁部 ー天井部	①外径(14.8)内径(14.4) ③△1.6	①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰白色(2.5Y8/1)	密	良好	口縁部端部外面は丸みを帯びた面をつくり内側に下垂。口縁部は回転ナデ、天井部外面は広範囲に回転ヘラケズリ。
H33	151号墳	土師器 坏蓋	口縁部	①外径(14.8)内径(14.2) ③△1.6	①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②黄褐色(2.5Y5/3)	密	やや軟	口縁部は外面に面をつくり、端部は内側に下垂して丸く収める。内外面とも回転ナデが施され、外面は浅い凹線ができる。端部外面の折り返しに細く浅い凹線あり。
Y1	151号墳	須恵器 甕	口縁部	③△3.7	①②自然釉部:暗灰色(N3) ①無釉部:灰色(N6) ②無釉部:灰色(7.5Y4/1)	密	良好	自然釉が外面に付く。外反の強いロ縁で端部は上方に肥厚させる。外反する外面にタタキ痕と内面端部付近に当て具痕が残る。頸部に沈線が一条巡る。

第2項　金属器

第151号墳出土金属器類では、『見島総合学術調査報告』にも写真掲載されている「銅のゆこぼれ（※銅滓）」と「和同開珎片」が萩博物館に所蔵され、他の金属器類は全て山口大学埋蔵文化財資料館に所蔵されている。萩博物館所蔵和同開珎片は報告書において「古墳付近の表土近く西北方約4.3メートルの地上」より発見されており、「周辺の遺物はこの石室から出土した公算が多い」と推定されているが、分布図（図2）を見ると第151号墳の西北西約6m地点には番外7号墳が存在しているため、第151号墳に帰属するとは断定できない。よって本書では和同開珎片を出土資料から省いておく。

金属器類は大きく銅製品と鉄製品に分けられる。以下にその概要を記す。

1．銅製品（図7、写真10～12、表2）

まず装身具から報告を行う。Ybr1・Ybr2は耳環。報告書に「金環1対」とあるのはこの資料であろうか。Ybr1は外径21㎜、Ybr2は外径26.5㎜とサイズが大きく異なる。鍍金はYbr1にのみ見られ、Ybr2からは金の成分は検出されなかった。Ybr3は腰帯具巡方の裏金具。横幅29㎜、縦幅25.5㎜で、垂孔は横幅19.1㎜、縦幅5.1㎜を測る。四隅に留め用の小孔が穿たれている。また表面に横または斜め方向の擦痕が観察される。Ybr4は腰帯具丸鞆の裏金具。横幅26.5㎜、縦幅16.3㎜で、垂孔は横幅16.2㎜、縦幅5.1㎜を測る。両下端と頂部に留め用の小孔が穿たれている。両者はサイズ的には見島ジーコンボ古墳群第1号墳出土品と類似しており、表飾りは銅製であった可能性が高い。

武具類には刀装具がある。Ybr5は柄頭。方頭式であるが、報告書に「素環式柄頭1」とあるのは当資料を指すのであろうか。X線撮影では象嵌等確認されておらず、素文の柄頭と思われる。Ybr6は鞘に取り付ける佩用の鐶付足金具であろう。折り返された銅板の一端に中実の鐶を固定している。X線画像により鐶はC字形をなしていることが分かる。銅板、鐶部ともに鍍金が施されている。Ybr7はU字形の銅地鍍金製品であり、鍔または切羽と思われる。Ybr8は責金具。断面は扁平な台形で、継がず端を重ねることで環としている。Ybr9～13は厚さ0.5～0.9㎜の極めて薄い銅板製品であり、中央に小孔が2孔穿たれている。長方形（Ybr9・11・12）と正方形（Ybr10）の2種が存在する。用途としては鞘の飾金具等が考えられるものの断定できない。Ybr14・15は鳩目金具。Ybr14は厚さ0.85～0.9㎜の薄い銅板を丸めて環となしているが、Ybr15は厚さ1.3㎜の銅板端部を継いで環となしており、サイズもやや異なることからセット関係に疑問も残る。またYbr5柄頭には孔が存在しないため、別の刀類に用いられたのと考えられる。

Hbr1は報告書に「銅の湯こぼれ」と紹介された銅滓である。平面形態は不整形な二等辺三角形状であり、断面形態は扁平な蒲鉾形となっている。縦幅173.5㎜、横幅143.5㎜、最大厚16㎜を測る。片面は平坦であるが、他面に気泡が集中している。

以上が第151号墳出土銅製品の概要であるが、『見島総合学術調査報告』に記述がある「鉄製金具10箇」は、Ybr6～15を指すのであろうか。これだけのバリエーションが「鉄製金具」とまとめられているとは想像しがたく、さらに未確認の出土資料が存在する可能性を残している。また、腰帯具2点に関する記述が脱落していることも気にかかる。『見島総合学術調査報告』第154号墳調査成果報告文の中に「この古墳の近く表土上に帯金具が発見された。丸鞆でこの形状や大きさは、第1号墳出土例の小さい例と全く同じである」と記述された資料は未だ確認されておらず、第151号墳出土品に混入した可能性もある。しかしYbr4はむしろ第1号墳出土の大型の丸鞆にサイズが近く、Ybr3・4は前者が微量の砒素を含む銅製、後者が鉄の混ざる銅製と成分分析上は相違を見せるものの、形態上セット関係に矛盾は感じられない。本書では資料に付された注記通り第151号墳出土品と見なしておく。

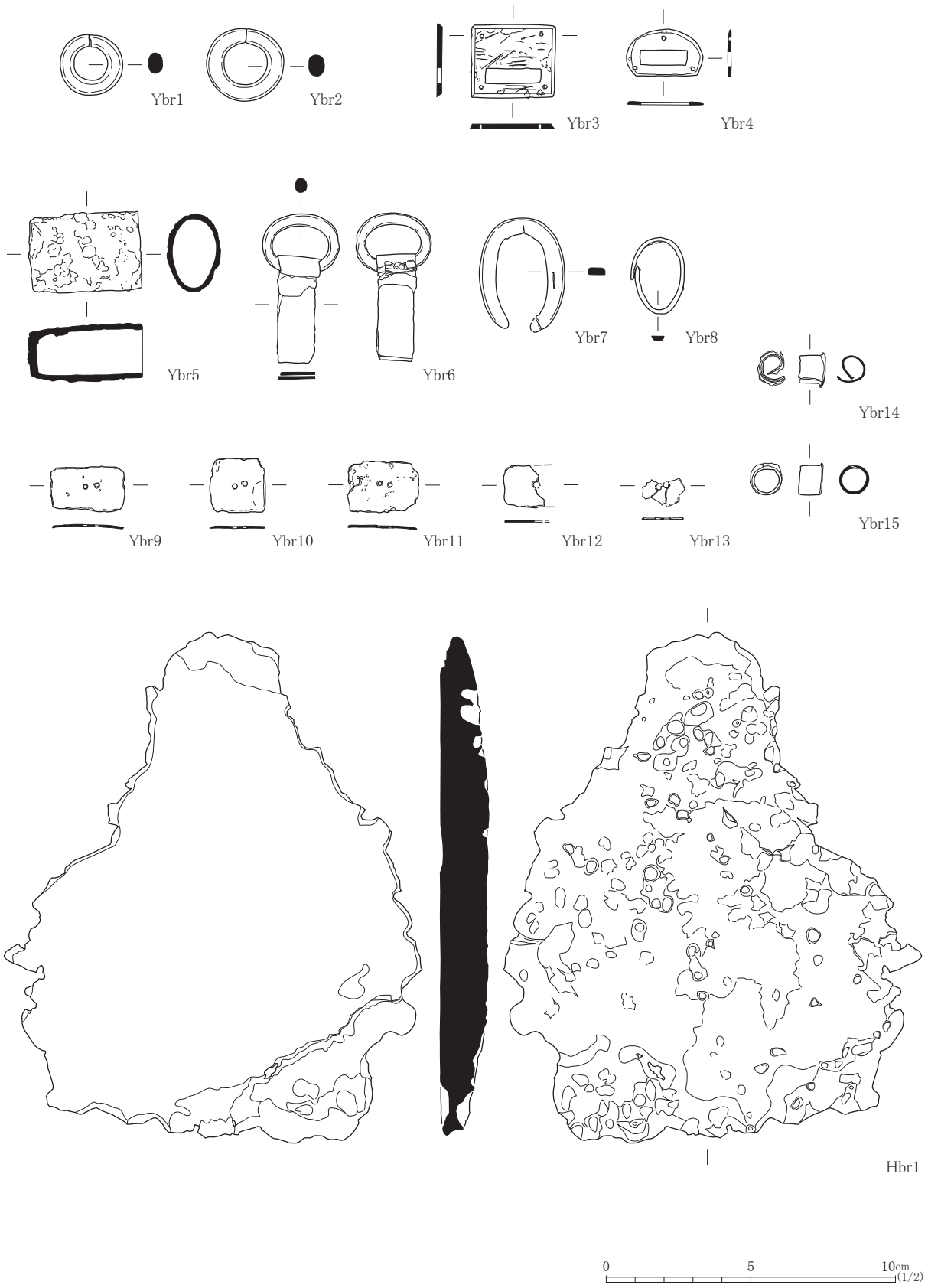


図7　第 151 号墳出土銅製品実測図

縮尺ほぼ実寸

写真 10　第 151 号墳出土銅製品①

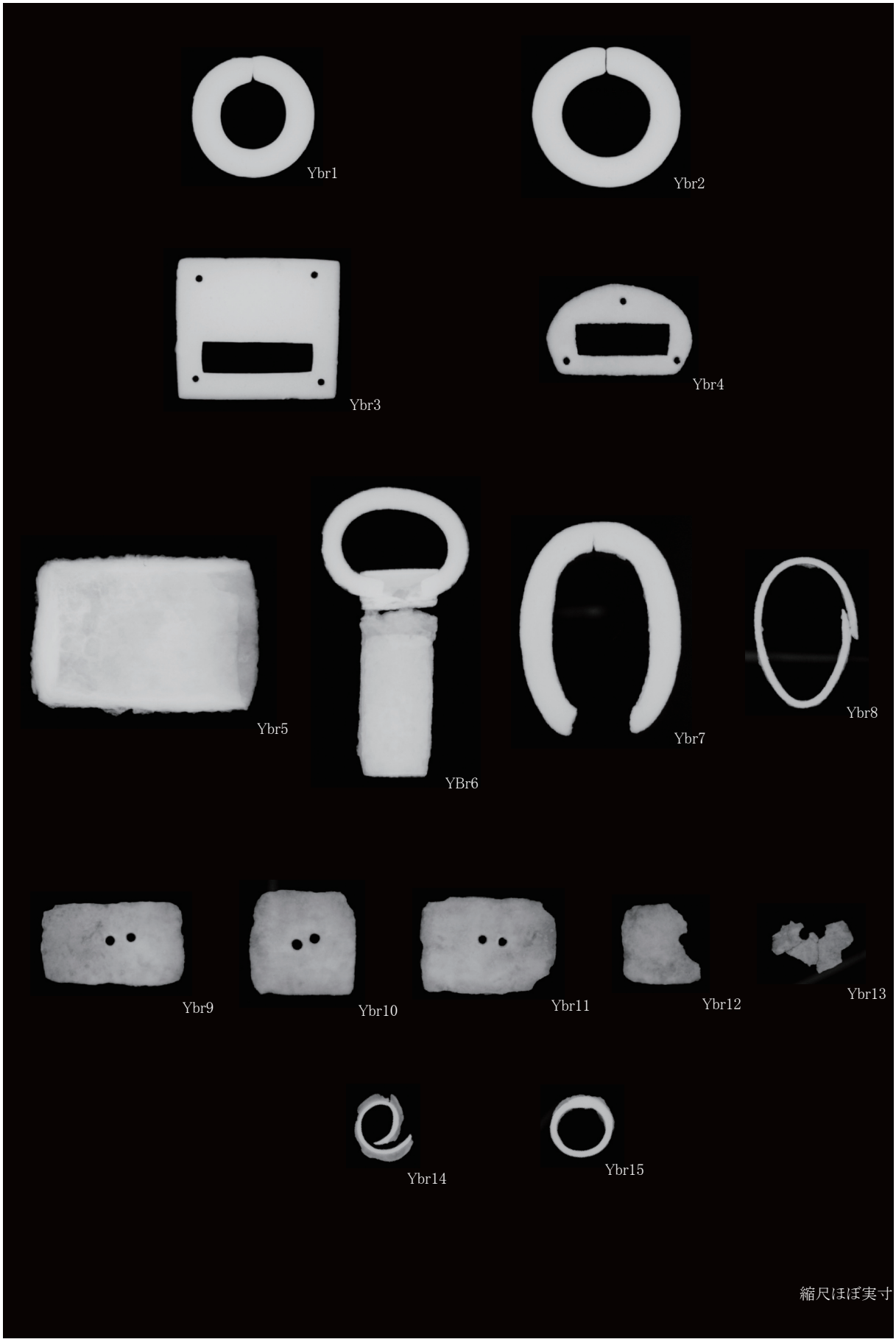


写真 11　第 151 号墳出土銅製品X線画像

縮尺ほぼ 1/2

写真 12　第 151 号墳出土銅製品②

表2 第151号墳出土遺物（銅製品）観察表

法量は残存最大値 ()は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量 ①長さ(mm) ②幅(mm) ③厚さ(mm) ④重量(g)	備考
Ybr 1	151号墳	耳環	完形	①外径21 内径11.5 ③6.9 ④11.88	銅地鍍金製
Ybr 2	151号墳	耳環	完形	①外径26.5 内径15 ③7.1 ④15.26	銅製
Ybr 3	151号墳	腰帯具 巡方 裏金具	完形	①29 ②25.5 ③2.0～2.3 ④7.25 垂孔19.1×5.0	銅・錫・鉛の合金製（微量の砒素検出） 4隅に留め孔　表面に擦痕残る
Ybr 4	151号墳	腰帯具 丸鞆 裏金具	完形	①26.5 ②16.3 ③1.2～1.3 ④1.83 垂孔16.2×5.1	銅。鉛の合金製　下2隅と頂部に留め孔
Ybr 5	151号墳	刀装具 柄頭	完形	①39 ②外径26～27.5（長軸） ④20.53	銅製
Ybr 6	151号墳	刀装具 鐶付足金具	完形	①51.5 ②環部最大外径26 銅板幅12.5 ③環部4.1 ④9.56	銅地鍍金製（表面から銅・鉄も検出）
Ybr 7	151号墳	刀装具 鍔・口縁金具か	ほぼ完形	①38.5 ②29.5 ③2.2 ④6.61	銅地鍍金製（銅・鉄・金も検出）
Ybr 8	151号墳	刀装具 責金具	完形	①26 ②18.5 ③4.1 ④1.87	銅製（鉄も検出）
Ybr 9	151号墳	刀装具 飾金具か	完形	①25.5 ②15.5 ③0.8 ④1.22 孔径1.2	銅製（微量の砒素検出）　2ヶ所に小孔 長軸緩やかに彎曲
Ybr 10	151号墳	刀装具 飾金具か	ほぼ完形	①19 ②19 ③0.8 ④1.11 孔径1.5	銅製（微量の砒素検出）　2ヶ所に小孔
Ybr 11	151号墳	刀装具 飾金具か	ほぼ完形	①29 ②18 ③0.7～0.9 ④1.28 孔径1.2	銅製（微量の砒素検出）　2ヶ所に小孔 長・短軸緩やかに彎曲
Ybr 12	151号墳	刀装具 飾金具か	半損	①14 ②14.5 ③0.5～0.6 ④0.37	銅製（微量の砒素検出）　小孔1遺存
Ybr 13	151号墳	刀装具 飾金具か	中央部遺存	①14.5 ②10 ③0.5 ④0.13	銅製（微量の砒素検出）　2ヶ所に小孔
Ybr 14	151号墳	鳩目金具	完形	①内径8×5.5 ②外径0.85～0.9 ③0.6～0.7 ④0.87	銅製（微量の砒素検出）
Ybr 15	151号墳	鳩目金具	完形	①内径8 ②7.8 ③1.3 ④1.51	銅製（鉄も検出）
Hbr 1	151号墳	銅滓	完形	①173.5 ②143.5 ③最大16 ④1301.8	出土状況は写真3を参照

2．鉄製品（図8～10、写真13～20、表3～5）

第154号墳から出土した鉄製品は、全て山口大学埋蔵文化財資料館に所蔵されている。資料は「中央部」「西端部」「不明」の3群に分けて保管されていたが、これは石室内の出土地点を示しているものと考えられる。『見島総合学術調査報告』には「（石室南西部の）薄い割石の下に金環1対、素環式柄頭1、鉄刀の断片2、鉄鏃の柄部断片、鉄製金具10箇と刀子1個」との記述があるが、これが中央部を指すのか西端部を指すのか不明と言わざるを得ない。しかし将来的に当時の調査記録が発見される可能性も残されているため、本書においても中央部（略号Yic）、西端部（略号Yiw）、地点不明（略号Yiuk）の3群に分けて報告を行う。

【中央部】（図8・9、写真13～16、表3）

56点の資料があるが、いずれも破損品であり、完形品は存在しない。Yic1は鉄刀茎部片。端部付近に目釘が遺存している。Yic2～12は刀身部片と見られる。小片が多いが、比較的遺存状態の良いYic3は丸棟平造の直刀と見られる。Yic5は角棟の可能性がある小片である。Yic11は切刃造の刃部片であろうか。他、板状の細片Yis27～56も多くは鉄刀の剥離片と思われる。

Yic13・Yic15は刀子。Yic13は残長27.4㎝で鋒部のみ欠失している。関部は不明瞭であるが両関とも撫角と見られる。Yic15は刀部上半と茎部下端を欠失する。撫角の背関式である。両資料ともに部分的に関部に帯状の金具が残るが、これは柄縁金具の残片と見られる。Yic16も刀子の茎部と見られるが、Yiw1を含め他の刀子とは接合しない。表面に木質が遺存する。Yic14は刃部側を欠くが刀子の鋒付近の破片と思われる。

Yic17～26には鉄鏃と思われる資料を集めた。Yic17は形状から鏃身と推定したが、剥離が激しく原面

が遺存しないため刀等の剥離片の可能性もある。Yic18・19は片丸造りの圭頭鑿箭式鏃身部片と見られる。Yic23も銹化・破損が激しいが片丸造り圭頭鑿箭式の長頸式鉄鏃片であろう。Yic20・21は長頸式鉄鏃の頸部片。Yic20は関部直下で茎部を欠失している。Yic22・24～26は茎部片。Yic24には巻き付けられた有機質の痕跡が残っている。またYic26は頸部片の可能性を残す。

【西端部】（図10、写真17・18、表4）

15点の資料が確認されている。Yiw1は刀子。刀部を欠失している。茎部も破損が甚だしいが、遺存状態の良好な面には木質が残っている。

Yiw2～9はいずれも尖根系の長頸式鉄鏃と見られる。Yiw2～6は頸部または茎部と思われるが、明確な関が存在しないため判別付けがたい。Yiw7～9は茎部片。

Yiw10・11は不明棒状製品。断面不整長方形の薄く細い鉄棒の先端を尖らせており、Yiw11はその先端上部を「く」の字状に折り曲げている。刀装具の破損品の可能性もあるが、特定できない。

Yiw12～15は鉄片。Yiw12は刀子の刀部または茎部片の可能性がある。Yiw14は銹割れしているが端刃箭式の鏃身部片であろうか。

【地点不明】（図11、写真19・20、表5）

19点の資料が確認される。Yiuk1は半損品であるが鐔であろうか。鐔であれば茎孔の長径は2.8㎝を測るが、部位により厚みが大きく異なる点が気にかかる。『見島総合学術調査報告』にて「素環式柄頭」とされているのは当資料かもしれない。

Yiuk2は鉄刀鋒部片。銹膨れが激しく端部も欠失しているが、平造で角棟フクラ枯の鋒部と見られる。鎬の有無は不明。Yiuk3も同じく鉄刀鋒部付近の刀身片と思われる。同様に銹膨れが激しいが、平造小肉付棟の刀身であろう。Yiuk4は鉄刀刃部片。

Yiuk5・6は鉄鏃茎部片。Yiuk6の表面には木質が遺存している。

Yiuk7～19は鉄片。鉄刀、鉄鏃類の小破片であろう。

以上第151号墳出土鉄製品の概要を記した。石室の撹乱・盗掘の激しさを物語るように、遺存状態は極めて悪く、接合可能資料も数点しか存在しなかった。確認できた製品には鉄刀・鉄鏃、刀子、不明棒状製品の4種がある。個体数としては最小値として茎部・鋒部の計測で鉄刀2個体、鏃身部の計測で鉄鏃3～5個体、茎部の計測で刀子4個体を確認できる。

第154号墳との比較で述べると、鉄刀・鉄鏃・刀子のセット関係は同様であるが、構成比に大きな差を見せる。すなわち、第154号墳では茎部から鉄刀2個体、刀子1個体が存在するが、鉄鏃に関しては関部から少なくとも33個体もの存在が確認される。

両墳とも撹乱・盗掘が激しく、現状で確認される個体数が副葬遺物の実数を示すものとは言えない。更には第151号墳では少なくとも5体の埋葬が推測されている[註1]。対して第154号墳から出土したとされる「人骨片若干及び歯牙片[註2]」は現在所在が分からず、何体が埋葬されたのか不明であるが、各墳の埋葬回数が異なれば当然のことながら石室の内容物にも差異が生じるものと推察される。しかしこの状況下においてもなお、今後見島ジーコンボ古墳群出土資料の再調査を行う上で、各墳出土鉄製品の詳細な比較検討は、被葬者の実像に迫るために欠かせない視点となるのではなかろうか。

【註】

1）本書付篇1参照。

2）文献７の433頁25行。

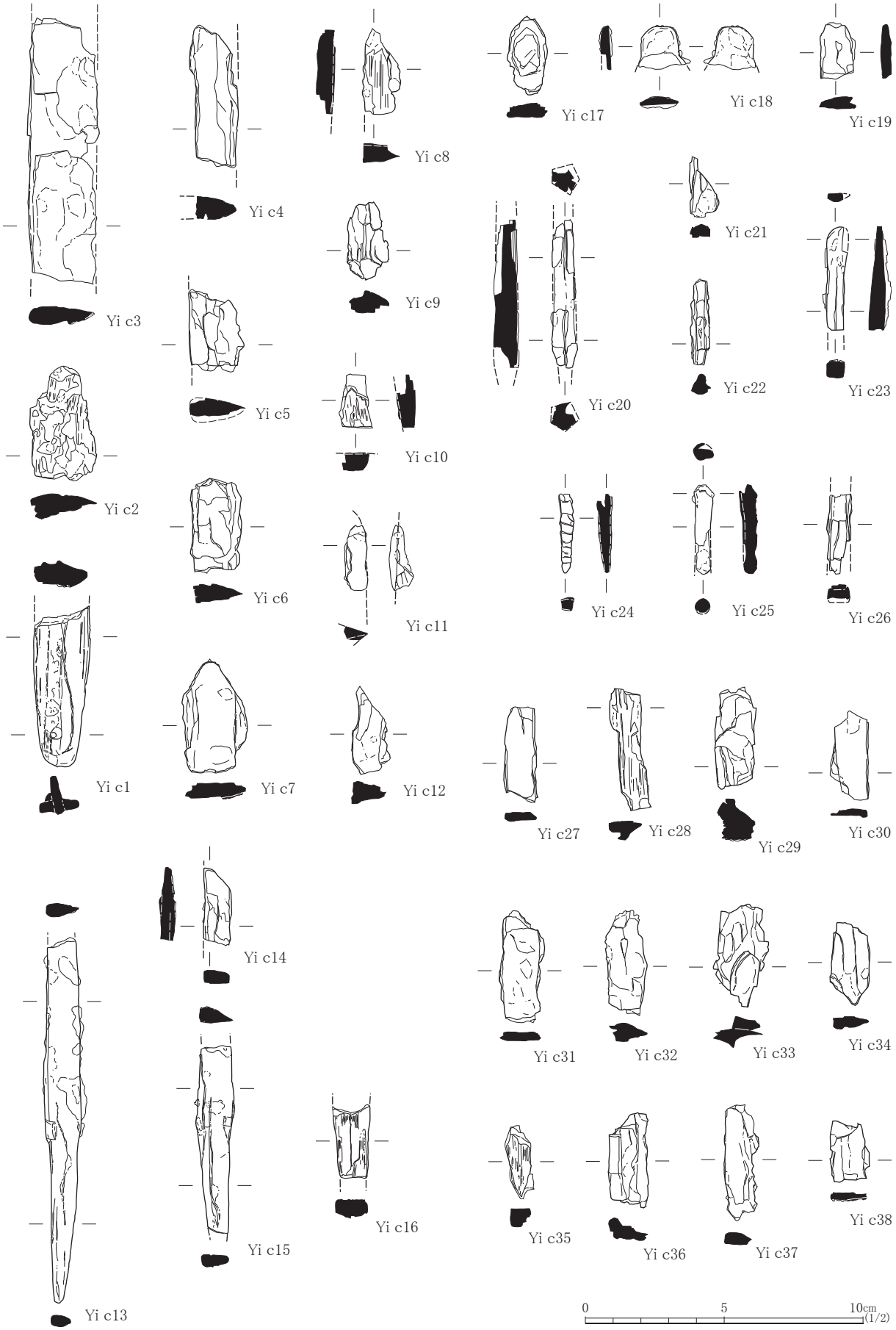


図8　第 151 号墳出土鉄製品（中央部）①

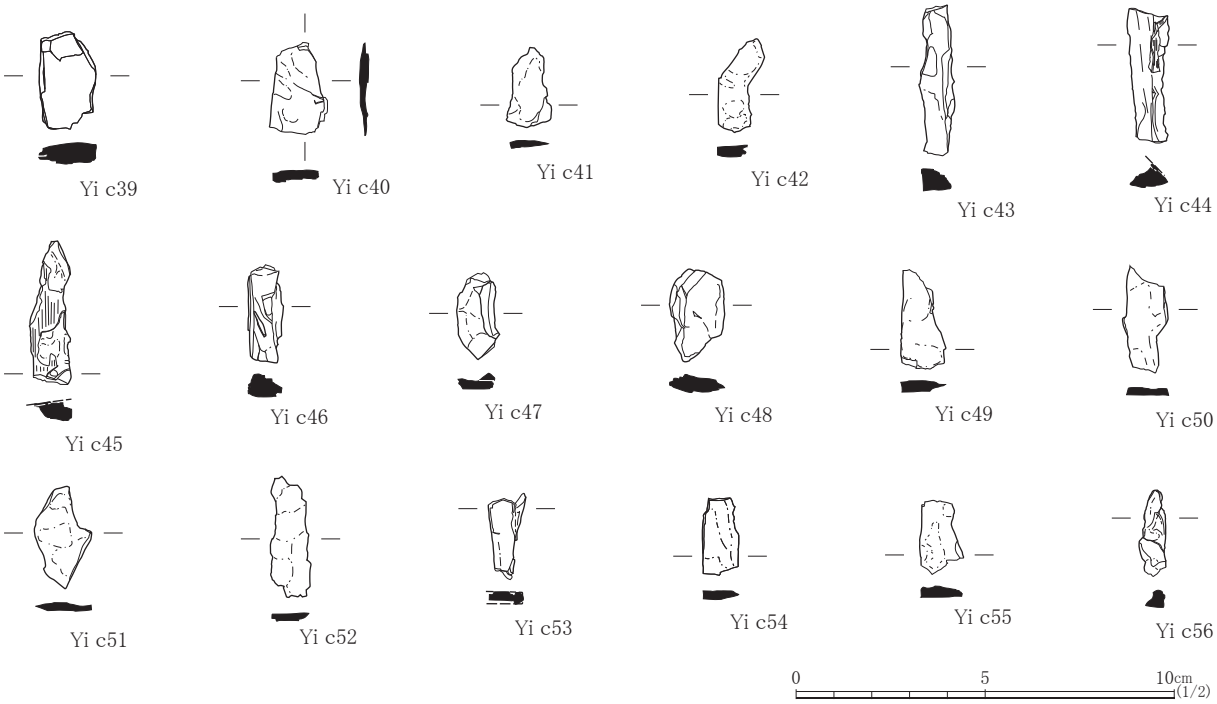


図9　第 151 号墳出土鉄器（中央部）②

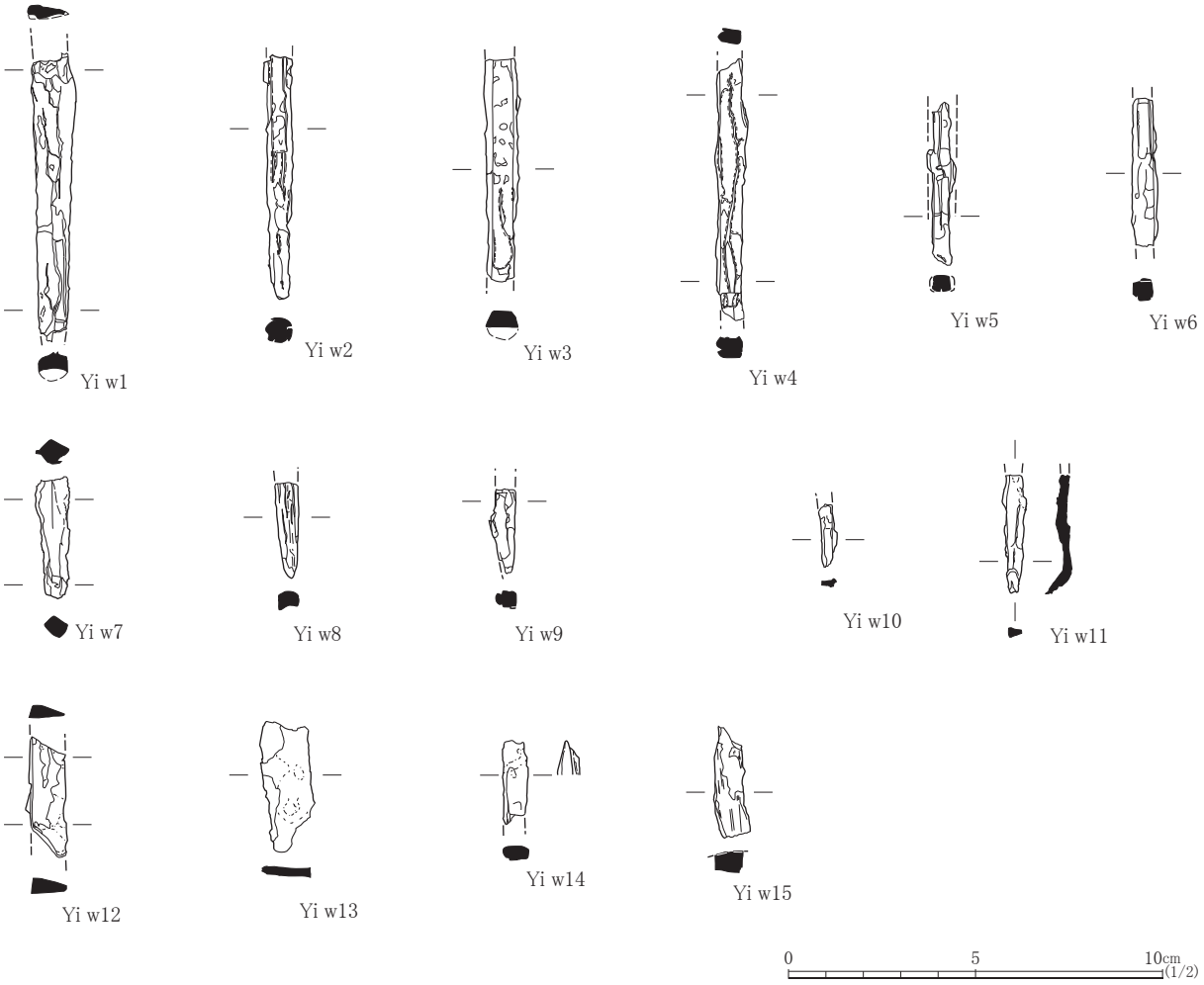


図 10　第 151 号墳出土鉄製品（西端部）

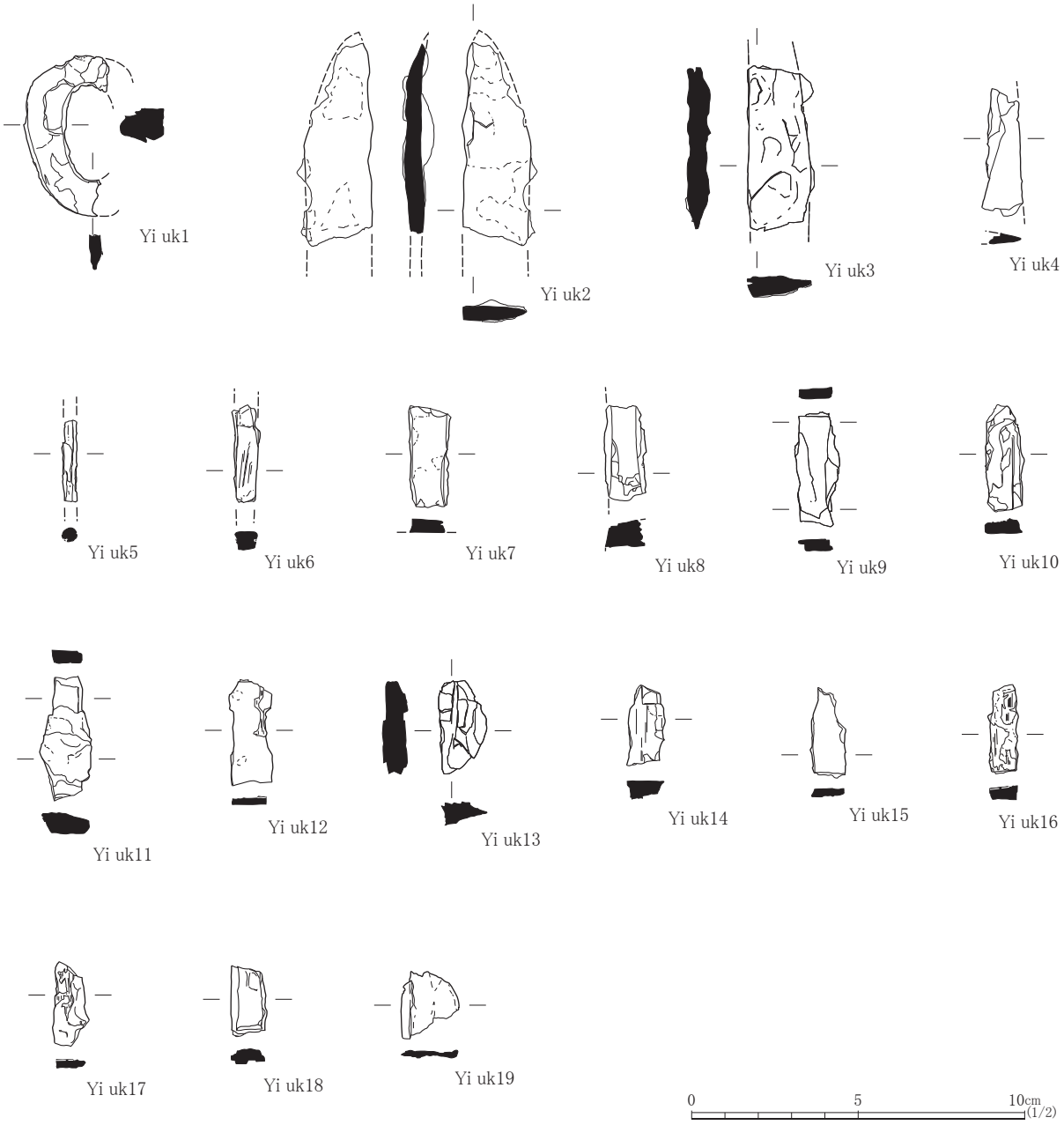


図 11　第 151 号墳出土鉄製品（地点不明）

写真 13　第 151 号墳出土鉄製品（中央部）①

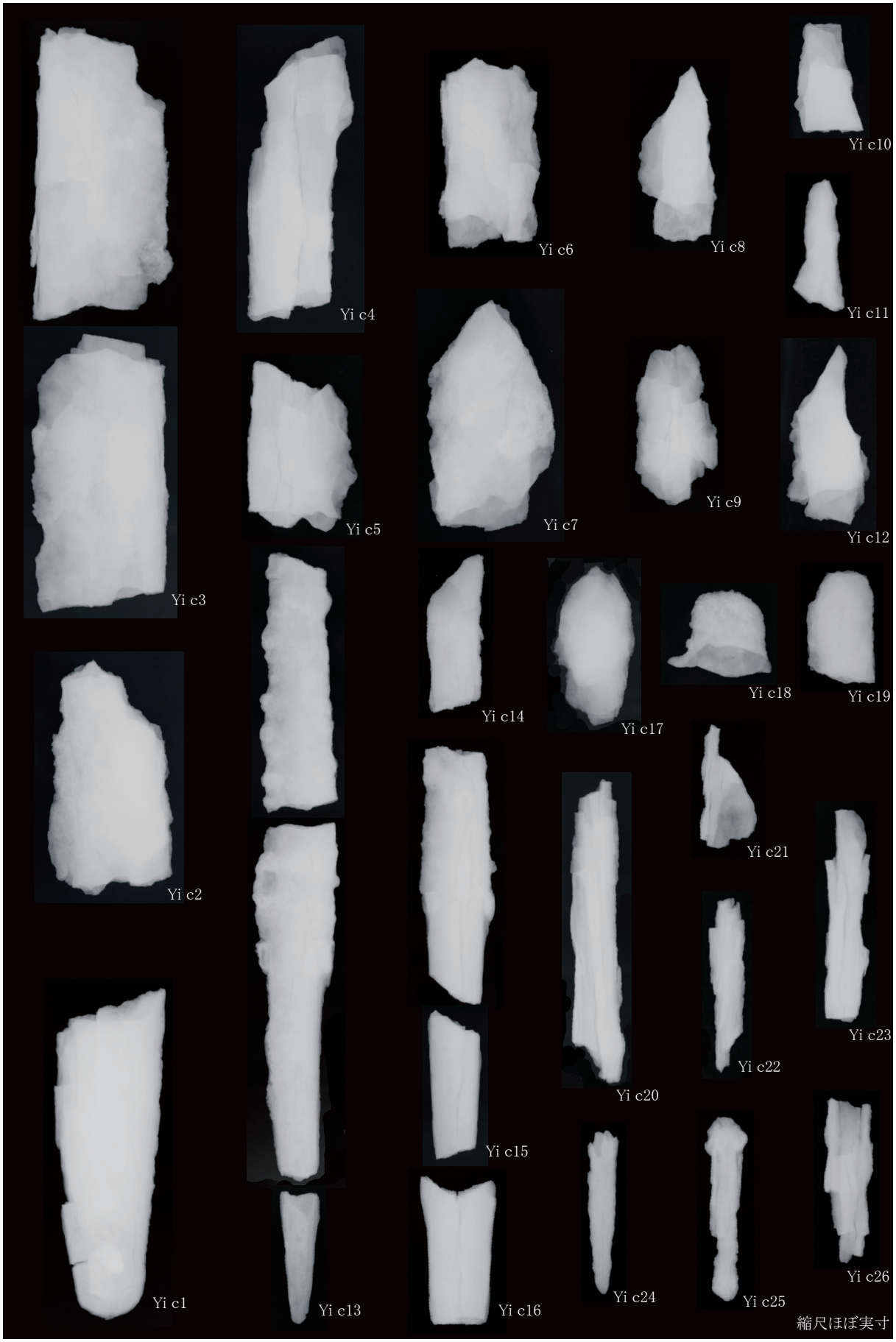


写真 14　第 151 号墳出土鉄製品（中央部）①X線画像

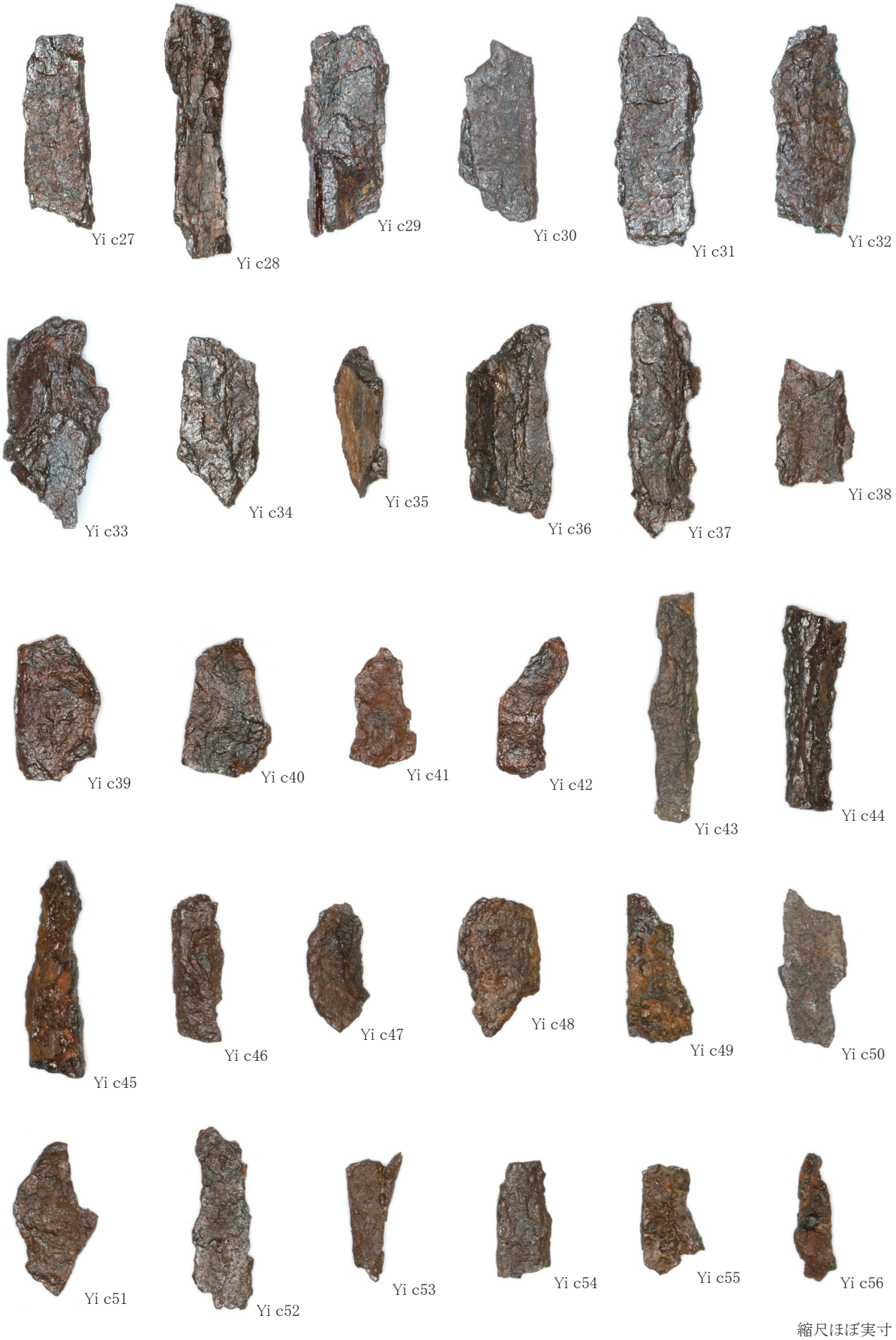


写真 15　第 151 号墳出土鉄製品（中央部）②

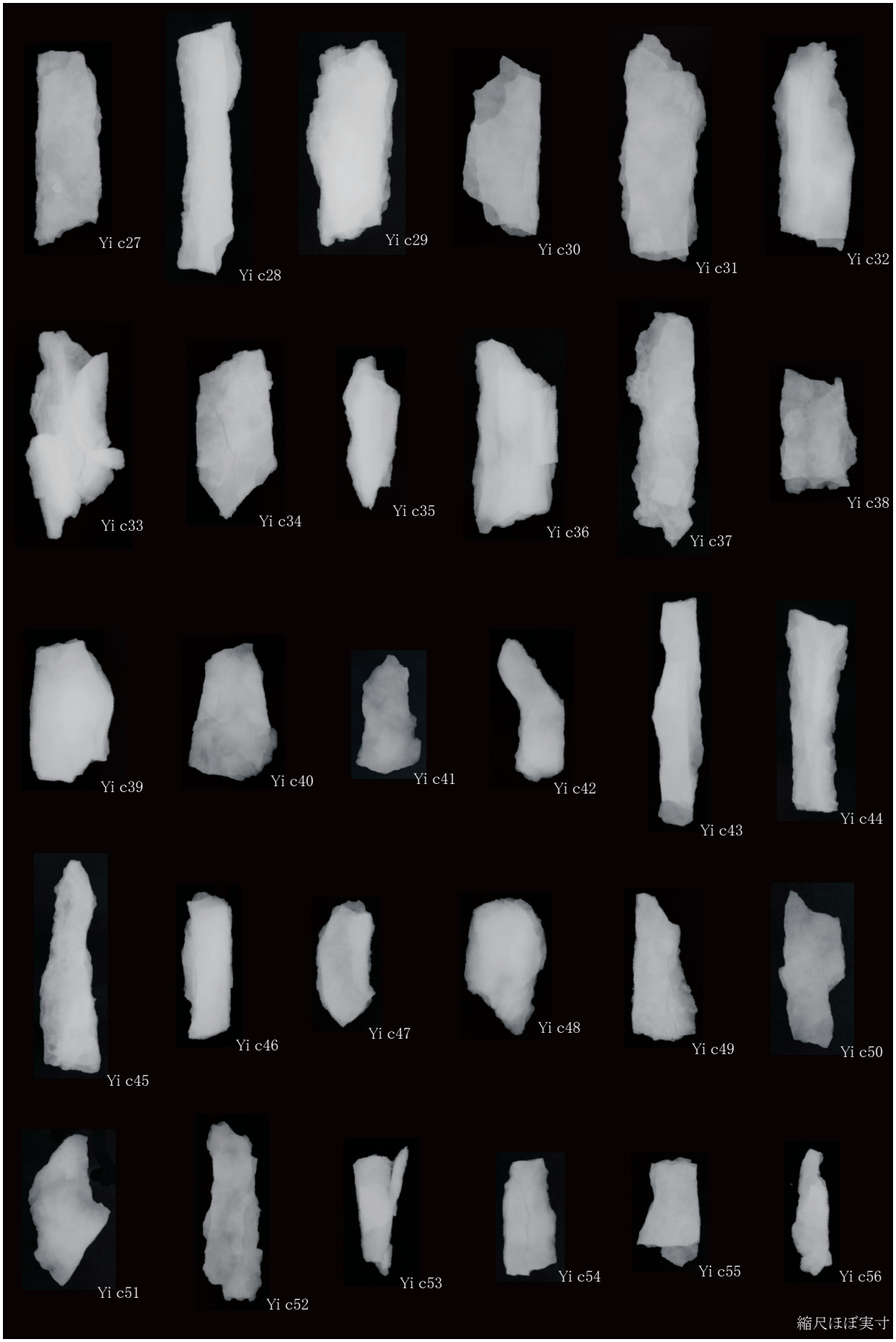
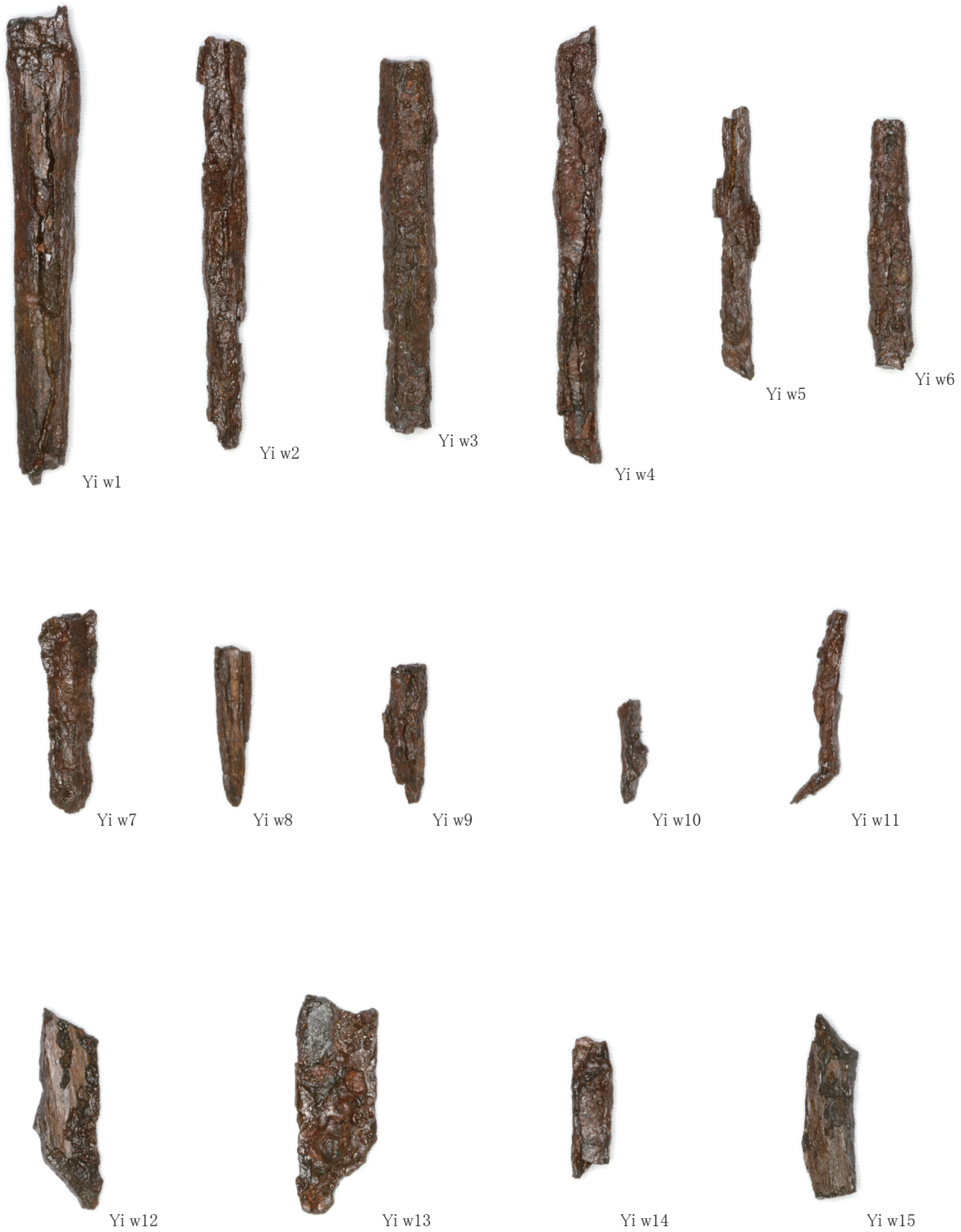


写真 16　第 151 号墳出土鉄製品（中央部）②X線画像



縮尺ほぼ実寸

写真 17　第 151 号墳出土鉄製品（西端部）

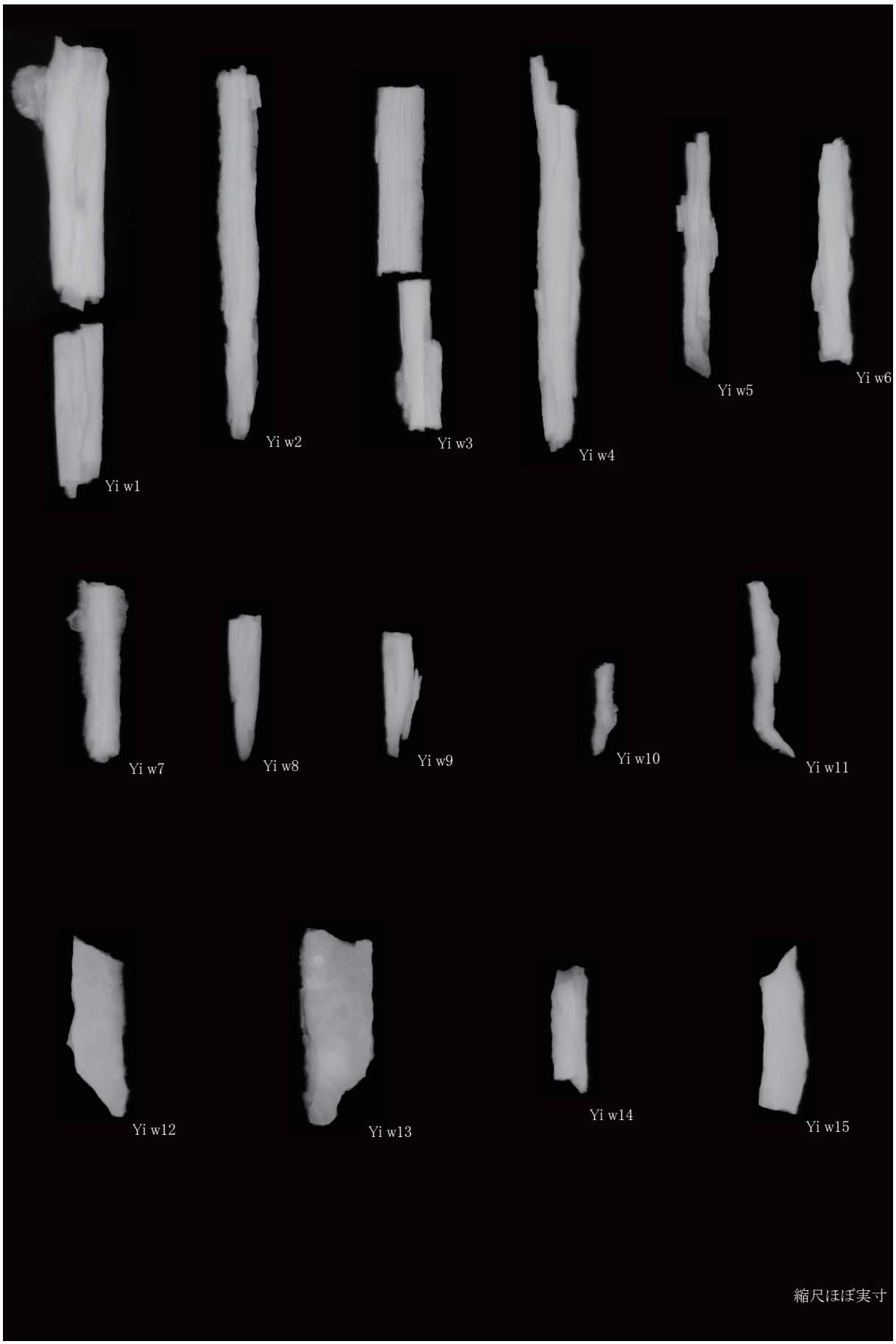


写真 18　第 151 号墳出土鉄製品（西端部）X線画像

縮尺ほぼ実寸

写真 19　第 151 号墳出土鉄製品（地点不明）

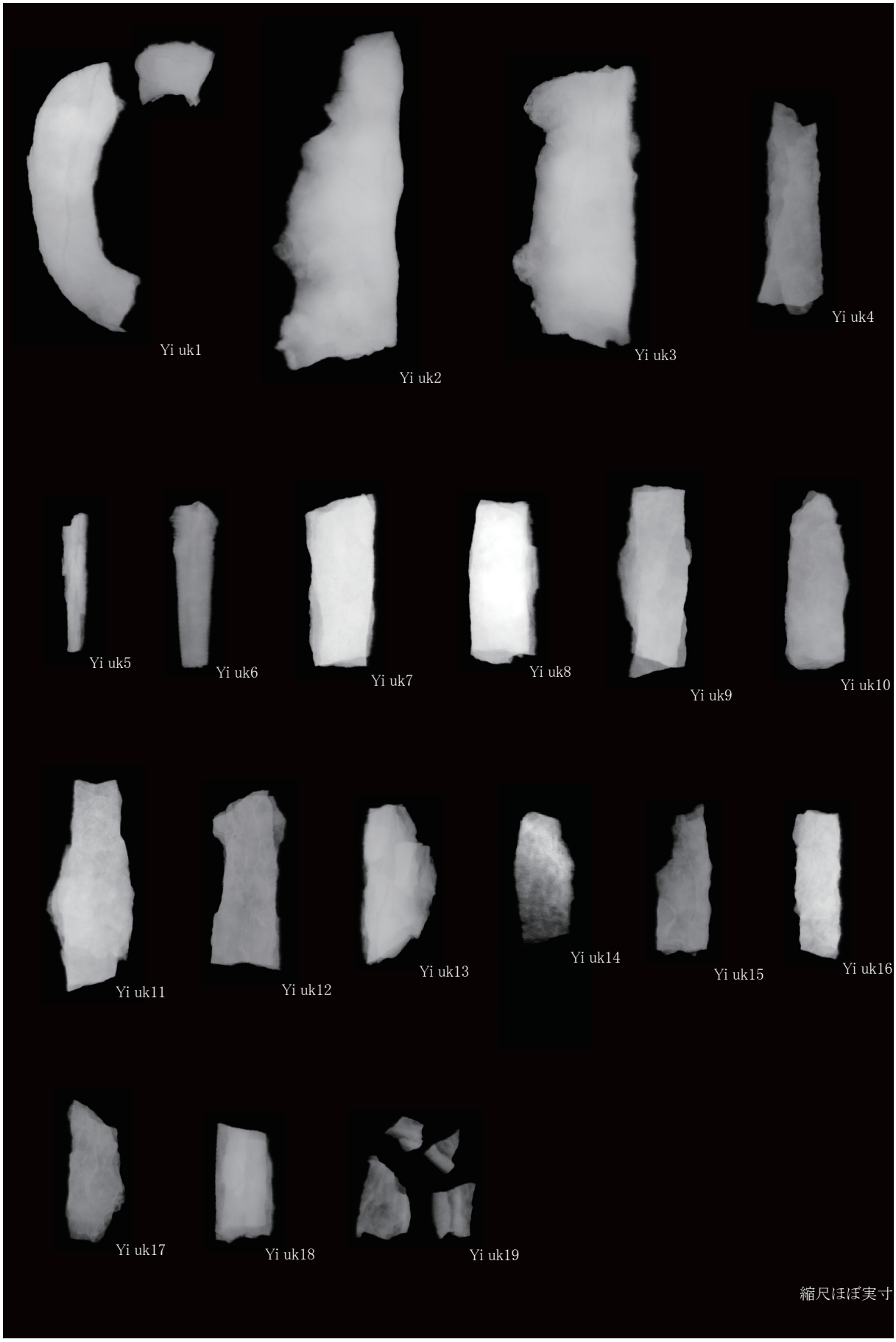


写真 20　第 151 号墳出土鉄製品（地点不明）X線画像

表3　第 151 号墳出土遺物（鉄製品）観察表（中央部）

法量は残存最大値 ()は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量 ①長さ(mm) ②幅(mm) ③厚さ(mm) ④重量(g)	備考
Yi c1	151号墳　中央部	鉄刀	茎部片	①57.5 ②20 ③8.5 ④19.31	目釘・木質遺存
Yi c2	151号墳　中央部	鉄刀	刀身部片	①41 ②23 ③8.6 ④12.46	木質遺存
Yi c3	151号墳　中央部	鉄刀	刀身部片	①14.6 ②25.5 ③6.1 ④25.62	
Yi c4	151号墳　中央部	鉄刀	刀身部片	①51 ②15 ③7.6 ④10.5	
Yi c5	151号墳　中央部	鉄刀	刀身部片	①30 ②20 ③5.5 ④5.33	
Yi c6	151号墳　中央部	鉄刀	刀身部片か	①34 ②18 ③6.5 ④6.46	
Yi c7	151号墳　中央部	鉄刀	刀身部片か	①41 ②22.5 ③5.5 ④7.77	
Yi c8	151号墳　中央部	鉄刀	刀身部片か	①31.1 ②13.3 ③6.8 ④3.87	木質遺存
Yi c9	151号墳　中央部	鉄刀	刀身部片か	①27.5 ②15 ③7.5 ④3.21	
Yi c10	151号墳　中央部	鉄刀	刀身部片か	①19.3 ②11.4 ③6.5 ④2.41	木質遺存
Yi c11	151号墳　中央部	鉄刀	刀身部片か	①23.1 ②8.1 ③7.5 ④1.97	刃部片か
Yi c12	151号墳　中央部	鉄刀	刀身部片か	①3.16 ②14.1 ③7.8 ④4.08	
Yi c13	151号墳　中央部	刀子	刀身～茎部	①131.5 ②13.4 ③5.1 ④16.45	鋒部欠損
Yi c14	151号墳　中央部	刀子	刀身部片か	①27.4 ②10.1 ③5.5 ④2.55	
Yi c15	151号墳　中央部	刀子	刀身～茎部	①68 ②13.5 ③5.8 ④9.92	
Yi c16	151号墳　中央部	刀子	茎部片か	①26.5 ②13.5 ③6.7 ④4.33	木質遺存
Yi c17	151号墳　中央部	鉄鏃か	鏃身部か	①28.3 ②14.5 ③4.9 ④2.71	
Yi c18	151号墳　中央部	鉄鏃	鏃身部	①15.6 ②18.3 ③5.0 ④1.39	
Yi c19	151号墳　中央部	鉄鏃	鏃身部	①20.5 ②12.5 ③4.3 ④1.9	裏面剥離
Yi c20	151号墳　中央部	鉄鏃	頸部片	①53.1 ②9.1 ③9.3 ④6.04	
Yi c21	151号墳　中央部	鉄鏃	頸部片か	①21.7 ②9.9 ③7.3 ④0.96	
Yi c22	151号墳　中央部	鉄鏃	茎部片か	①30.6 ②7.0 ③6.7 ④1.61	
Yi c23	151号墳　中央部	鉄鏃	鏃身～頸部片	①37.1 ②7.9 ③6.9 ④3.21	木質遺存。巻き付けたような痕跡。
Yi c24	151号墳　中央部	鉄鏃	茎部片	①28.6 ②4.8 ③5.4 ④1.01	
Yi c25	151号墳　中央部	鉄鏃	茎部片	①32.1 ②7.6 ③5.6 ④1.64	
Yi c26	151号墳　中央部	鉄鏃	頸部片か	①28.8 ②8.6 ③4.8 ④1.71	
Yi c27	151号墳　中央部	鉄片		①34 ②11.5 ③3 ④2.39	
Yi c28	151号墳　中央部	鉄片		①44 ②12 ③6.5 ④5.8	木質遺存
Yi c29	151号墳　中央部	鉄片		①36.5 ②13.5 ③14.5 ④9.24	
Yi c30	151号墳　中央部	鉄片		①32 ②13.5 ③2.7 ④2.12	
Yi c31	151号墳　中央部	鉄片		①40.5 ②14.5 ③3.5 ④3.44	
Yi c32	151号墳　中央部	鉄片		①37.5 ②14 ③6 ④4.17	
Yi c33	151号墳　中央部	鉄片		①37 ②18 ④5.12	2片が付着
Yi c34	151号墳　中央部	鉄片		①30 ②14 ③4.5 ④2.87	
Yi c35	151号墳　中央部	鉄片		①26.5 ②9 ③6.5 ④2.62	木質遺存
Yi c36	151号墳　中央部	鉄片		①34 ②14 ③7.5 ④5.03	
Yi c37	151号墳　中央部	鉄片		①41.5 ②12 ③4.7 ④3.26	
Yi c38	151号墳　中央部	鉄片		①22 ②14 ③2.5 ④1.09	木質遺存
Yi c39	151号墳　中央部	鉄片		①25.5 ②15.2 ③5.9 ④4.13	
Yi c40	151号墳　中央部	鉄片		①24.1 ②15.7 ③2.9 ④1.49	
Yi c41	151号墳　中央部	鉄片		①21 ②11.6 ③2.0 ④0.67	
Yi c42	151号墳　中央部	鉄片		①25 ②11.4 ③3.4 ④1.19	
Yi c43	151号墳　中央部	鉄片		①40 ②9.1 ③5.2 ④2.85	
Yi c44	151号墳　中央部	鉄片		①35.3 ②11.4 ③5.4 ④2.67	木質遺存
Yi c45	151号墳　中央部	鉄片		①37.8 ②10.7 ③5.4 ④2.81	木質遺存
Yi c46	151号墳　中央部	鉄片		①25.5 ②8.8 ③6.0 ④2.34	
Yi c47	151号墳　中央部	鉄片		①22.6 ②10.4 ③4.4 ④1.34	2片が付着か
Yi c48	151号墳　中央部	鉄片		①24.2 ②14 ③4.1 ④2.12	

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量 ①長さ(mm) ②幅(mm) ③厚さ(mm) ④重量(g)	備考
Yi c49	151号墳　中央部	鉄片		①26 ②11.6 ③3.2 ④1.62	
Yi c50	151号墳　中央部	鉄片		①27.8 ②12.1 ③1.9 ④0.95	
Yi c51	151号墳　中央部	鉄片		①26.8 ②14.9 ③2.8 ④1.31	
Yi c52	151号墳　中央部	鉄片		①31.6 ②10.8 ③2.1 ④1.04	
Yi c53	151号墳　中央部	鉄片		①22.7 ②9.6 ③3.9 ④1.06	
Yi c54	151号墳　中央部	鉄片		①20.5 ②9.6 ③2.4 ④1.05	
Yi c55	151号墳　中央部	鉄片		①19.2 ②11.3 ③3.0 ④1.07	
Yi c56	151号墳　中央部	鉄片		①22.3 ②7.1 ③4.9 ④0.92	

表4　第 151 号墳出土遺物（鉄製品）観察表（西端部）

法量は残存最大値 ()は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量 ①長さ(mm) ②幅(mm) ③厚さ(mm) ④重量(g)	備考
Yi w1	151号墳　西端部	刀子	茎部	①77 ②11 ③5.1 ④10.94	裏面剥離
Yi w2	151号墳　西端部	鉄鏃	頸～茎部	①61 ②7 ③6.2 ④5.92	
Yi w3	151号墳　西端部	鉄鏃	頸部	①60 ②5.5 ③4.1 ④6.53	裏面剥離
Yi w4	151号墳　西端部	鉄鏃	頸～茎部か	①70 ②8 ③5.2 ④7.52	
Yi w5	151号墳　西端部	鉄鏃	頸～茎部か	①43.5 ②7.5 ③4.1 ④2.1	
Yi w6	151号墳　西端部	鉄鏃	頸部か	①40 ②5.5 ③5.1 ④3.66	
Yi w7	151号墳　西端部	鉄鏃	茎部	①33 ②9 ③6.3 ④2.62	
Yi w8	151号墳　西端部	鉄鏃	茎部	①26 ②6 ③4.9 ④1.19	木質遺存
Yi w9	151号墳　西端部	鉄鏃	茎部	①23.5 ②6 ③4.1 ④1.35	
Yi w10	151号墳　西端部	金具か	先端部	①17 ②3.5 ③1.9 ④0.32	Yi w11と同一個体か
Yi w11	151号墳　西端部	金具か	先端部	①32 ②7 ③3.2 ④1.26	先端が「く」字上に曲がる。Yi w10と同一個体か。
Yi w12	151号墳　西端部	鉄片		①32 ②9.5 ③4 ④2.71	刀子か。木質遺存。
Yi w13	151号墳　西端部	鉄片		①35 ②13.5 ③2 ④3.01	
Yi w14	151号墳　西端部	鉄片		①22.5 ②6.5 ③5.9 ④1.55	鉄鏃鏃身部か
Yi w15	151号墳　西端部	鉄片		①31 ②9 ③6 ④3.23	木質遺存

表5　第 151 号墳出土遺物（鉄製品）観察表（地点不明）

法量は残存最大値 ()は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量 ①長さ(mm) ②幅(mm) ③厚さ(mm) ④重量(g)	備考
Yi uk1	151号墳　地点不明	鐔	半損	①48 ②26 ③10 ④11.14	
Yi uk2	151号墳　地点不明	鉄刀	鋒部	①60.8 ②22.2 ③9.9 ④15.63	
Yi uk3	151号墳　地点不明	鉄刀	刀身鋒部付近	①49.3 ②20 ③8.1 ④13.72	
Yi uk4	151号墳　地点不明	刀・刀子	刃部片	①38 ②12 ③3.1 ④2.81	
Yi uk5	151号墳　地点不明	鉄鏃	茎部	①24.4 ②4.3 ③4.3 ④0.8	
Yi uk6	151号墳　地点不明	鉄鏃	茎部	①29.1 ②8 ③7.5 ④2.56	木質遺存
Yi uk7	151号墳　地点不明	鉄片		①30 ②10 ③4 ④4.8	木質遺存
Yi uk8	151号墳　地点不明	鉄片		①28.5 ②10 ③8.2 ④7.38	
Yi uk9	151号墳　地点不明	鉄片		①34.2 ②13.1 ③3.9 ④3.32	
Yi uk10	151号墳　地点不明	鉄片		①31.9 ②11.2 ③4.2 ④3.13	
Yi uk11	151号墳　地点不明	鉄片		①37.4 ②15.6 ③5.8 ④4.52	
Yi uk12	151号墳　地点不明	鉄片		①25.2 ②10.8 ③2.5 ④1.07	
Yi uk13	151号墳　地点不明	鉄片		①28 ②15.1 ③8 ④3.85	
Yi uk14	151号墳　地点不明	鉄片		①24 ②11.4 ③5.2 ④2.62	木質遺存
Yi uk15	151号墳　地点不明	鉄片		①26.9 ②10.1 ③2.4 ④1.08	
Yi uk16	151号墳　地点不明	鉄片		①26.5 ②8.8 ③3.7 ④1.86	木質遺存
Yi uk17	151号墳　地点不明	鉄片		①25.2 ②10.8 ③2.5 ④1.07	木質遺存
Yi uk18	151号墳　地点不明	鉄片		①21 ②10.4 ③4.5 ④1.85	
Yi uk19	151号墳　地点不明	鉄片		①20 ②17.1 ③2.1 ④0.81	

第Ⅲ章　第151号墳の考察

第1節　遺物に見る築造・埋葬年代

『見島総合学術調査報告』においては、床面出土品として須恵器甕口縁部片1点（本書図5 H14）のみが図示されるに止まったため、見島ジーコンボ古墳群に関する論考では第151号墳の築造年代等に対し言及が控えられる傾向にあった[註1]。この度の資料再調査により、第154号墳同様本墳においても比較的豊富な土器資料が存在することが確認された。

さらに山口大学埋蔵文化財資料館に所蔵される第151号墳出土人骨の鑑定[註2]により、遊離歯から成人3体と未成人2体分、合計5体の埋葬が確認されている。複数遺体の同時埋葬または再葬も考慮しなければならない問題ではあるが、狭小な石棺状石室であることを考えると同時埋葬はやや無理な感があり、再葬に関しても既往の調査成果を鑑みると根拠としうる資料は見あたらない。当墳に対しては素直に5回の埋葬行為があったと見なしておく。

さて、第151号墳の築造および5度に及ぶ埋葬時期を推察するに当たり、出土土器類をA～Dの4群に分けて考察したい（図12）。

【A群】

初葬、すなわち墳墓築造時期の資料と見なす。須恵器高台付坏身H1は、口径に比して深い坏部を有し、緩やかに「く」の字状に開く高台は底部内寄りに付く。7世紀後半（第4四半世紀）に比定しておく。この高台付坏身に伴う明確な土器類は存在しないが、器面の風化が著しい丸底の須恵器坏底部または天井部片H7、そいて赤色塗彩がなされ丁寧に磨かれた土師器坏底部片H28が初葬に伴う土器である可能性を残す。

【B群】

須恵器高台付坏身H2、須恵器坏蓋H8・H9をB群とする。須恵器高台付坏身H2は端部がシャープに仕上げられた小ぶりの高台が底体部境界からやや内側に付く。体部は開き気味に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。須恵器坏蓋H8・9はドーム形の天井部に扁平なボタン状つまみを有する。天井部からなだらかに降下して口縁部に至り、口縁端部は丸みを帯び鳥嘴状に下垂している。山口県内では池田善文氏の長登編年2類、防長編年ⅦA期[註3]に所属する資料である。山口県の日本海側に位置する須恵器窯では、峠山古墳群第1号窯出土坏類[註4]がこれに類似する。この他、完形復元はできないが、須恵器長頸壺H15もB群に伴う資料と見られる。従来の年代観を考慮し、8世紀前半（第2四半世紀）頃に比定しておく。

【C群】

須恵器高台付坏H3、須恵器坏蓋H10をC群とする。須恵器高台付坏身H3は幅広で大ぶりの高台が底体部境界付近に付く。体部は大きく開いて立ち上がり、外面にロクロ水引き成形痕が顕著に残る。破片資料H4・5も同一形態と推測される。須恵器坏蓋H10はB群の坏蓋に比して器高の低下が見られ、扁平な天井部に肩の張る形態となる。口縁端部はやや尖り気味となり、鳥嘴状に下垂させる。破片資料のH13も同一形態か。須恵器坏蓋形態は長登編年3類、防長編年ⅦB期に該当するが、高台付坏身は特徴からさらに後出のものである可能性を有す。C群に対しては8世紀後半（第3・4四半世紀）と幅広く年代を見ておきたい。

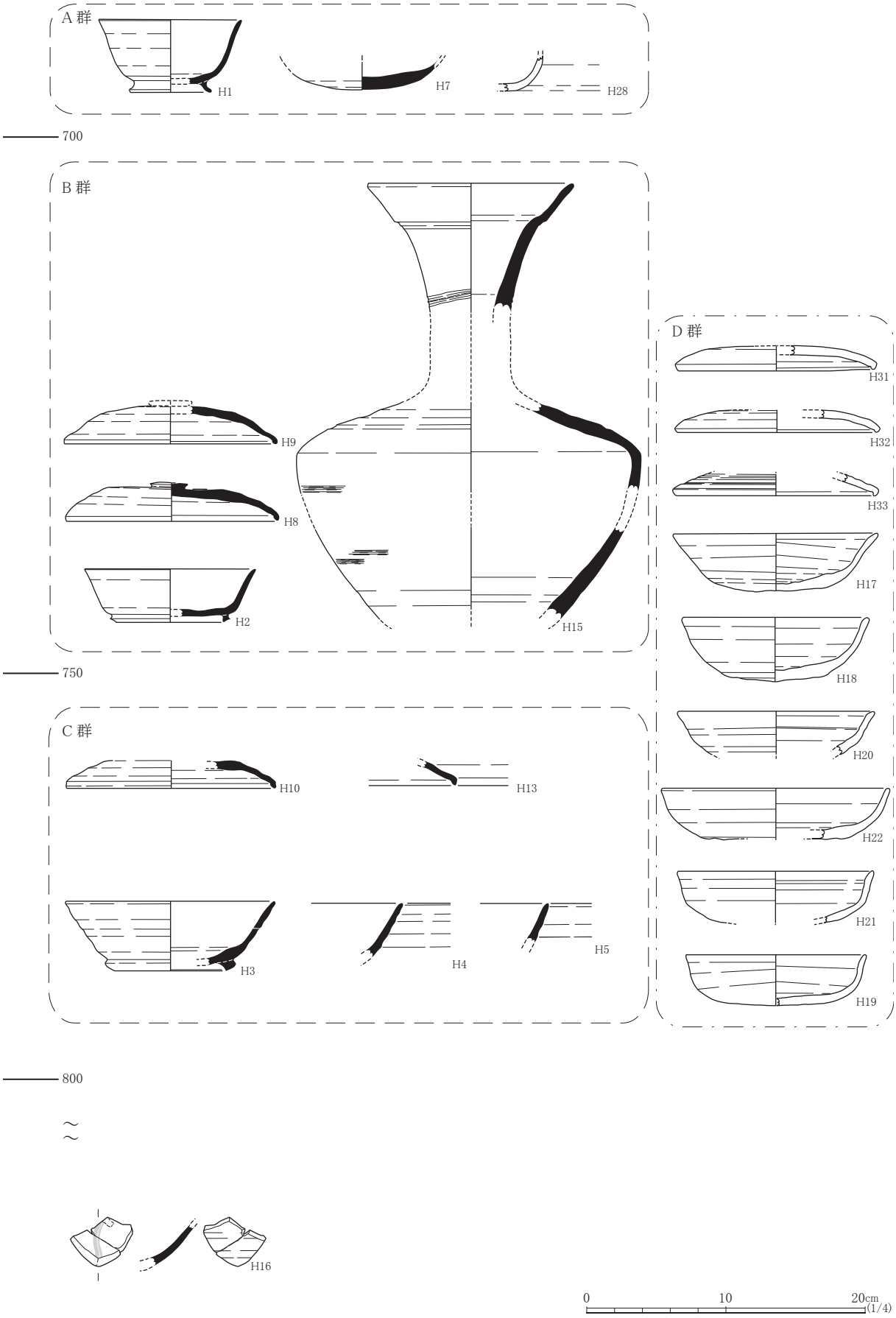


図 12　第 151 号墳出土土器類変遷試案

【D群】

この一群にはロクロ成形された土師器類を当てる。この一群は須恵器の焼成不良品とも見られるが、各埋葬時毎に共通した胎土・焼成特徴を有する土器が偶然生産され副葬・供献されたとも考えがたく、また坏身が無高台のものしか存在しないことから同一時の生産・使用を推定する。

所属時期に関しては、近年刊行された8世紀代の窯跡群である陶窯跡群西の浴支群[註5]出土の須恵器無高台坏身群などに法量及び形態的な類似が見られ参考となるが、詳細な時期までは特定できない。また坏身とセットになるであろう蓋H31・32も須恵器坏蓋に類形を見出し難いが、尖り気味の口縁端部を鳥嘴状に下垂させる蓋破片H33を重視すれば、あるいは長登編年3類、防長編年ⅦB期に比定することも可能ではあろうか。いずれにせよ根拠に乏しい類推であり、D群の所属時期に関しては今後の課題としたい。

この他、所属時期が大きく下る資料として越州窯産青磁片H16が存在する。小破片1点であり、本墳の副葬・供献品と見なして良いかに不安が残る。

【註】

1）文献3の111頁

2）本書所収付篇1参照

3）文献2a・2b

4）文献6・19

5）陶窯跡群西の浴支群は確認された全6基の窯跡に発掘調査が実施されており、1号窯から6号窯に操業が推移するものと推定されている。青島啓氏により最古に位置づけられる1号窯の年代が8世紀第2四半世紀と推定されているが、最後に築窯された6号窯の年代には言及されていない（文献1）。

第2節　第151号墳の特徴

第151号墳は、昭和35年（1960）から昭和37年（1962）の3ヶ年にかけて実施された調査により、古墳群西部域に特徴的に分布する「石塊や割石を一重に並べて箱形に組んだもの。組合せ式石棺に近い形態」のB式石室に含められている。さらには古墳群造営の変遷として横穴式石室の影響下に成立したと見なされたA式石室からB式石室への移行、すなわち古墳群が東部域から西部域へと発展したと推測されている。

古墳群の築造時期に関しては、『見島総合学術調査報告』では「7世紀後半の頃から10世紀はじめの頃」が想定[註1]されている。本書において第151号墳が7世紀後半に築造された可能性を示したが、同じくB式石室に含まれる第154号墳においても、床面または撹乱層・表土出土の土器類に7世紀後半から8世紀初頭に比定される資料が含まれていることから、古墳群造営開始期よりA式・B式が共存した可能性がさらに高まったと言える。

第154号墳の報告において筆者は第16号墳と出土遺物の組成を比較し、簡便な箱式石棺状の主体部を有し、征矢しか有さない前者を「兵士」墓に、横穴式石室状で比較的広い埋葬空間を有し、腰帯具や鏑矢・上差矢を有する後者を「武官」墓と想定した[註2]。しかし今回の調査により同様に簡便な箱式石棺状石室を有す第151号墳からも腰帯具とともに鍍金された刀装具の存在が確認されるに至った。この事実は被葬者集団の個々人の階層性は石室形態に直接的に反映しないことを物語っており、今後古墳群に

おいて支群を判別する必要性、換言すると大集団内に小集団を識別・考察する必要性を示している。

また、出土人骨の鑑定により第151号墳には5体もの遺体が埋葬されていたことが確認された。第151号墳の石室空間は床面幅約1m、高さ約0.5mが想定される。このような狭小空間に横口から5度もの埋葬が果たして可能であっただろうか。

前述の如く、当墳は撹乱・盗掘が著しいもののそれなりに豊富な遺物を見ることができる。土器類から見る限り、複数時期の資料が存在することから、1度の埋葬に伴い相当数の副葬・供献品も供えられたものと想像される。白骨化していたとしても、前葬された遺骸も埋葬空間のさらなる狭小化に拍車をかけていたであろう。通常の横穴式石室同様に追葬時に床面整理を行うにしても、横口からの進入、作業は極めて困難な状況に思える。箱式石棺状のB式石室がいずれも南西方向に開口した状況で確認されている事実は否定できないが、埋葬時にはあるいは上位、つまり天井石を外しての遺体の納入も可能性として指摘しておきたい。

最後に、出土人骨の構成について言及しておく。第151号墳では、成人3体（内男性1体か）、幼児2体の人骨が確認された。また既往の調査でも第72号墳では成人2体（内男性1体）と幼～小児1体の人骨[註3]が、第155号墳では成人2体（内男性1体、女性1体）の人骨と幼～小児の歯[註4]が確認されている。

以上を見る限り、脳裏に「家族墓」「血縁墓」が浮かぶのは筆者だけであろうか。人骨のみを視野に入れると、見島ジーコンボ古墳群を防人など任期付の軍事集団墓と解釈するには強い違和感を覚える。無理に解釈すれば当初派遣されたが土着した集団の存在、または家族を含めた集団の移住など様々な事象が想像されるが、見島ジーコンボ古墳群出土資料の考察だけでは解決の付かぬ問題に思える。この一大墳墓群を考古学的に解釈するには、彼らの居住址の確認とともに、墳墓造営以前、すなわち7世紀後半以前の見島の社会構造を復元する手掛かりを得ることが必要不可欠と言える。

【註】

1）文献7の441頁21行

2）文献18の52～53頁

3）文献14

4）文献15

【文献】

1）青島啓ほか（2011）『陶窯跡』山口市埋蔵文化財調査報告第70集，山口市教育委員会文化財保護課（編），山口

2）a：池田善文（1993）「土器の基準資料と編年」，池田善文（編）『長登銅山Ⅱ』美東町文化財調査報告第5集，美祢（山口）

b：池田善文（2004）「集成　須恵器」，山口県（編）『山口県史』資料編考古2，山口

3）市来真澄（2011）「見島ジーコンボ古墳群の構築時期と石室について」，海の古墳を考える会（編）『海の古墳を考えるⅠ－群集墳と海人集団－発表要旨』，北九州（福岡）

4）小田富士雄（1975）「萩の埋蔵文化財」，史都萩を愛する会（編）『史都萩』第32号，萩（山口）

5）国守進「中世の見島」，萩市史編纂委員会（編）『萩市史』第2巻，萩（山口）

6）桑原邦彦・池田善文（1981）「防長地域の須恵器窯跡と編年研究」，周陽考古学研究所（編）『山口県の土師器・須恵器－編年と集成－』周陽考古学研究所報3，光（山口）

7）斎藤忠・小野忠熙（1964）「考古の部」，山口県教育委員会（編）『見島総合学術調査報告』，山口

8）俵教雄（1959）「第二部　沿革　第四編　古代」，萩市誌編纂委員会（編）『萩市誌』，萩（山口）

9）a：中村徹也（1983）「[特別講演]ジーコンボ古墳群から見た見島（上）」，史都萩を愛する会（編）『史都萩』第45号，萩（山口）

b:中村徹也(1983)「[特別講演]ジーコンボ古墳群から見た見島(下)」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第46号, 萩(山口)

10)中村徹也・国守進(1989)「原始・古代の見島」, 萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻, 萩(山口)

11)乗安和二三(1983)『見島ジーコンボ古墳群』, 山口県教育委員会(編), 山口県埋蔵文化財調査報告第73集, 山口

12)長谷川道隆(1975)「青磁にかくされた歴史－見島出土の唐末五代越州窯青磁片－」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第33号, 萩(山口)

13)匹田直・弘津史文・小川五郎・三宅宗悦・姉川従義(1927)「阿武郡見島文化の研究」, 山高郷土史研究会(編)『山高郷土史研究会考古学研究報告書－台覧紀年号－』, 山口

14)松下孝幸・分部哲秋・佐熊正史(1983)「山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨」, 山口県教育委員会(編)『見島ジーコンボ古墳群』山口県埋蔵文化財調査報告第73集, 山口

15)松下孝幸(1985)「山口県見島ジーコンボ古墳群の人骨－山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料－」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』, 山口

16)三輪善之助(1923)「長門見島の遺跡」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第14巻第3号, 東京

17)山本博(1935)「長門国三島村の弥生式遺跡と古墳出土遺物－特に□帯について－」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第25巻第8号, 東京

18)横山成己(2011)『見島ジーコンボ古墳群　第154号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書2, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

19)渡辺一雄ほか(1983)『生産遺跡分布調査報告書』山口県埋蔵文化財調査報告書第74集, 山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター(編), 山口

付篇1

山口県萩市ジーコンボ古墳群出土の人骨

松下孝幸*・松下真実**

【キーワード】:山口県、奈良時代人骨、保存不良

はじめに

ジーコンボ古墳群は萩市見島字片尻(381-1、387-1)に所在する。見島は萩市の北北西約46.3kmの日本海上に浮かぶ孤島で、その大きさは東西は約2.5km、南北約4.6km、面積約7.8km^{2}である。ジーコンボ古墳群は島の南東端にある礫浜堤に形成されている積石塚である。ジーコンボ古墳群の発掘調査は古くは大正15年に山口高等学校の歴史教室の人々によっておこなわれている(山口県教委、1964)。

山口県教育委員会は昭和35年度から3ヶ年に亘って見島総合学術調査を実施したが、ジーコンボ古墳群の発掘調査もこの時おこなわれ、昭和36年度には9基(123号墳,124号墳,128号墳,137号墳,151号墳,153号墳,154号墳,155号墳,156号墳)、37年度には7基(1号墳,44号墳,56号墳,77号墳,61号墳,105号墳,116号墳)の発掘調査がおこなわれている。このうち昭和36年度に発掘調査がおこなわれた第123号墳と第155号墳から出土した人骨についてはすでに報告した(松下、1985)。第123号墳からは1体分の、第155号分からは3体分の人骨(歯)が検出されている。また、昭和57年7月には山口県教育委員会が3基の墳墓(第16号墳、第72号墳、第113号墳)の発掘調査を実施しており、3基からそれぞれ人骨が検出された。第16号墳と第113号墳からは1体分であったが、第72号墳からは3体分が出土した(松下・他、1983b)。

山口県内での奈良時代人骨は、ジーコンボ古墳群人骨以外には存在しない。平安時代人骨は、防府市の周防国府跡(松下、1984)、周東町の上久宗遺跡(松下、1995)の例があるが、後者は火葬骨である。

熊本市では、新幹線工事と区画整理事業に伴って、熊本駅周辺での発掘調査が進み、二本木遺跡群から平安時代に属する人骨が相次いで検出されている。これほどまとまって古代人骨が出土することは珍しいが、それは発掘調査範囲が広域に亘っていることや、官衙遺構が検出されるなど、古代においてこの地域が都市機能の中心地であったために厚葬される人たちが比較的多かったことによるものであろう。

今回報告する人骨と歯は、昭和36年度に調査がおこなわれた第151号墳から出土した人骨と歯である。残存量はきわめて少量であったが、個体数などを推測することができたので、その結果を報告しておきたい。

資料および所見

今回報告する人骨と歯は、山口大学埋蔵文化財資料館に保管されていた第151号墳(MJ151)から出土した人骨と歯である。これらは考古学的所見から8世紀初頭に属すると推測されている。骨片を接合したところ大腿骨体を復元することができた。遊離歯は合計26本残存していたが、表1に示すとおり、少なくとも

* Takayuki　MATSUSHITA、** Masami　MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

成人3体、幼児2体、合計5体分の遊離歯と思われる。大腿骨は後述しているように男性大腿骨と思われるが、遊離歯の性別は不明である。また、未成人遊離歯冠は2体とも4～5歳程度と推測される。

表1　資料(Table 2. List of skeletons)

人骨番号など	性別	年齢	備考
FE-01	男性	不明	大腿骨のみ
遊離歯	―	―	少なくとも成人3体、幼児2体、合計5体

1．人骨

（1）大腿骨（FE-01）（男性・年齢不明）

四肢骨片が残存していた。破片を接合したところ(TB001+002+003+004+005+006+008)、大腿骨体の中央部分を復元することができた。前面部分しか残っていないので、左右どちらの大腿骨体かが明確ではないが、殿筋粗面の一部とみられる部分から、左側と推測した。後面を欠失しているので、計測はできないが、径は小さくはない。粗線の様態は不明である。残存部分の骨体横径は29mmあることから、男性大腿骨の可能性が強い。年齢は不明である。

2．歯

遊離歯が26本残存していた。番号を付けて取り上げられていたので、1本ずつ同定をおこなった。その結果は次のとおりである。

表2　残存歯一覧(Table 2. List of teeth)

番　号	歯　種	咬耗度など
TB046	下顎左第一大臼歯	咬耗度はBrocaの1度
TB047	下顎右第二大臼歯	咬耗度はBrocaの1度　頬側面に齲蝕
TB048	上顎左第一大臼歯	咬耗度はBrocaの1度
TB049	下顎右第三大臼歯	咬耗はなし
TB050	上顎右第二大臼歯	咬耗度はBrocaの2度で、部分的には強い。
TB051	上顎左第二大臼歯	咬耗度はBrocaの1度
TB052	上顎左第二乳臼歯	咬耗度はBrocaの1度
TB053	下顎左第一乳臼歯	咬耗度はBrocaの1度
TB054	下顎右第一大臼歯	歯冠のみ、咬耗なし
TB055	下顎左第一大臼歯	歯冠のみ、咬耗なし
TB056	上顎右第一乳臼歯	咬耗度はBrocaの1度
TB057	下顎左第二乳臼歯	咬耗度はBrocaの1度
TB058	上顎左犬歯	咬耗度はBrocaの1度
TB059	歯ではない。石か？	
TB060	下顎右第二小臼歯	咬耗度はBrocaの2度
TB061	上顎右第一大臼歯	歯冠のみ、咬耗なし カラベリの結節が認められる。出現部位は舌側近心咬頭の舌側である。
TB062	下顎左第二乳臼歯か？	咬耗度はBrocaの1度

TB063	上顎左中切歯	歯冠のみ。咬耗度はBrocaの1度
TB064	下顎左側切歯	咬耗度はBrocaの1度
TB065	下顎右側切歯	咬耗度はBrocaの1度
TB066	下顎右犬歯	咬耗なし
TB067	上顎右犬歯	咬耗度はBrocaの3度で、強い。
TB068	歯ではない。石か？	
TB069	上顎左第一小臼歯	歯冠のみ、咬耗なし
TB070	上顎右犬歯	歯冠のみ、咬耗なし
TB071	下顎右第一小臼歯	歯冠のみ、咬耗なし
TB072	下顎右中切歯	咬耗度はBrocaの2度
TB073	下顎右側切歯	咬耗度はBrocaの1度

26本の遊離歯から成人の歯と未成人の歯が存在することがわかった。大きさ、咬耗度から、成人の歯は少なくとも3体分(A・B・C)、未成人の歯は少なくとも2体分(D・E)あるようである。46,47,49,50,51,58,60,63,64,65,72はおそらく同一個体で男性歯と思われる(A)。67は他の歯とは異なり咬耗が著しく強いので、別個体とした(B)。また、66,73は他の歯より咬耗が弱く、色調も異なるので、別個体とした(C)。未成人歯は、下顎左第二乳臼歯が2本存在するので2体分(D・E)とした。2体とも4～5歳程度の幼児の歯と思われる。なお、成人の性別は不明である。

報告書によれば、内部主体は、組合箱式石棺に似た石室で、石室の石材に大部分割石が用いられている点が見島古墳群の中でも特異な存在とされている。また、人骨と遺物の検出状況については、「人骨の断片と歯牙は西端部と東寄りの2箇所から出土し、歯の数や形状と出土の地点などが、2体の成人骨を埋葬してあったことを物語っている。薄い割石の下に金環1対、素環式柄頭1、鉄刀の断片2、鉄鏃の柄部断片、鉄製金具10個と刀子1個が比較的まとまって出土している。なお人骨は保存状態が悪く、17個の歯牙と四肢骨の小断片で床面に散在しているにすぎなかった」とある。この石室内からは他の石室と同じように土師器よりも須恵器の方が多く検出されている。また、銅の「湯こぼれ」も確認されていることから、被葬者は鋳造技術に関与した人物との可能性が示唆されている。興味深いことに、この古墳の西北方約4.3メートルの地上で和銅開珎片も採集されている。

要　約

昭和36年度におこなわれた萩市見島にあるジーコンボ古墳群の発掘調査で、第151号墳から人骨片と歯が出土した。残存量は著しく少なかったが、人類学的観察をおこない、以下の結果を得た。

1. 人骨片は、大腿骨体の一部である。後面を欠失しているので、粗線の発達程度などは不明であるが、骨体の径は大きいようなので、男性大腿骨の左側骨体と思われる。
2. 遊離歯は成人3体分と未成人2体分、合計5体分と思われる。従って、第151号墳には少なくとも5体が埋葬されていたものと推測される。なお、成人の性別は不明である。
3. この人骨と歯は、考古学的所見から、8世紀に属すると推測されている。
4. 今回研究ができた資料からは被葬者の顔かたちを推測することはできなかったが、前回報告した資料では、上腕骨が太く、その割には大腿骨が細く、粗線や骨体両側面の後方への発達が悪いことから、

上肢筋の方が下肢筋よりも発達がよかったことが明らかになっている。孤島であることから海に依存するというかれらの生業形態、あるいは生活様式を物語っているのかもしれない。

謝辞

≪擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた山口大学埋蔵文化財資料館の皆様に感謝致します。≫

≪参考文献≫

1. 松下孝幸・他、1983a山口県防府市玉祖遺跡出土の平安・中世人骨。玉祖遺跡・西小路遺跡(山口県埋蔵文化財調査報告70):147-148.
2. 松下孝幸・他、1983b:山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨。見島ジーコンボ古墳群(山口県埋蔵文化財調査報告73):32-36.
3. 松下孝幸・他、1984:防府市周防国府跡出土の平安時代人骨。防府市文化財調査年報Ⅵ:535-544.
4. 松下孝幸、1985:山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨－山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料－。山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ:83-90.
5. 松下孝幸、1995:山口県周東町上久宗遺跡出土の火葬骨。山口県埋蔵文化財調査報告第174集:25-30.
6. 松下孝幸、2005:熊本市二本木遺跡群第18次調査出土の古代・近世人骨。二本木遺跡群Ⅰ－第18次調査区発掘調査報告書－:41-46.
7. 松下孝幸、2006:熊本市大江(学苑)遺跡群出土の平安時代火葬骨。大江遺跡群Ⅱ(熊本県文化財調査報告第231集):80-84.
8. 松下孝幸、2007a:熊本市古町遺跡第5次調査区出土の平安時代人骨。熊本市埋蔵文化財調査年報第9号:1　48-152.
9. 松下孝幸、2007b:熊本市大江遺跡群第97次調査区出土の平安時代人骨。大江遺跡群Ⅵ(－第97次・第106次調査区発掘報告書－):114-117.
10. 松下孝幸・他、2008:熊本市二本木遺跡群第28次調査区出土の古代・中世以降人骨。二本木遺跡群Ⅴ〔二本木遺跡群第28次調査区(E~I・K・L・P地点)発掘調査報告書〕〔熊本駅西土地区画整理事業にともなう発掘調査報告(2)〕:178-183.
11. 松下孝幸・他、2011:熊本市二本木遺跡群第41次調査区出土の古代人骨。二本木遺跡群ⅩⅡ－二本木遺跡群第41次調査区発掘調査報告書－:127-135.
12. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群第49次調査区出土の古代・近世人骨。(投稿中)
13. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群(合同庁舎)出土の古代・中世人骨。(投稿中)
14. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群40次調査区F地点出土の古代・中世人骨。(投稿中)
15. 松下孝幸・他、熊本市新屋敷遺跡出土の古代人骨。(投稿中)
16. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群春日地区第11次調査区出土の古代・中世人骨。(投稿中)
17. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群春日地区第11次調査区3区出土の古代人骨。(投稿中)
18. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群春日地区第13次調査区4区出土の古代人骨。(投稿中)
19. 松下真実・他、熊本市二本木遺跡群(合同庁舎2区)出土の古代・中世人骨。(投稿中)
20. 松下真実・他、熊本市二本木遺跡群(春日地区第6次調査)出土の古代人骨。(投稿中)
21. 山口県教育委員会、1964:見島総合学術調査報告

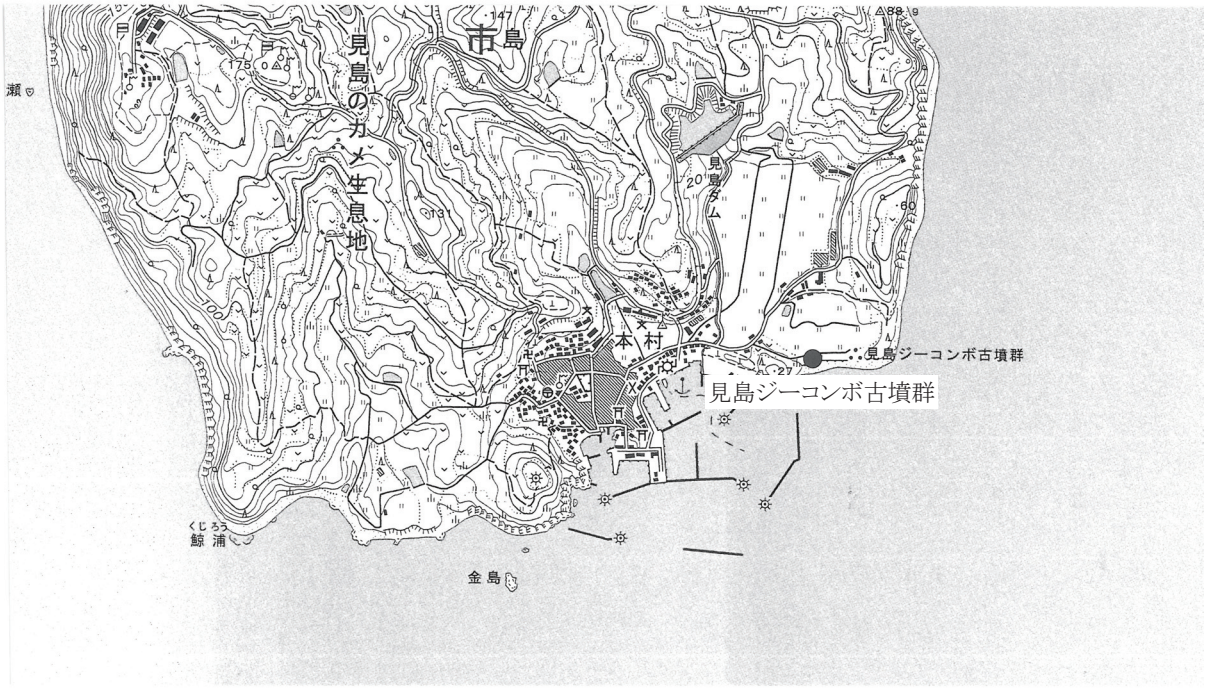
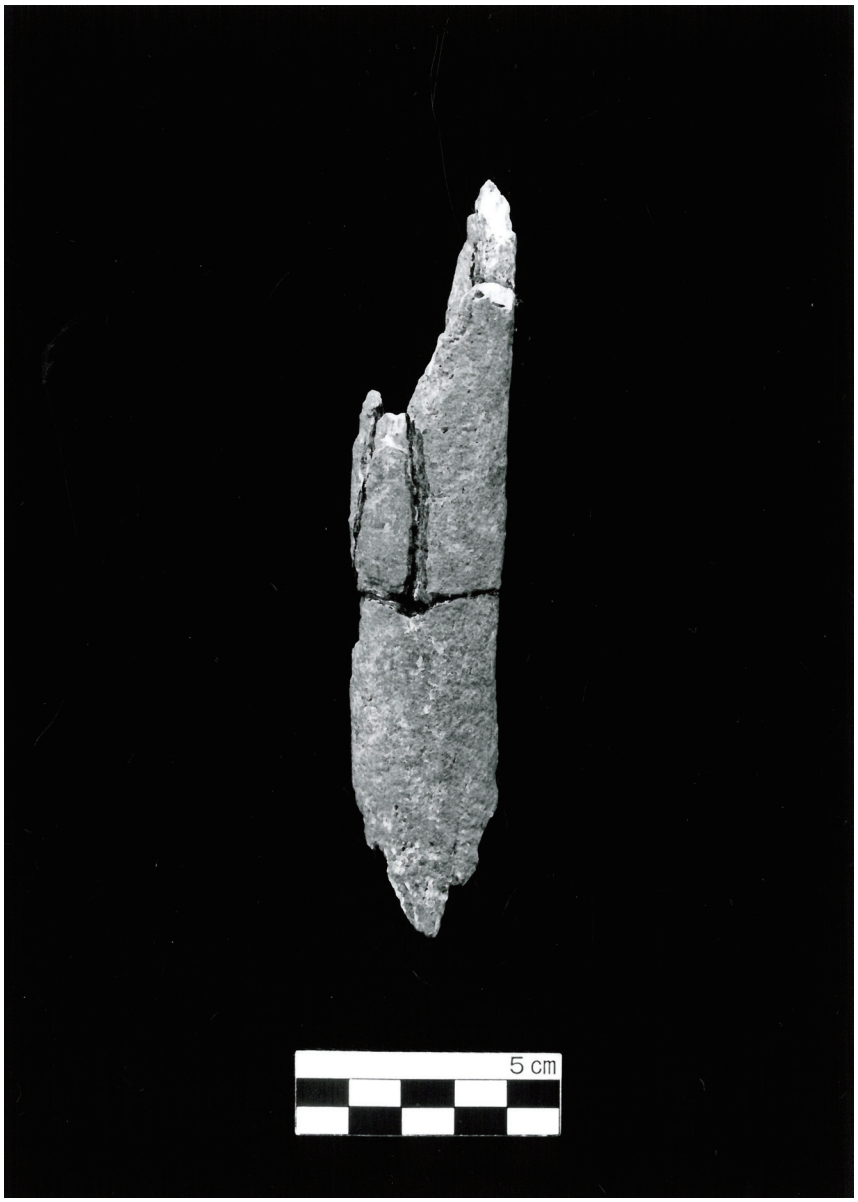


図1　遺跡の位置（1/25,000）
(Fig.1　Location of the Mishima-Jikonbo tumuli, Hagi City, Yamaguchi Prefecture)



大腿骨（左）（The left femur）
ジーコンボ古墳群第 151 号墳 FE-01（男性）
（The femur，FE-01，from the Jikonbo tumulus No.151，male）

付篇２
見島ジーコンボ古墳群第151号墳および第154号墳出土土師器について

松浦　暢昌

１．はじめに

見島ジーコンボ古墳群は、萩より北北西に約46.3km離れた見島の海岸浜堤部に造営された古代の墓である。1960年より実施された見島総合学術調査団による発掘調査により、およそ180基にのぼる積石塚型式の墳墓群の分布が確認された（斉藤・小野1964）。このとき行われた発掘調査では鉄刀などの武器や石銙・銅銙といった装身具、銭貨、銅鋺などの豊かな副葬品が出土し、これらの遺物から7世紀末 ー10世紀初頭頃の造営年代が推定され、被葬者像は都会風の文化を持っていた高い社会層にある集団であったことが考えられた。また、1982年に山口県教育委員会により横穴式石室系統の石室構造を持つ3基で発掘調査が行われ、玄室床面から出土した須恵器と石銙から9世紀前葉の埋葬時期が考えられた（乗安1982）。これらの調査により合計21基で発掘調査が行われ、出土遺物の質・量の豊富さと見島の交通や資源といった地理的条件の考慮から、見島ジーコンボ古墳群の被葬者は、特殊な事情を持って移住してきた、銙帯を用いる律令官人を頂点とした重層構造の集団として考えられることとなった。

しかし造営年代に関する横穴式石室系のA式から石棺系のB式の変遷説や、1964年の『見島総合調査報告』が概報的性質を帯びていたために出土資料の全容が報告されていなかったこと等の問題点もあった。また、副葬品の須恵器の胎土分析から、山陰側に産地を求めることは困難であると報告[註1]されて以降は、形態的な類似性を含めて生産地が不明となっており、外来的要素のある土器類の産地特定は見島ジーコンボ古墳群の性質を知る上で重要となることが指摘されていた。

これらの問題に対し近年再検討が行われ始めた。山口大学埋蔵文化財資料館は、山口大学と萩博物館に分けられて収蔵されていた見島ジーコンボ古墳群出土遺物の再調査が開始され、既往の報告に掲載されなかった遺物を含めた出土遺物の再検討を行っている（横山2010）。そこでは第154号墳より出土した遺物について図化報告を行い、問題点を再確認した後に副葬品の形態から築造年代および被葬者の階層差の存在を示した。また2011年には市来真澄氏により萩博物館収蔵資料に関しての、見島ジーコンボ古墳群全体の再検討が行われている（市来2011）。市来氏は山口県における須恵器編年を用いた副葬品の須恵器の年代観から石室構造の編年作業を行い、石室の時間的な変化と副葬品の内容の違いから、築造の背景に従来よりも遡る６世紀末ー７世紀初頭頃から墓を築いた社会と、８世紀頃以降の新たな人々もしくは社会という異なる存在のあった可能性を示した。

本年、山口大学埋蔵文化財資料館による第151号墳の出土遺物の資料調査（横山ほか2011）が行われたた。出土資料の検討から精力的に年代や社会像の復元が行われ始めている中で、土師器にまとまりのある群が確認されたため、本稿では一度第151号墳と第154号墳の出土土師器について整理を行い、その性質と年代観について考察する。

２．検討方法

151号墳と154号墳から出土した土師器坏および坏蓋の中で、主に151号墳出土のロクロの使用痕が認められる土師器と第154号墳出土の畿内系と指摘のある土師器坏に関する特徴を検討したい。

見島自体は10世紀頃に長門国の一郷として文献に残るとされるが[註2]、周辺地域において長期間まとまった遺物の出土が周防国府跡にみられる。周防国府跡は古くから全国の国府研究の最前線となっており、

7世紀後半から11世紀中頃までの出土遺物の編年が組まれている。そこで当該時期の防長地域で最も通年的な遺物観察に適すると考え、周防国府跡の出土遺物を比較対象に用いた。[註3]（図1）

3．出土土師器概要

第151号墳出土ロクロ成形土師器

第151号墳のH17ー23・27・30はロクロを使用した痕跡の残る、軟焼成であり黄褐色味を呈する胎土が共通する土師器の一群である。口縁部形態をもとに大きく2群に分類できる。

H17とH18の坏は底部が回転ヘラ切りの後に粗いナデが施されて丸底気味となり、体部から口縁部にかけて回転ナデ、内面底部にナデの痕跡を留めることなどが共通する。口縁部端部は丸く収める。H17で端部が僅かに外反気味であるが測点以外の部分に外反が少ない部分もあるため、ほぼ直線的な口縁になると考えられる。H22も口縁部から底部の一部が残る坏で反転復元を行っている。この個体はH17・H18よりも口径がやや大きくなることが予想される。底部は磨滅により不明瞭だが回転ヘラ切りと思われる痕跡が僅かに認められる。また、H17・H18・H22には、底部の最も立ち上がりに近い付近で粘土を指で押し撫でたような痕跡が残る。H17とH22は底部側から外側に押しつけた痕跡となり、H18は幅1cm程の環状に貼り付けたようにも見える。高台を意図するものか、ヘラ切り後の調整が粗雑なだけなのか、意図は不明であるが似通った調整であるといえる。H17に関しては立ち上がりの体部側に幅1cm程の回転ヘラケズリがみられることと、底部から体部にかけて縦方向のハケメの様な痕跡が残るという特徴もある。

H19ー21は口縁部の回転ナデにより口縁端部を僅かに外反させ、端部内面に稜と僅かに面を形成する。口縁端部はやや細くなるが丸く収める。H19は口縁部から底部中心付近まで残存していた個体である。内外面ともに底部は磨滅により不明瞭だが、形状はごく僅かな丸底気味になり、外面底部にナデ、立ち上がりに縦方向のハケメが観察される。H20とH21は口縁部から体部の立ち上がり付近の資料で、H20は体部から口縁部にかけて屈曲気味となる。内外面ともに明瞭な回転ナデ痕がつき、内面には稜がつく。口縁端部内面の稜はにぶいが端部は外反させて僅かに面を形成する。H21もほぼ同様の特性を持つが、H20と比べて器面が平面的に調整されて一定の厚みになり、体部の屈曲も明瞭である。屈曲部より底部側は磨滅で調整は不明瞭だが、屈曲部付近に一部縦方向のハケメと思われる痕跡が残る。

H31ー33は天井部が低い坏蓋である。H31とH32は天井部外面に回転ヘラケズリが施され、口縁部は内外ともに回転ナデ、内面にナデが施される。平坦な天井部から緩やかに内湾しながら口縁部へ至り、端部は内側に折り返しながら丸みを帯びて下垂する。H32はH31よりも天井部の回転ヘラケズリの範囲が広くなる他は口径・器高などほぼ同じである。H33は口縁部のみの資料で、ロクロ水引き成形もしくは回転ナデが施される。口縁部は外面に幅5mm程の浅い凹線がみられ、直線的にのびる。端部は折り返し内向きに比較的鋭く下垂する。

上記がロクロ使用痕の残る主な土師器坏・蓋となり、坏は全て無高台の器形となる。ここで周防国府跡において同様のロクロ成形による土師器坏が出土している時期をあげてみると、周防国府第98次調査の井戸SE6400埋土から出土する土師器坏の器形がよく類似している。このSE6400は同型式の須恵器坏と土師器坏が共存しており、土師器坏の方が量的に多く出土している。この時期は須恵器工人が従来の還元炎焼成による生産を切り替え、土師器生産に移行する時期であると考えられており[註4]、共伴する畿内産黒色土器から9世紀末ー10世紀初頭の廃絶時期が見込まれている。

SE6400出土資料の土師器無高台坏を概観[註5]してみると、全て回転ヘラ切りの底部となった。269は底部外面の立ち上がり部に回転ヘラケズリが施され、口縁部は内外面ともに回転ナデでやや内湾し、端部は

僅かに外反させている。270は外面立ち上がり部にナデと回転ナデを施した粘土の押さえつけが見られ、僅かに台形状を呈する。271・272も270とほぼ同様であるが、立ち上がり部の粘土の押さえつけが弱く、口縁端部がほとんど外反しない様相を呈している。273は外面底部にヨコナデが施され、厚めに粘土が押しつけられている様子が確認された。274も269とほぼ同様の調整技法となるが、底部がやや狭くなり体部から口縁部が直線的に外傾する。275は274の外面立ち上がり付近に粘土の押さえつけがあり、口縁端部が僅かに外反する器形になる。

改めて第151号墳出土土師器と比較すると、口縁部の内外面に対する回転ナデや底部のヘラ切りが同様の技法であり、底部の粘土の押さえつけはH17・H18・H22も見られる調整技法である。しかし、第151号墳出土土師器の方が底部径でやや大きめになり、体部も内湾の強い傾向がみられる。また、H19ー21では端部内面に形成される面が周防国府のものよりも強めな点や、H19・22のような内湾して立ち上がる体部、H20・21のように屈曲する体部はSE6400では見られなかった。

これ以降の国府11段階より後出の資料では、回転ヘラ切りや回転ナデ、粘土の押さえつけなどがあっても、器壁の厚さや器形自体の大きさの減少する傾向にある。このためH17・H18を始めとする資料は周防国府跡出土資料と類似する点が認められることを評価し、年代はSK6400の廃絶時期である9世紀末から10世紀初頭に近く、僅かに遡る時期にあると考える。

一方坏蓋に関しては、第151号墳出土のものに関して、口縁端部のかえりがないことは共通するが、天井部が欠損しているため撮みの有無等は不明である。また口縁部の形状もくびれを持たず、H31とH32は端部が僅かに下垂し、H33は前2者よりもやや鋭く端部が引き出されるものである。これらの口縁の形状は周防国府編年の中には見られないもので、直接比較することは困難である。

これらは焼成不良の須恵器のようにもみえ、生産地が判明しない現段階では明確に土師器とも言えない。しかし、追葬が想定される第151号墳[註6]では、各埋葬時に共通した胎土・焼成特徴を有する土器が偶然生産され副葬・供献されたとも考えがたく、また坏身が無高台のものしか存在しないことから同一時の生産・使用を推定する[註7]との見解を用いれば、見島ジーコンボ古墳群出土遺物のロクロ成形土師器は、周防国府跡出土の資料に類似する性質を持つ部分もあるが、器形におい明確に類似するとは言えず、周防国府に土器を供給していた窯とは異なる生産地の存在があるといえる。それが長門か見島島内か、山陰地方に求められるのか[註8]の結論には今回至らず、同型式の出土報告の増加を待つこととしたい。

第154号墳出土土師器について

確認されたのはH8ー11の4点である。これらについて、第151号墳出土土師器と見比べるために実物を再見した結果、前年度の第154号墳出土土師器の報告でH8 ー10に観察段階から誤りがあることが判明した[註9]。今回調査では再実測が行えず文面のみとなってしまうが、その訂正を行い取り急ぎ報告させていただきたい。

H8 ー11は橙色味を帯びた胎土であるが、器形の差は大きい。H8は丸底気味の底部から湾曲して口縁部へ立ち上がる坏である。器面の風化が激しく器形に歪みを持ち、胎土は密であるが僅かに砂粒を含む。外面底部から体部にかけてはヘラケズリ、口縁部内外面にヨコナデが施されるものと思われ、端部内面の一部に極浅い凹線が巡り、内側に巻き込んだ可能性がある。口径は14.4cm、器高は4.8cmを計る。H9は丸底気味の底部から体部が内湾し、口縁部は直線的に外傾する。磨滅しているが、口縁部は内外面ともにヨコナデとなり、口縁端部以外のほぼ全面に不明瞭ながらミガキと思われる痕跡を留める。口径は12.8cm、器高は4.4cmとなる。H10は丸底気味の底部から内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く納

めて内側に肥厚させる坏である。口縁部内外面のヨコナデとなり、底部内面は横位のミガキ、外面は不定方向のミガキが施される。口径12.3cm、器高3.0cmとなる。H11は器高の低い皿状の器形となる。口縁部から底部の一部が残存する資料で外面に赤色顔料の塗布が確認できる。口縁部は内外面ともにヨコナデが施され、他の部位にミガキが施されているが、磨滅により不明瞭である。内面底部から立ち上がりにかけて、暗文のような縦方向のミガキが僅かに確認できる。口径は11.4cm、器高は残存高で2.6cmであるが、おそらく3cmを越えない。

これらの土師器に現れる赤色塗彩や暗文風なミガキ、口縁端部内面の凹線、肥厚の特徴を、仮に畿内産土師器と同様とすれば、H8・H10・H11が影響を受けた可能性はある。しかし奈良国立文化財研究所の土器の大別[註10]を参考に比較すると、器形は端正な都城のものとは明らかに異なり、法量だけはかろうじてH10が平城宮Ⅶの杯ＡⅡに近くなるが、調整が異なるためやはり畿内からの搬入品とはならない。それではこの畿内的な要素は何によるものなのか。見島ジーコンボ古墳群第72号墳出土の土師器坏20は林部均氏（林部1992）により奈良時代前半期に相当する畿内産土師器であることが報告されている。このことからすれば8世紀前半頃にはもたらされた畿内産土師器を、見島島内で模倣することは可能である。他方、従来畿内産土師器は畿内以外の地域できわめてわずかな量しか出土しない性質が定義されていたが、周防国府跡第107次調査では土坑SK7060から大量の土師器が出土し、暗文を持つものが含まれていたことから、大林氏によりこれらが周防産である可能性が想定された[註11]。また、資料数的に明確な差異が明らかとなっていないが、周防産とも異なる長門産などの存在の可能性を指摘している。器壁が厚めなものが第101次調査土坑SK6753にも見られることや、SK7060の段階から精製品とともに砂粒の多い粗製品が共伴することを鑑みれば、これらの年代の８世紀中頃以降に、見島を含むどこかで生産された土師器であると考えられるのではなかろうか。以上から、この畿内的要素の残る土師器が在地産の模倣品であり、８世紀前半に遡る可能性を持ちつつ、８世紀中頃以降の幅広い出現年代を考えたい。

H9は、市来氏は第123号墳出土の16・17・20・21にみられる器形と同様であると捕らえ、小林善也氏が提唱する編年案（小林2008）の坏Ｇに類似するとし、６世紀末から７世紀初頭に位置付けている。この結果を第154号墳の８世紀初頭 ～ ９世紀中頃の使用期間に加え、見島ジーコンボ古墳群が盛行する前段階の集団を想定しているが[註13]、小林氏があげる赤迫遺跡SB18 出土の坏Ｇは丸底で口縁部が短く外反気味に立ち上がるもので、内外面ともに回転ナデ調整とされる[註14]。H9は口縁の外傾部分が直線的でやや長くなり、ミガキも施されている。これらの類似性と相違点が地域的な差となるのか時間的な差となるのかは不明であるが、６世紀中頃に出現した坏Ｇの形態は６世紀末から７世紀初頭もほぼ同型となる。小林氏の編年案は古墳時代後期の土器編年に重点をおいたものであり、７世紀初頭までを対象としたものである。この後の坏Ｇの変化が乏しいものとすれば、上限を６世紀後半に捕らえつつ、７世紀初頭以降も同様な器形が僅かに器形を変化させて存続している可能性も有りはしないか。このことから、第154号墳出土H9に関しては、６世紀末から７世紀に遡る可能性は保持しつつ、８世紀代の年代も考慮しておきたい。

４．結語

今回は第151号墳のロクロ成形土師器と第154号墳の土師器杯について、近隣の一大消費地であった周防国府跡の出土遺物との比較を主に、その年代観と性質について検討したところ、第151号墳のロクロ成形土師器はおそらく９世紀末から10世紀初頭をやや遡る段階に、周防国府とは別体系の生産地で作成されたことが想定され、第154号墳の土師器杯についても畿内の要素を取り入れた在地産である可能性が考えられた。しかし、依然として土器類の生産地は特定できず、古墳群を造営した社会像には遠く

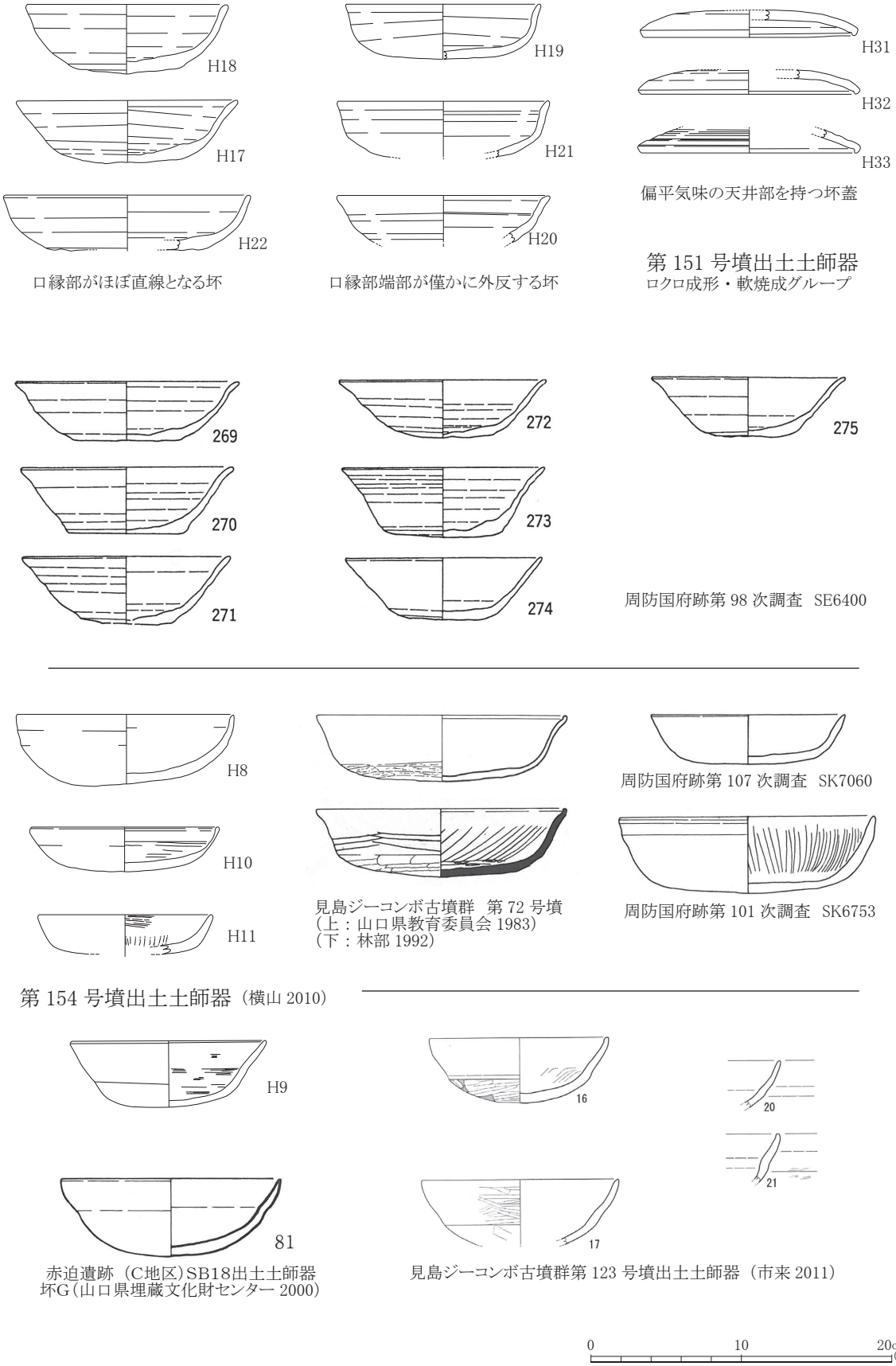


図1　見島ジーコンボ古墳群・周防国府跡・赤迫遺跡（C地区）出土土器実測図

及ぶことができなかった。今後の資料の増加を待ちたい。

謝意

今回は筆者の研究不足により、出土土師器資料全てについて触れることができず、断片的な情報となってしまった。見島ジーコンボ古墳群は山口県下においても豊富な種類の遺物を出土する貴重な遺跡であるため、拙稿の是非を含め、諸氏によるご検討をお願い申し上げます。末筆ながら、資料調査にご協力いただいた萩博物館と防府市教育委員会の皆様に御礼申し上げます。

【註】

1 文献8）p28～29より

2 文献12）より

3 文献4）、11）より

4 文献11）p168～171　　土師質化している周防産緑釉陶器の生産開始時期であり、ここに生産の転換をもとめている。

5 防府市教育委員会の協力で実見する機会を得た。

6 文献13）より

7 文献13）より

8 文献9）p1138～1139

9 前回観察の器面調整において回転ナデおよび回転ヘラケズリとあるものは、回転による連続性が確認できず、ヨコナデと手持ちヘラケズリとなると考えられる。この場をお借りして訂正と、心よりお詫び申し上げる。

10 文献5）より

11 文献3）より

12 文献3）より

13 文献1）より

14 文献2）より

【引用参考文献】

1）市来真澄,2011,「見島ジーコンボ古墳群の築造時期と石室について」『海の古墳を考えるⅠ－群集墳と海人集団－発表要旨』,海の古墳を考える会

2）上山佳彦,2000,「Ⅳ遺物」『赤迫遺跡（C地区）』,山口県埋蔵文化財センター・阿知須町教育委員会

3）大林達夫,2001,「周防国府出土の暗文のある土師器1」『井上山経塚・下山ノ口遺跡発掘調査報告』,防府市教育委員会

4）大林達夫,2010,『周防国府発掘調査報告Ⅰ　溝辺・榎ノ本地区の調査』,本文編・図版編,防府市教育委員会

5）小笠原好彦・西弘海,1976,「第Ⅴ章考察2土器」『平城宮発掘調査報告Ⅶ』,奈良国立文化財研究所

6）小林善也,2008,「須恵器出現期以降の古墳時代集落出土の土器編年試論 －周防西部地域－」『古墳時代集落遺跡出土の須恵器・土師器』山口考古学フォーラム調査研究報告書1,山口考古学フォーラム

7）斉藤忠・小野忠熙,1964,「考古の部」『見島総合学術調査報告』,山口県教育委員会

8）乗安和二三,1983,『見島ジーコンボ古墳群』,山口県教育委員会

9）萩市史編纂委員会,1989,『萩市史』第2巻

10）林部均,1992,「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学研究』第39巻3号,考古学研究会

11）防府市史編纂委員会,2004,「周防国府」『防府市史』資料Ⅱ　考古資料・文化財編

12）横山成己,2010,『見島ジーコンボ古墳群　第154号墳出土資料調査報告』,山口大学埋蔵文化財資料館

13）横山成己ほか,2011,『見島ジーコンボ古墳群　第151号墳出土資料調査報告』,山口大学埋蔵文化財資料館

付篇３

見島ジーコンボ古墳群第151号墳出土金属器の成分分析調査

（株）吉田生物研究所

１．はじめに

山口大学調査による、ジーコンボ古墳群から出土した金属製品について、以下の通り成分分析を行ったのでその結果を報告する。

２．資料

調査した資料は表１に示す金属製品15点である。

表１　調査資料一覧

No.	遺　物　名	概　要
1	資料No.1 耳環（Ybr1）	長径約2cmの円形の耳環。
2	資料No.2 耳環（Ybr2）	長径約2.5cmの円形の耳環。
3	資料No.3 柄頭（Ybr5）	長さ約4cmの柄頭。
4	資料No.4 鐶付足金具（Ybr6）	長さ約5cmの吊り下げ金具。
5	資料No.5 刀装具（Ybr7）	長径約4cmの楕円形金具。
6	資料No.6 責金具（Ybr8）	長径約3cmの卵形の環。
7	資料7 鳩目金具（Ybr14）	幅約1cmのリボン状の金具
8	資料8 鳩目金具（Ybr15）	幅約1cm、直径約1cmの環状金具。
9	資料9 刀装具（Ybr9）	約2.5×1.5cmの板状の金具。中央部に二つの穴があけられている。
10	資料10 刀装具（Ybr10）	一辺が約1.8cmの正方形板状の金具。中央部二箇所に穴があけられている。
11	資料11 刀装具（Ybr11）	約2.3×2.0cmの板状の金具。中央部二箇所に穴があけられている。
12	資料12 刀装具（Ybr12）	約1.5×1.5cmの板状の金具。破損しているが、中央部に少なくとも一箇所に穴があけられている。
13	資料13 刀装具（Ybr13）	板状の金具の小破片。
14	資料No.14　帯金具（Ybr3）	約2.8×2.5 cmの巡方。
15	資料No.15　帯金具（Ybr4）	約3×2cmの丸鞆。

３．方法

資料本体から1～2mm程度の試料を採取し、蛍光X線分析を行い、金属元素を同定した。装置はRIGAKU製の波長分散型蛍光X線分析装置ZSX-PRIMUSⅡを用いた。

４．分析結果

成分分析結果のスペクトルを付し、その結果を表２に示す。ただし、そのデータには土中成分も含まれるため、数値は参考資料である。

表2－1　調査結果一覧①

	No.1 表面	No.1 本体	No.2	No.3	No.4 表面	No.4 本体	No.5 表面	No.5 本体
Na	2.21	—	—	—	—	—	—	R
Mg	—	R	—	—	—	—	R	R
Al	2.77	4.46	1.48	R	4.68	R	4.42	4.20
Si	3.42	17.7	2.14	1.41	9.90	R	7.00	8.13
P	1.28	3.89	R	R	1.72	R	1.69	R
S	4.51	4.96	R	R	4.2	2.56	R	R
Cl	8.37	13.7	R	7.52	5.97	15.5	1.31	3.63
K	1.26	1.30	R	R	2.00	R	R	R
Ca	1.38	2.85	R	R	2.14	R	R	R
Ti	—	—	—	—	—	—	—	—
Mn	—	—	—	—	—	—	—	—
Fe	1.01	1.44	R	37.2	5.91	R	17.2	4.01
Cu	52.5	48.9	94.5	51.7	38.8	77.9	49.5	72.1
As	—	—	—	R	—	—	—	R
Se	—	—	—	—	—	—	—	—
Ag	—	—	—	—	—	—	R	R
Au	21.3	—	—	—	24.6	—	16.0	2.18

表2－2　調査結果一覧②

	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15
Na	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R
Mg	R	R	R	R	R	R	R	—	R	—
Al	5.9	6.19	5.03	6.02	4.67	3.18	3.37	2.11	2.28	2.03
Si	9.53	12.6	7.77	12.9	8.42	4.75	6.92	3.88	2.71	3.31
P	R	1.54	R	1.99	2.13	2.90	3.12	3.05	3.44	3.14
S	R	R	R	R	R	R	R	R	1.04	R
Cl	4.26	3.12	11.0	R	R	4.55	R	R	1.89	3.86
K	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R
Ca	R	R	R	R	1.27	R	R	R	R	R
Ti	—	—	R	R	—	—	—	—	—	—
Mn	R	—	—	—	—	—	R	—	—	—
Fe	16.1	1.11	3.42	R	R	R	R	R	16.8	R
Co	—	—	—	—	—	—	—	—	R	—
Cu	57.6	69.0	69.4	70.4	76.4	77.1	77.4	82.8	38.6	69.8
Zn	—	—	—	—	—	—	—	—	R	—
As	R	1.47	—	3.36	2.72	4.52	4.56	5.41	6.91	4.77
Se	—	—	—	R	—	—	—	—	—	—
Ag	—	—	—	R	R	—	—	—	R	—
Au	2.24	R	—	—	—	—	—	—	—	—
Sn	—	—	—	—	—	—	—	—	1.29	—
Sb	—	—	—	—	—	—	—	—	—	R
Pb	—	—	—	—	—	—	—	—	21.2	9.71
Bi	R	R	—	R	R	—	R	—	1.13	R

Ｒは１％以下の検出率であることを示す。

以下、検出した主要元素についてのみ記述する。

No.1：本体から銅が、表面部分から金が検出された。　→　銅地渡金
No.2：銅が検出された。　→　銅
No.3：銅と鉄が検出された。　→　銅
No.4：本体から銅が、表面から銅と金と鉄が検出された。　→　銅地渡金
No.5：本体から銅と鉄、金が、表面から銅、鉄、金が検出された。　→　銅地渡金
No.6：銅と鉄が検出された。　→　銅
No.7：銅と微量の砒素が検出された。　→　銅(微量の砒素含む)
No.8：銅と鉄が検出された。　→　銅
No.9：銅と砒素が検出された。　→　銅(微量の砒素含む)
No.10：銅と砒素が検出された。　→　銅(微量の砒素含む)
No.11：銅と砒素が検出された。　→　銅(微量の砒素含む)
No.12：銅と砒素が検出された。　→　銅(微量の砒素含む)
No.13：銅と砒素が検出された。　→　銅(微量の砒素含む)
No.14：銅と鉛、鉄、錫、砒素が検出された。　→　銅、錫、鉛(微量の砒素含む)
No.15：銅と鉛、砒素が検出された。　→　銅、鉛

以上の結果をまとめると、
(1)本体が銅地のもの・・・・・・・・・・・2，3，6，8
(2)本体が銅地で、渡金を施したもの・・・1，4，5、
(3)本体が銅地で、微量の砒素を含む・・・7，9，10，11，12，13
(4)銅と錫、鉛の合金で微量の砒素を含む・14
(5)銅と鉛の合金・・・・・・・・・・・・・15
となる。

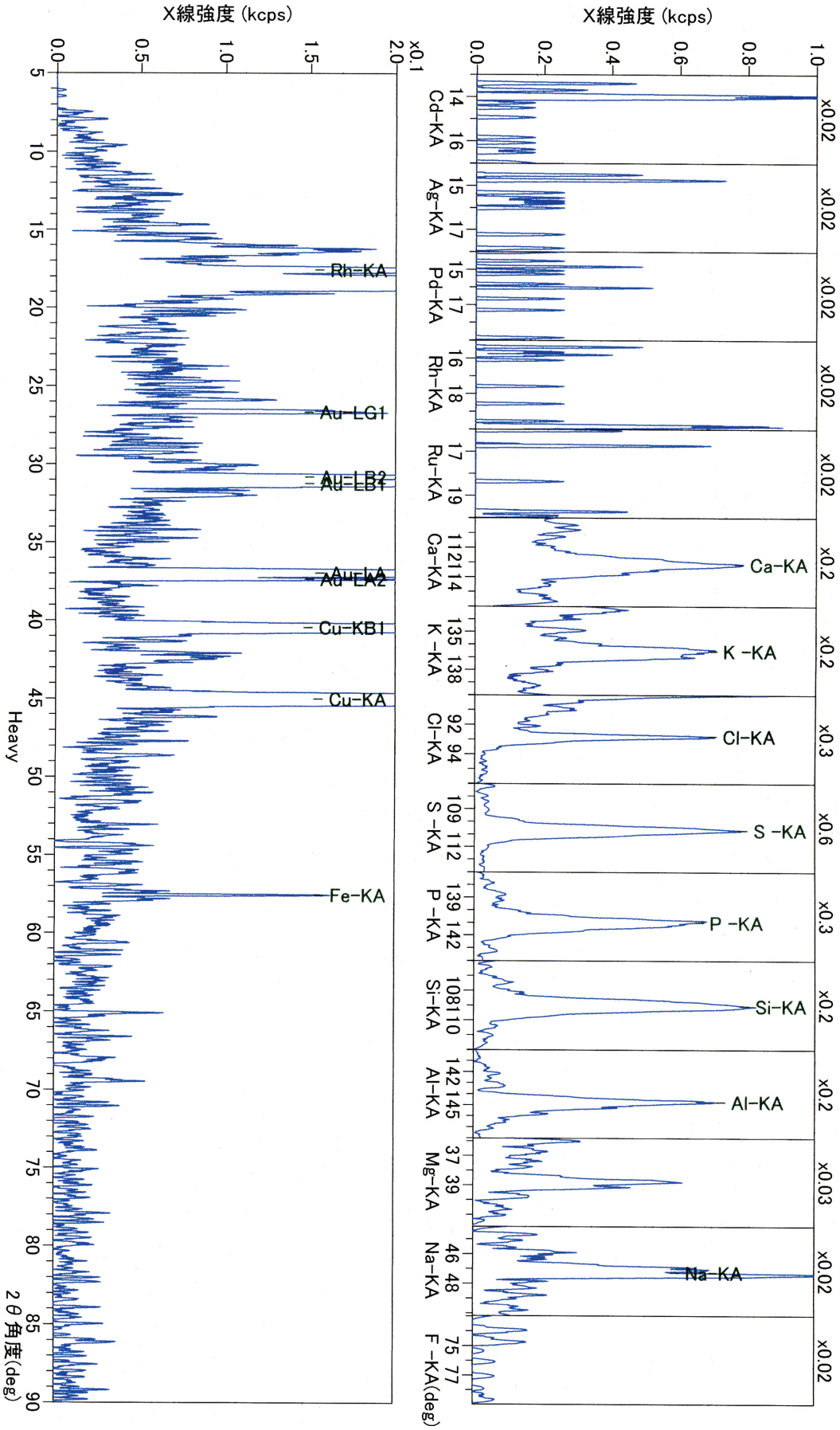


図1　No.1表面の分析データ

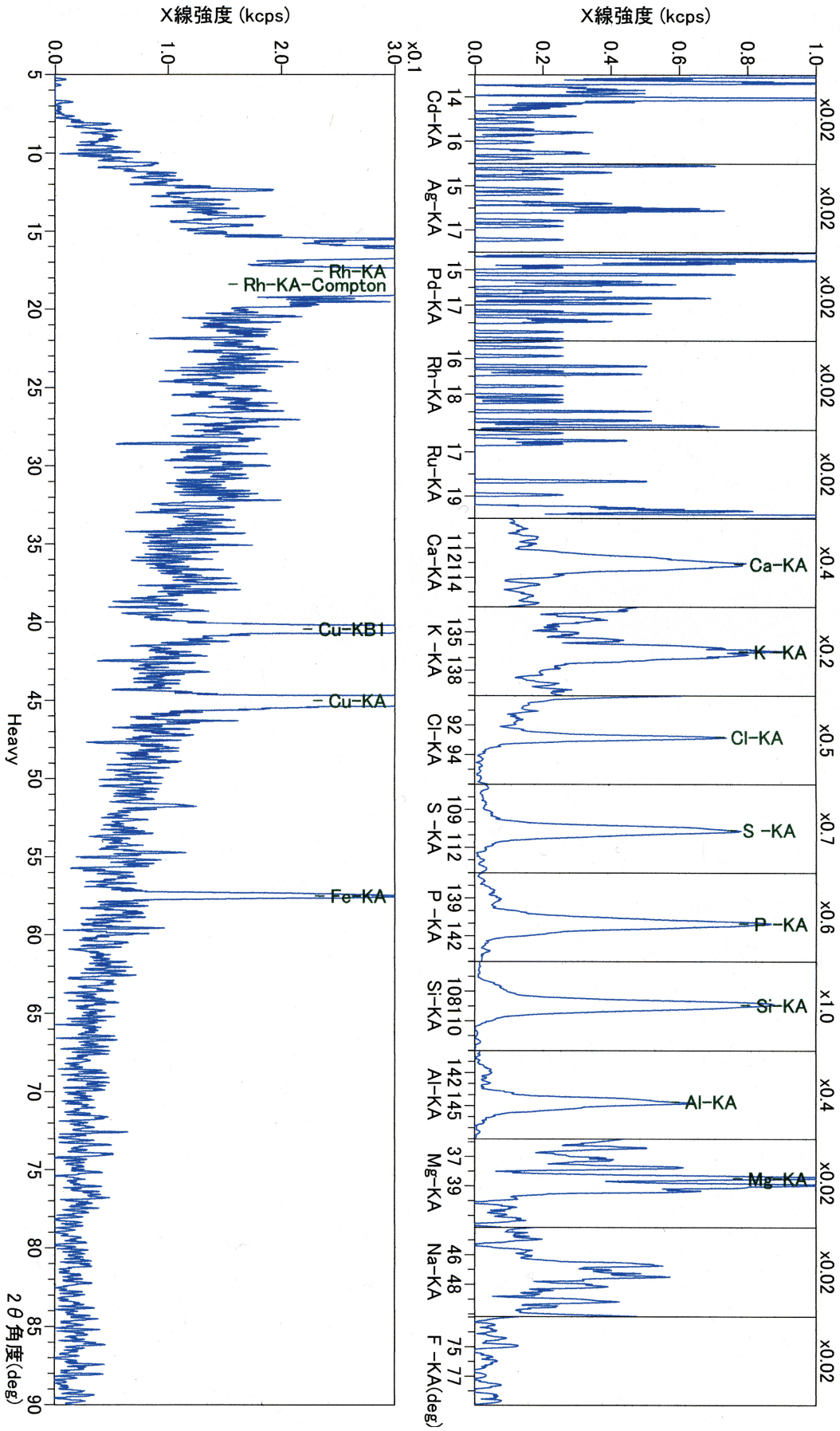


図2　No.1本体の分析データ

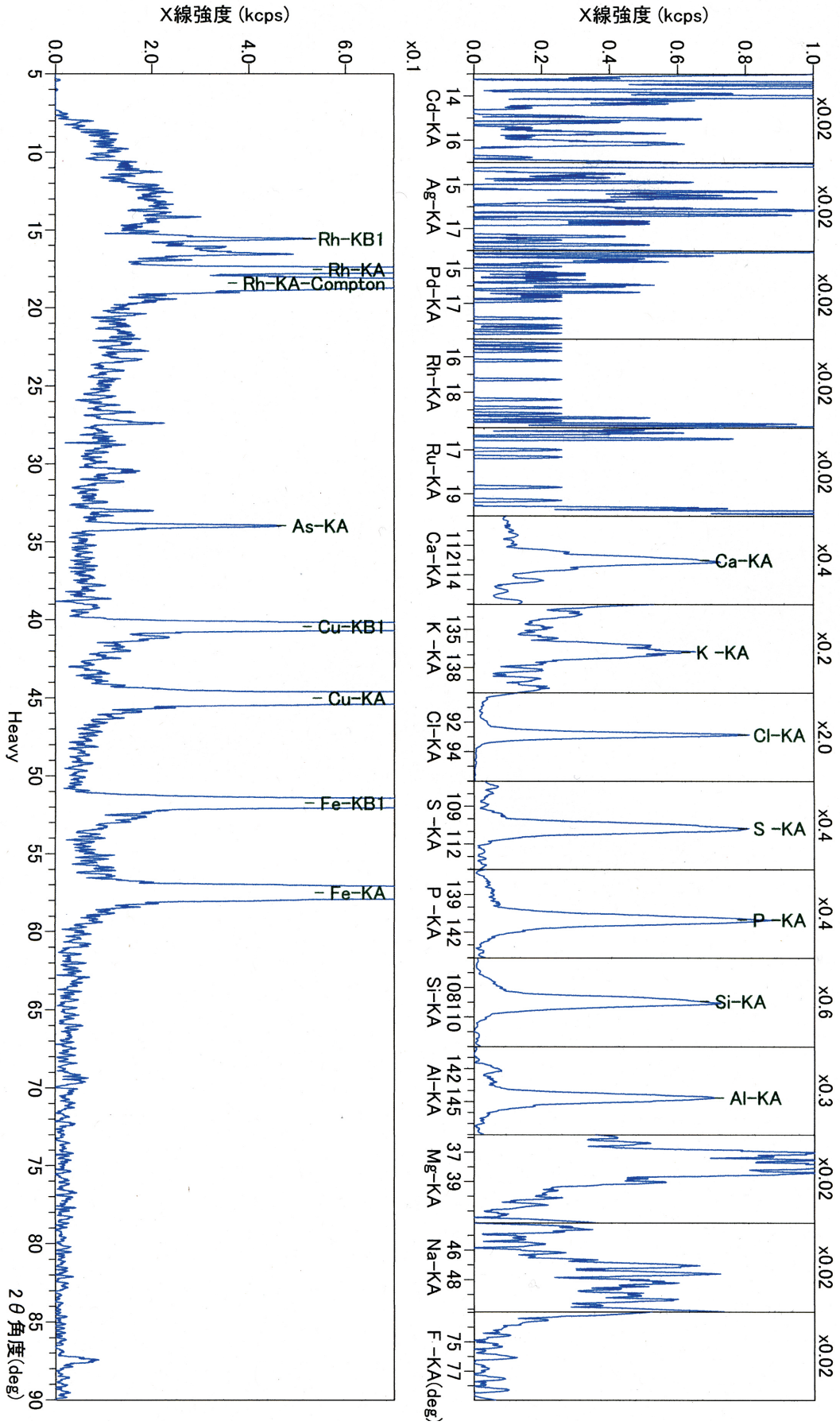


図3　No.2の分析データ

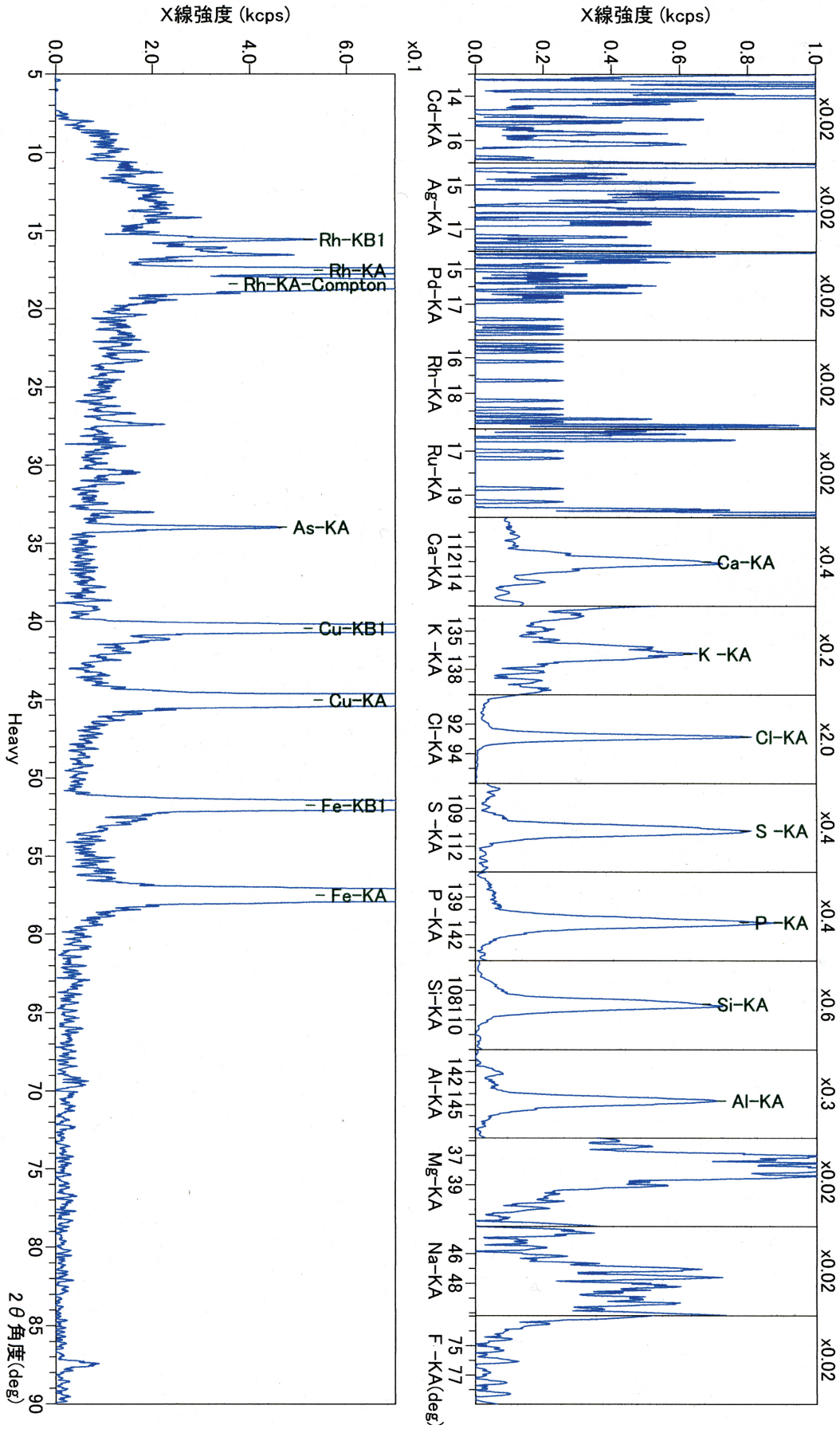


図4　No.3の分析データ

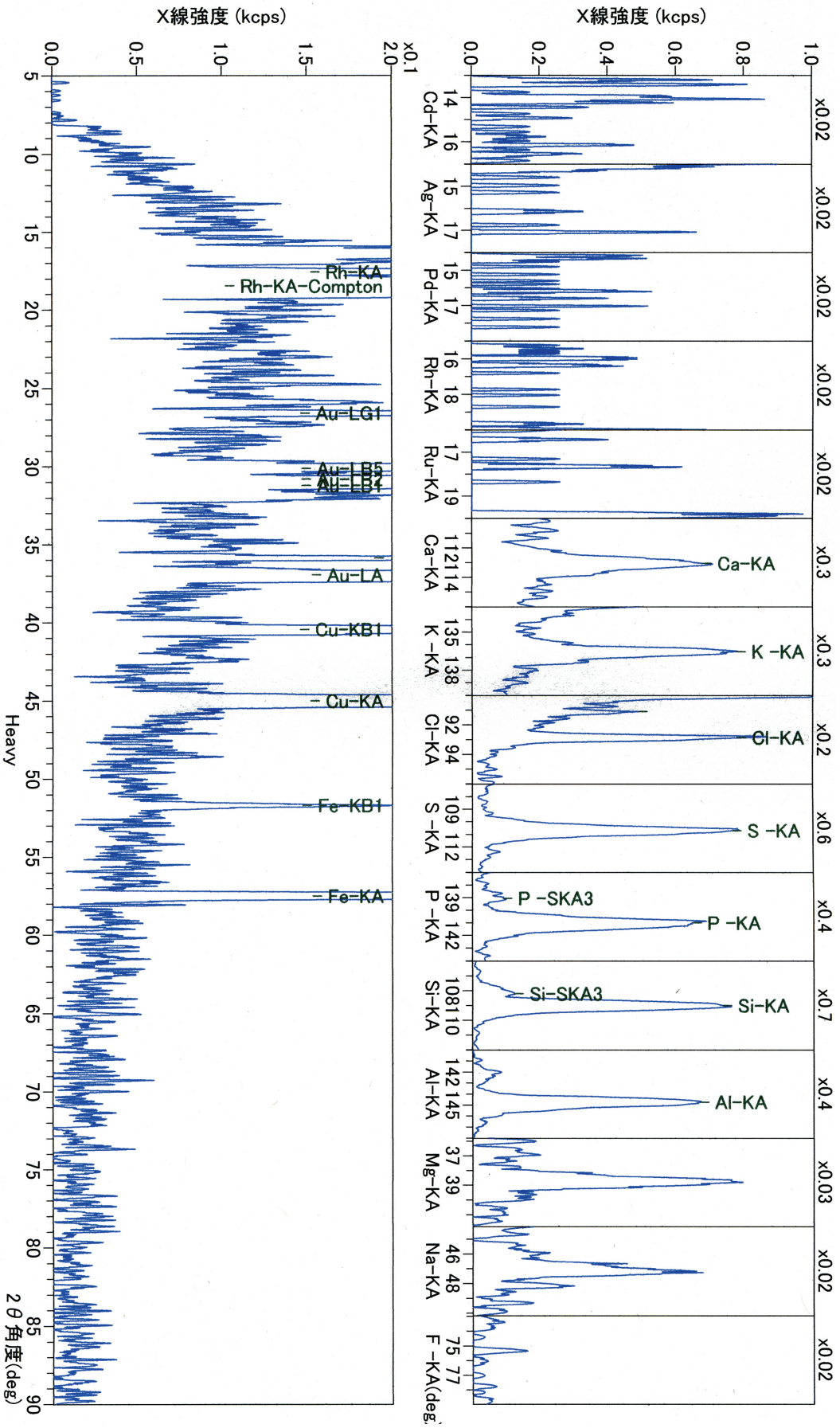


図5　No.4表面の分析データ

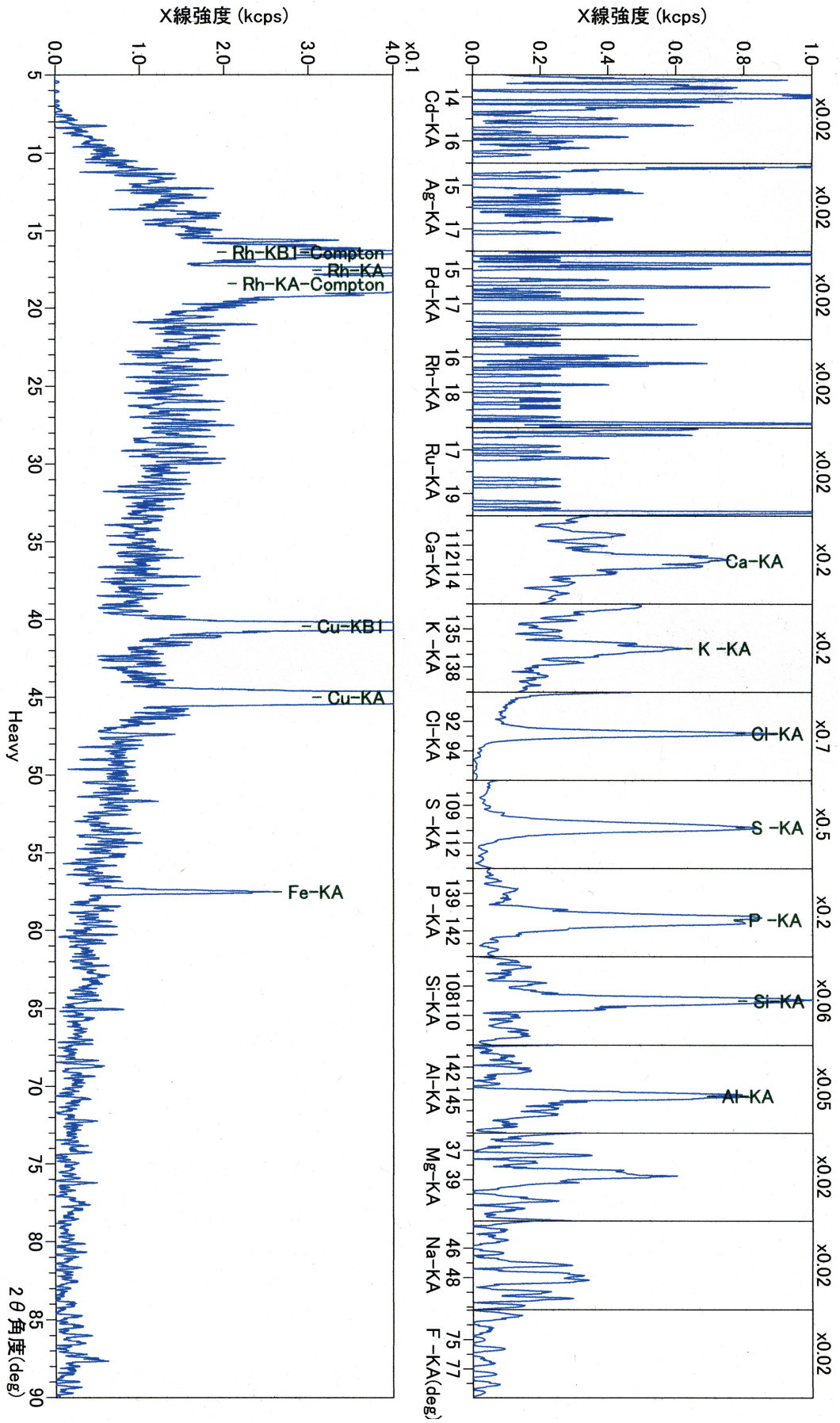


図6　No.4本体の分析データ

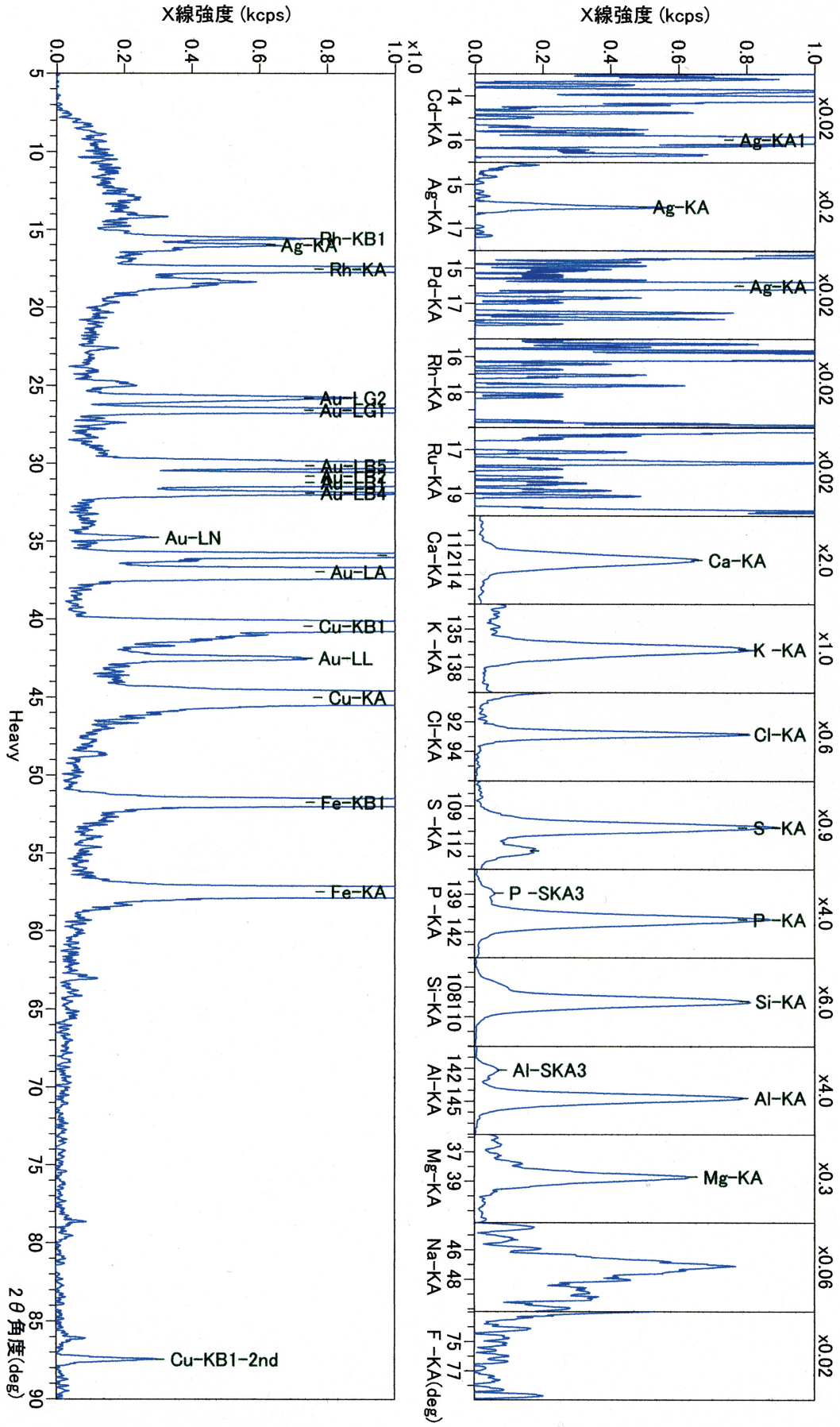


図7　No.5表面の分析データ

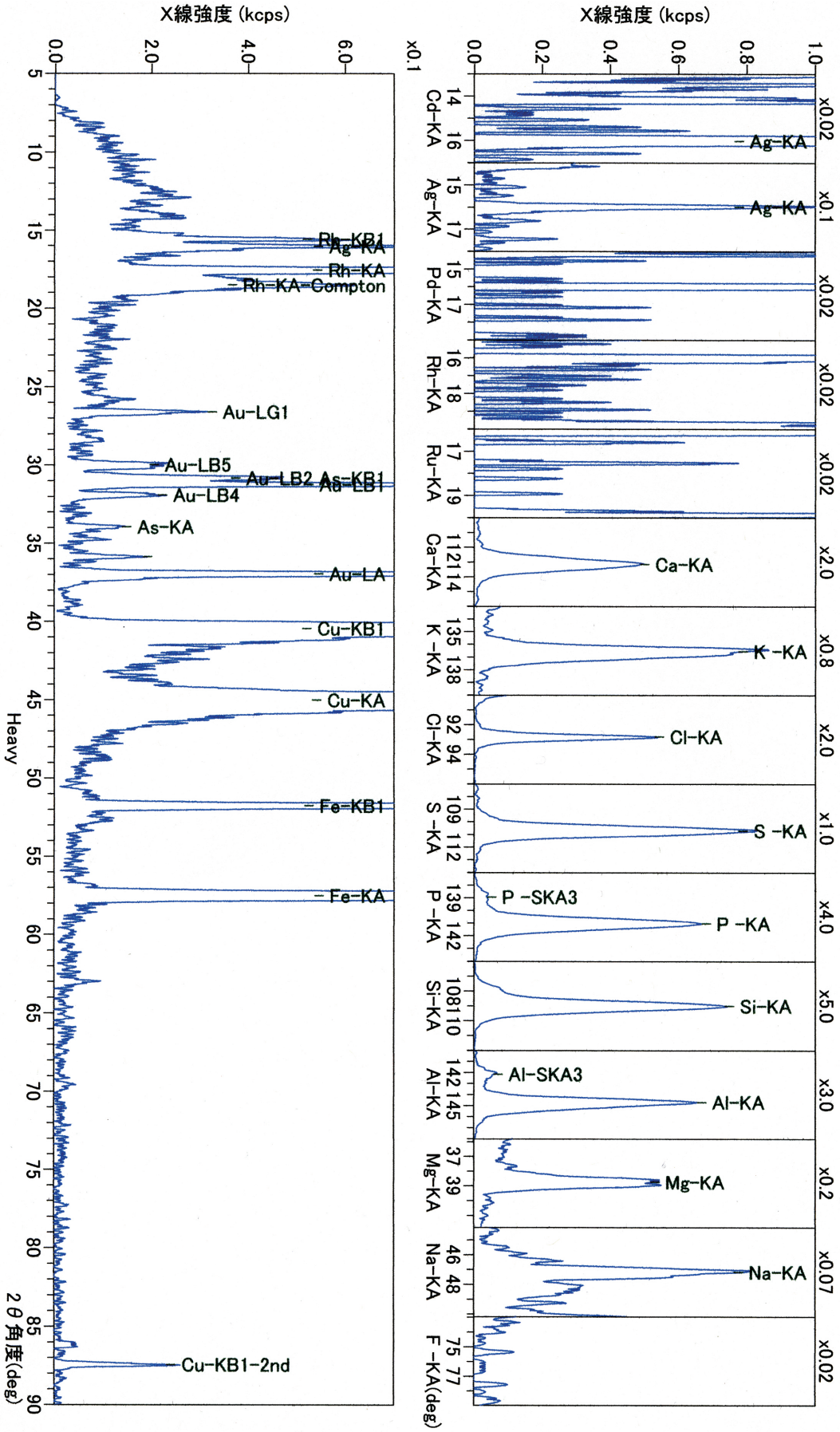


図8　No.5本体の分析データ

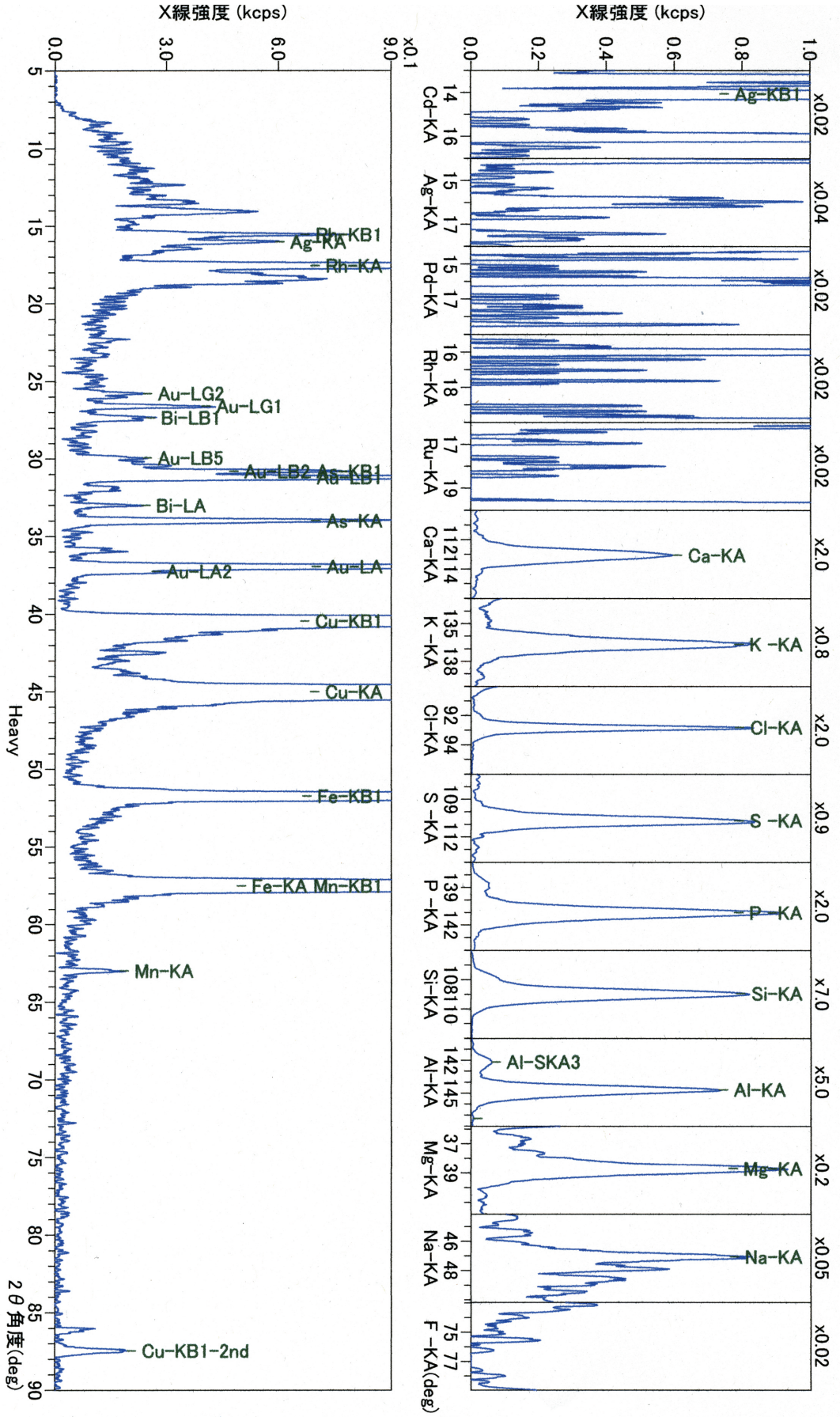


図9　No.6の分析データ

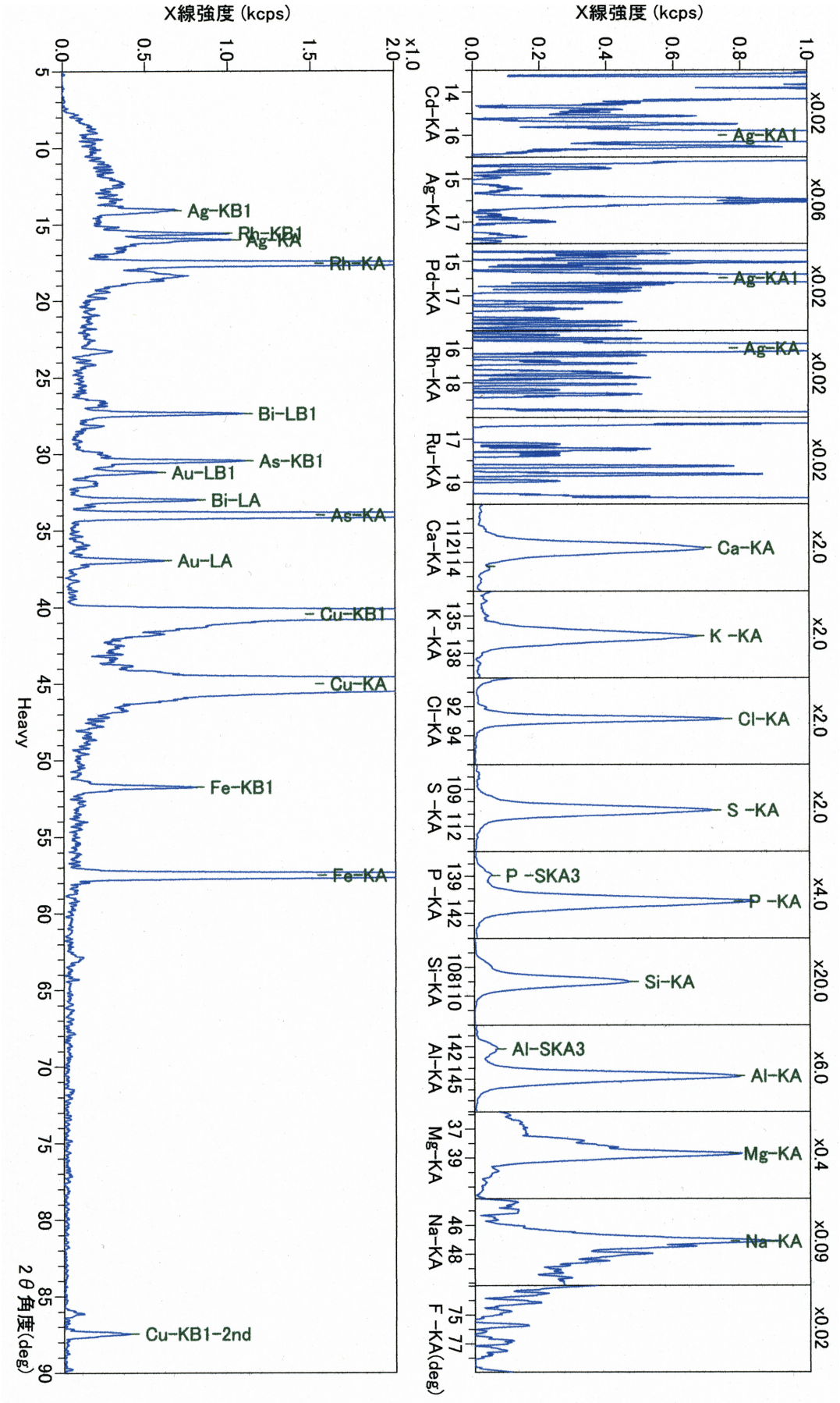


図 10　No.7の分析データ

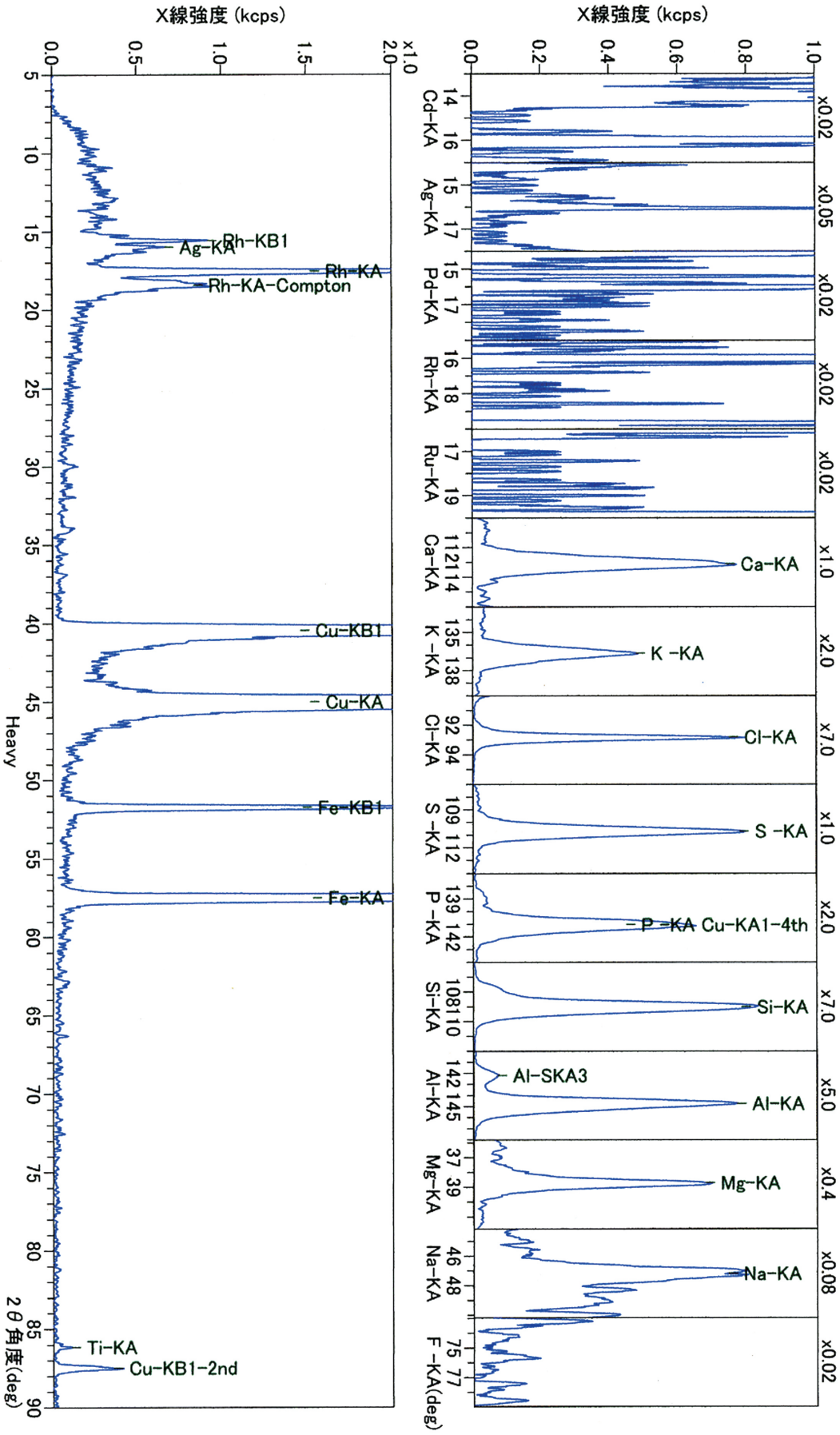


図 11　No.8の分析データ

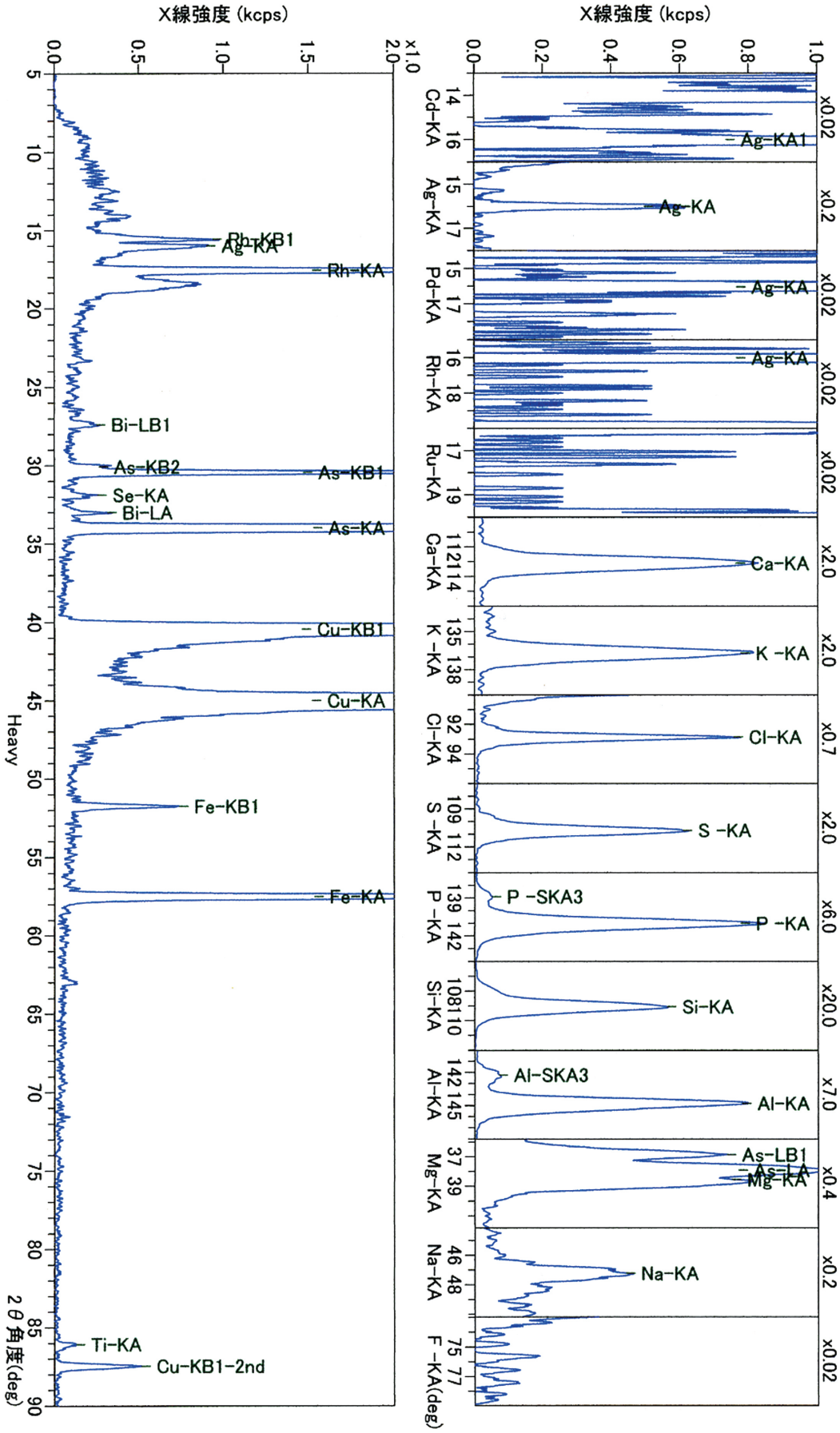


図 12　No.9の分析データ

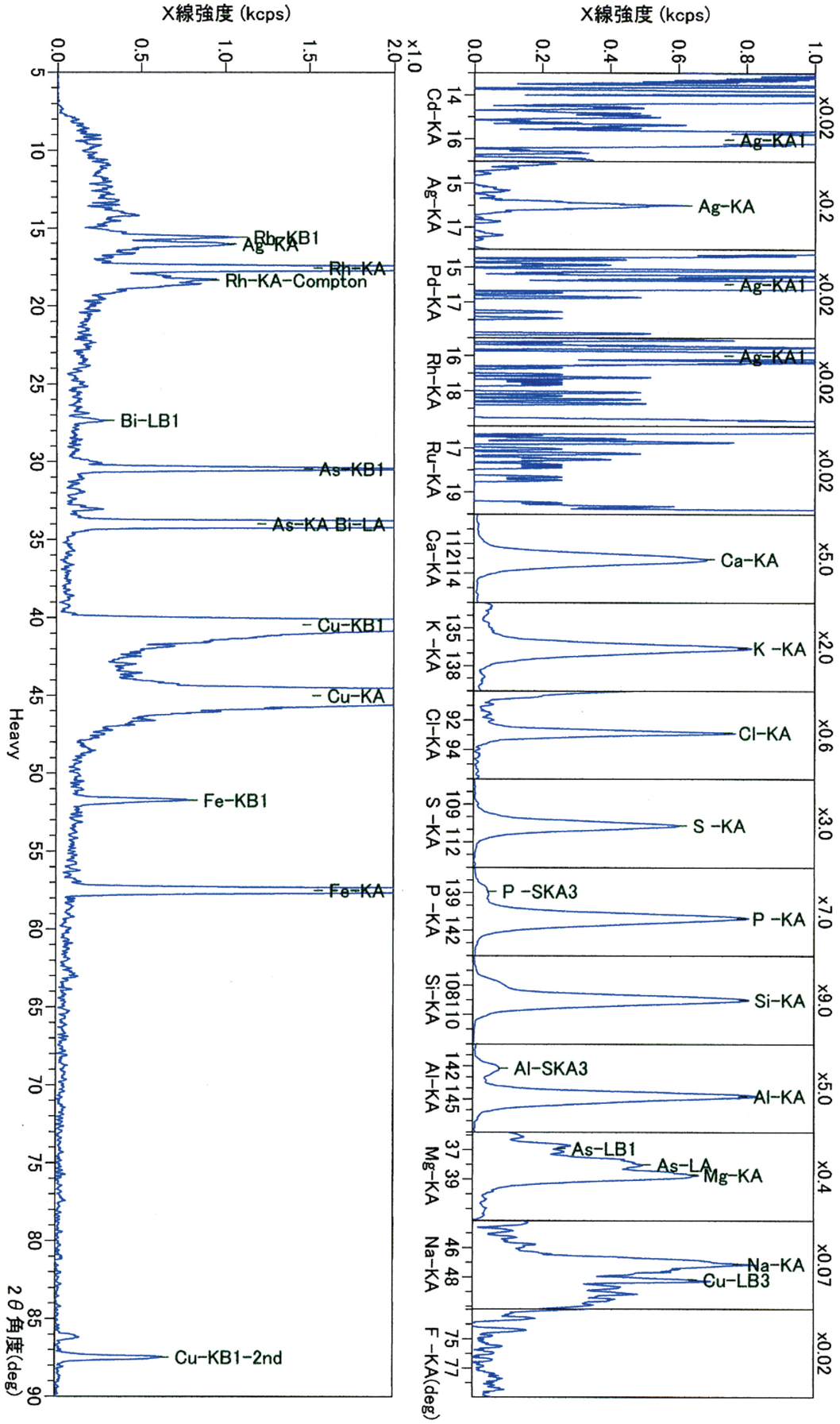


図 13　No.10 の分析データ

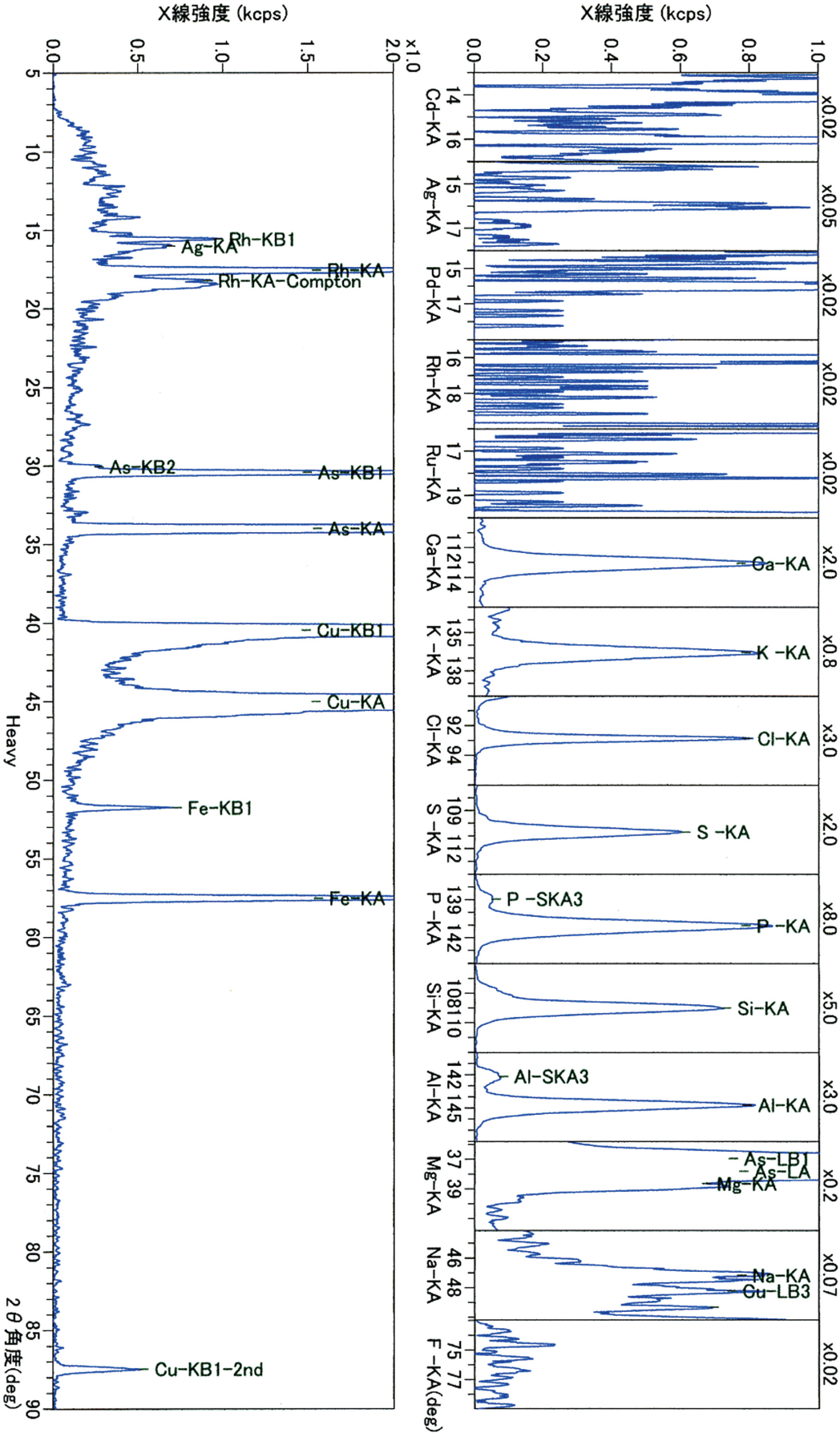


図 14　No.11 の分析データ

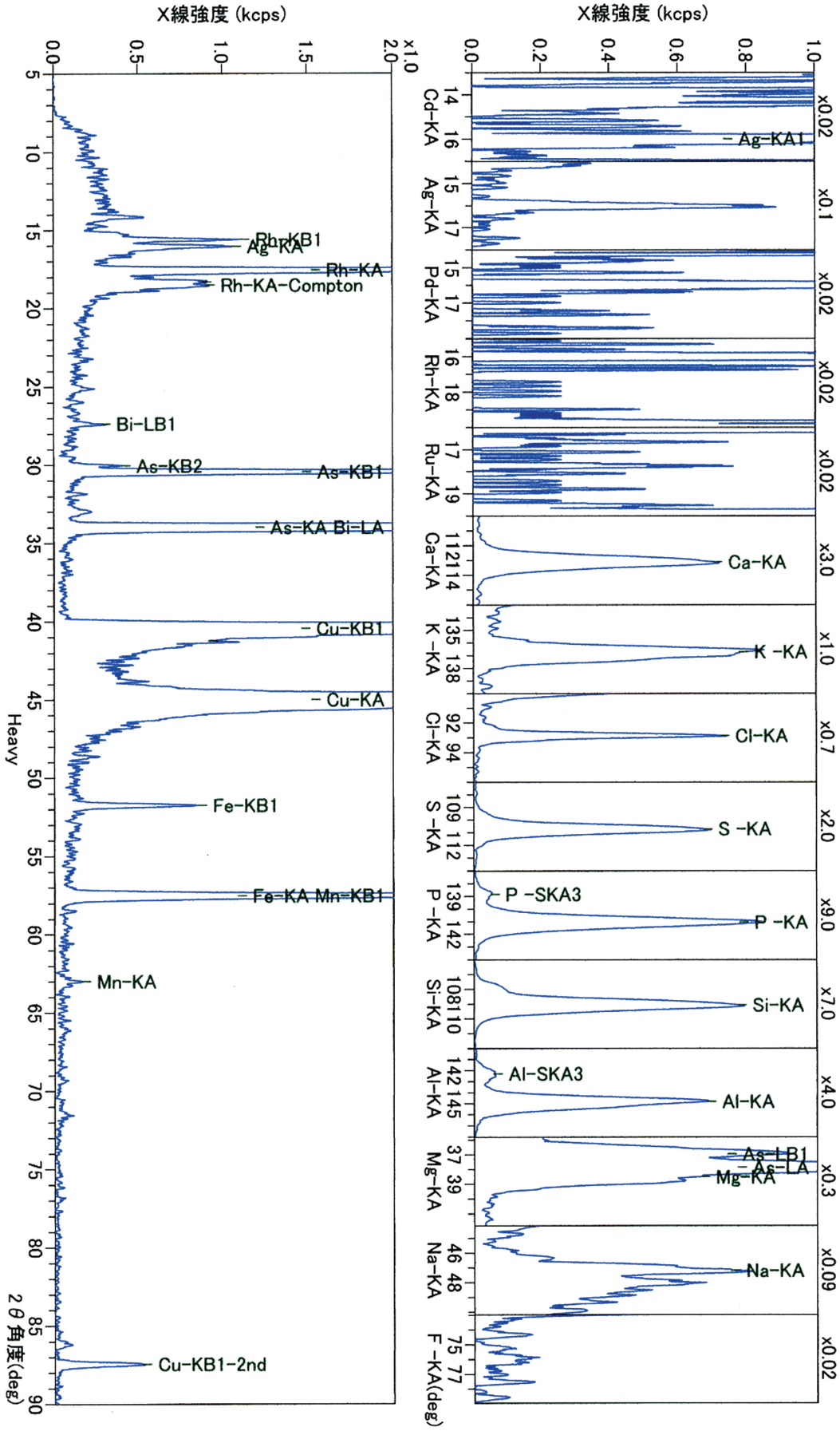


図 15　No.12 の分析データ

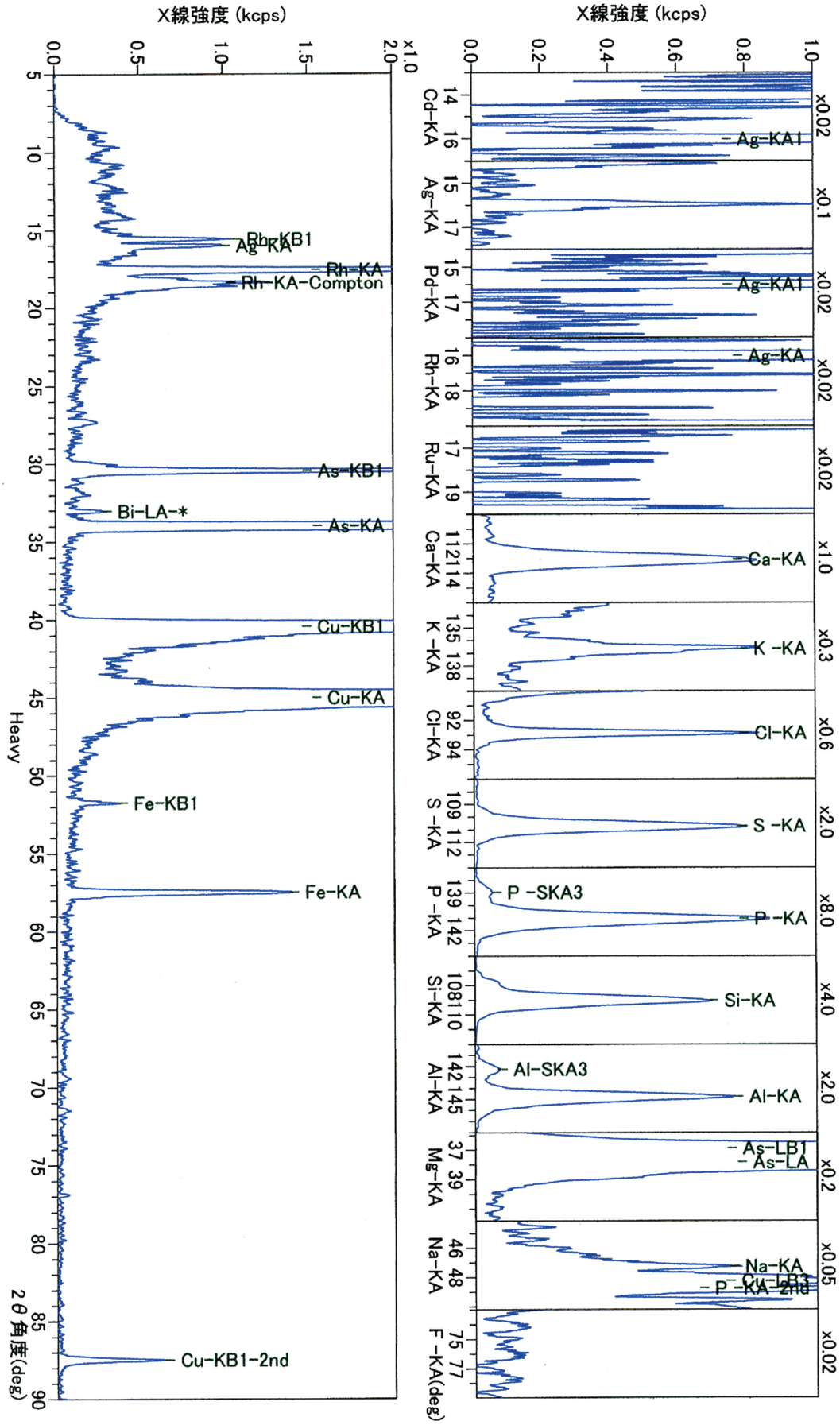


図 16　No.13 の分析データ

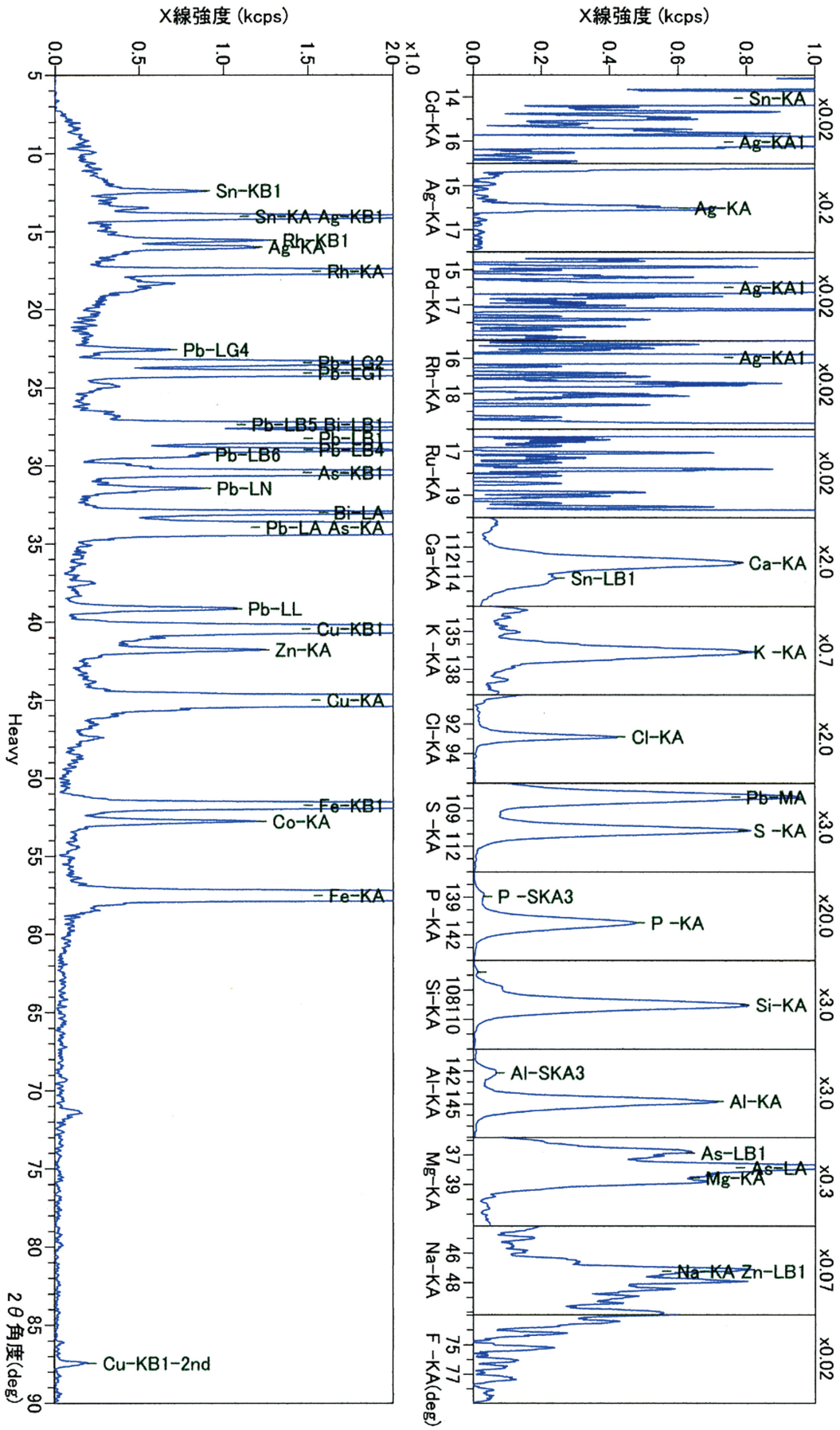


図 17　No.14 の分析データ

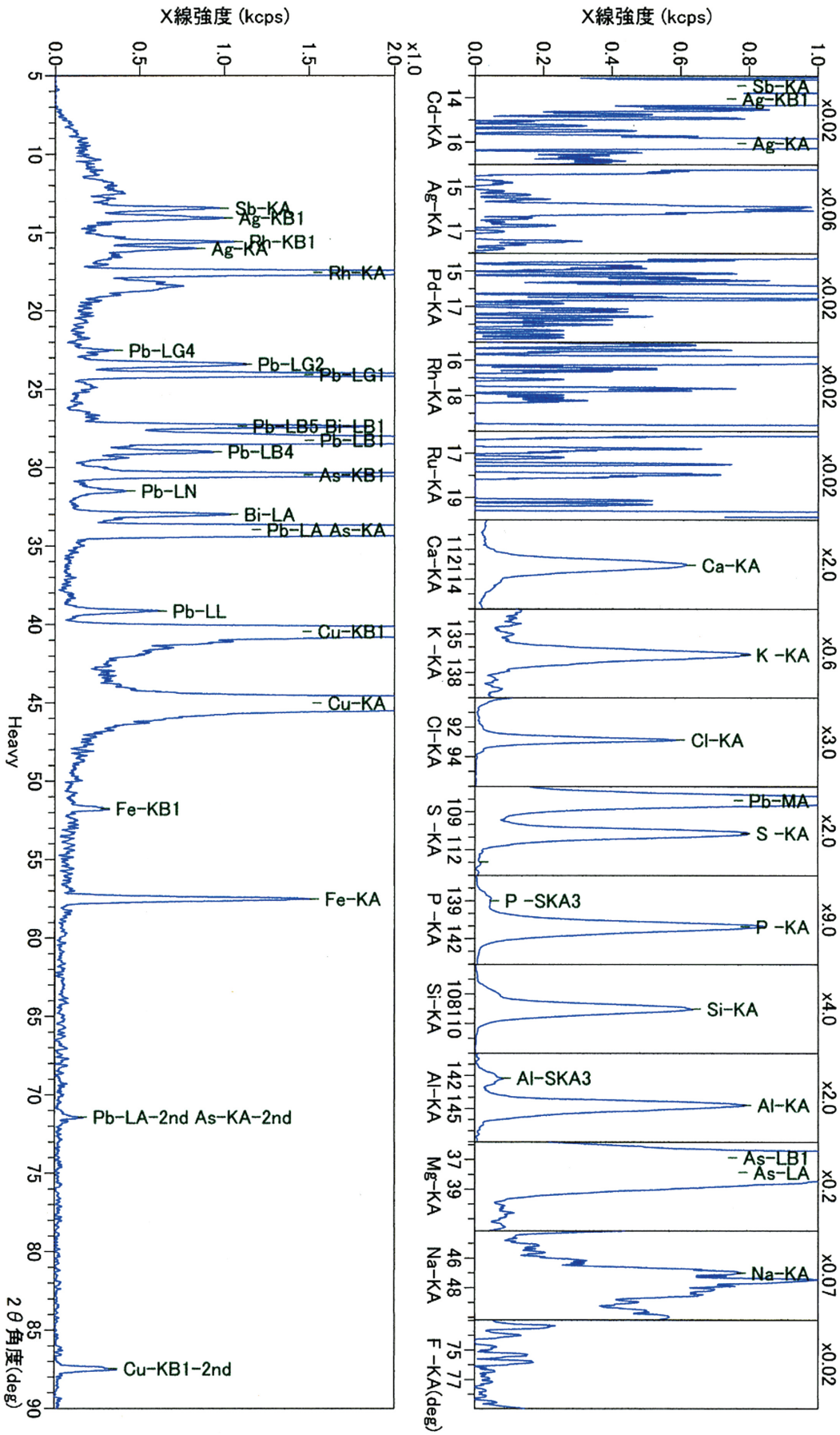


図 18　No.15 の分析データ

付篇4

見島ジーコンボ古墳群第154号墳補遺

横山　成己

1. 石室実測図

本書に収録した見島ジーコンボ古墳群第151号墳出土資料の調査過程において、山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の内容不明図面ファイルの中から『見島総合学術調査報告』に掲載されたトレース原図が発見された。昨年度刊行した第154号墳[註1]のトレース原図も発見されたため、ここに掲載する(図2)。

『見島総合学術調査報告』第154号墳石室実測図(435頁第34図)には、遺物出土状況とともに番号が配されているが、番号に対するキャプションが脱落しており、遺物の出土地点が不明であった。トレース原図にはキャプションが付されていたため、ここに「床面出土」とされた資料群の出土地点が確認された。以下、『見島ジーコンボ古墳群第154号墳出土資料調査報告』に掲載した遺物との照合作業を行う。

番号1は「土師器」とされる。H8～11[註2]はいずれも土師器坏であるが、石室南西中央部に描かれた土器群には須恵器らしき形状のものも混在している。**番号2～5**は「須恵器」。図からは器種が特定できない。**番号6**は管玉。Yb1の管玉と見られる。**番号7・8**は小玉。Yb2・Yb3が該当するようだが、**番号7**には2点の小玉が確認されるため、もう1点小玉が存在していたことになる。**番号9・10**は歯。9点程度存在したようであるが、所在不明である。**番号11**は鉄刀。床面出土との注記があったHi74・Hi77がこれに該当するのであろうか。**番号12**は銅環。『見島総合学術調査報告』**図版29の5**に該当する。**番号13**[註3]は鐔。遺物は環状に描かれているが、同様の資料は確認できていない。床面出土と注記された半円形の鉄製品Hi78がこれに該当するのであろうか。**番号14**は鉄鏃。萩博物館、山口大学埋蔵文化財資料館に所蔵される多量の鉄鏃群Hi1～71、Yi1～38のいずれかに該当するものと思われる。

2. ガラス小玉

山口大学所蔵の見島ジーコンボ古墳群第154号墳出土資料中には、管玉1点とともにガラス小玉3点が存在した。ただし、ガラス小玉に関しては「青色小玉は吉田遺跡出土か」との注記が存在したため、昨年度報告では意図的に出土資料から省いたが、この度の発見により第154号墳出土品であることが確実となった。以下に図・写真を公開し、「MJ154 Yb4」として登録する。

【註】

1)横山成己(2011)『見島ジーコンボ古墳群第154号墳出土資料調査報告』, 館蔵資料調査研究報告書1, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

2)註1文献に付した遺物番号による。特に断りがない限り、以下同様。

3)トレース原図には12と14との間に「鐔」とのみ記され、番号が付されていなかったが、13番であることは明瞭である。

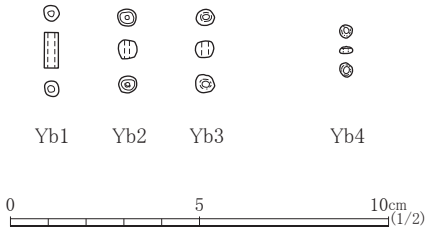


図1　第 154 号墳出土玉類実測図

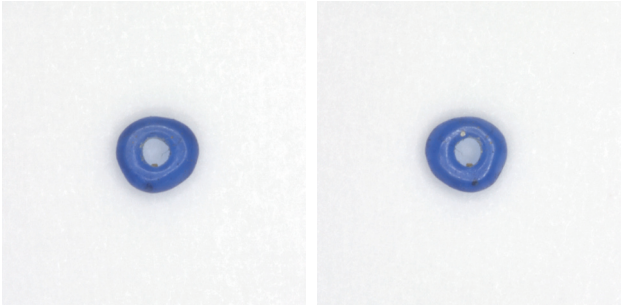


写真1　第 154 号墳出土ガラス小玉 Yb4写真

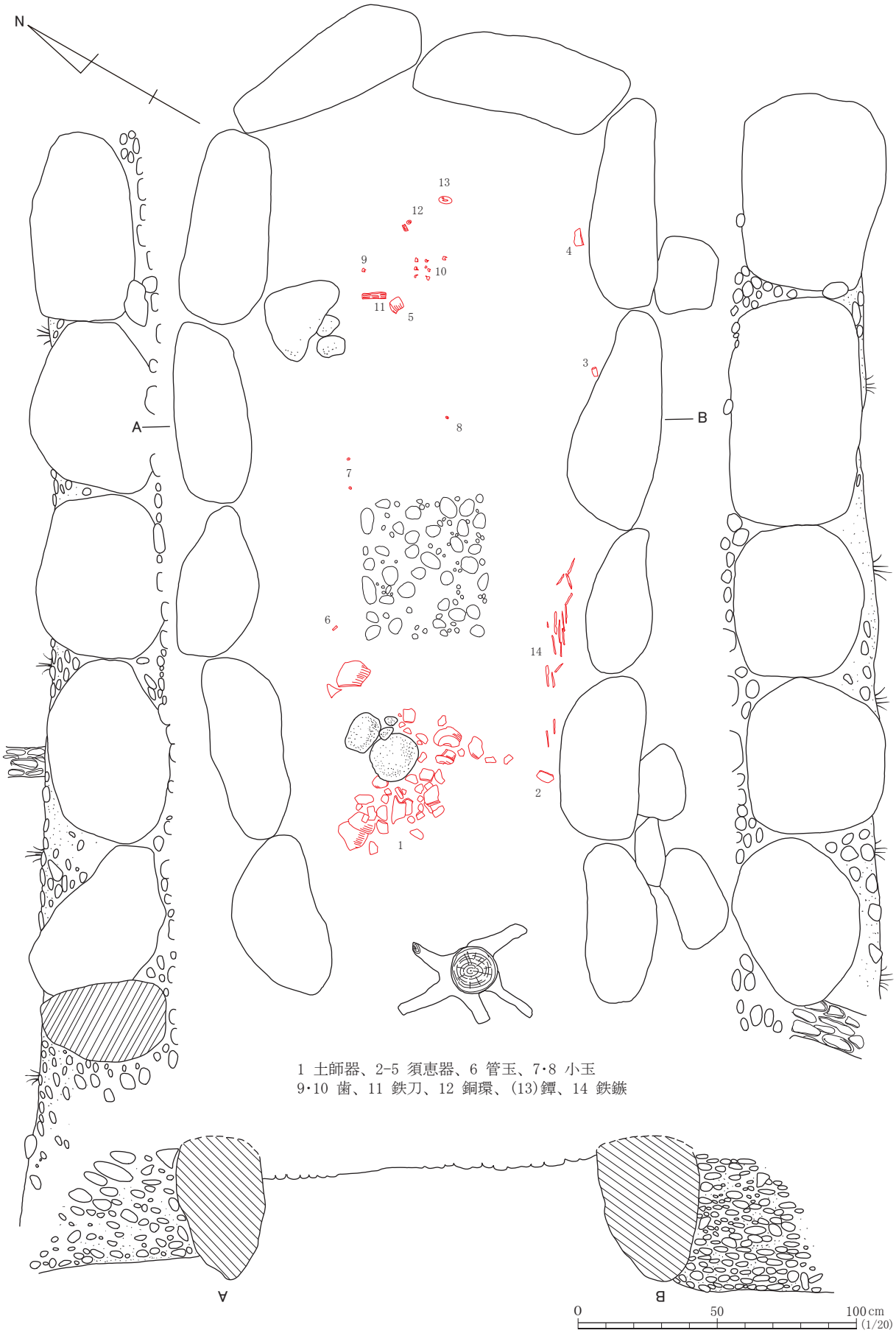


図2　第154号墳石室実測図

館蔵資料調査研究報告書2

見島ジーコンボ古墳群

第151号墳出土資料調査報告

平成24年3月16日

編集　山口大学埋蔵文化財資料館

発行　山口大学

〒753−8511　山口市吉田1677−1

印刷　(有)三共印刷

〒759−0204　宇部市大字妻崎開作1953－8